

# 板付

県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集



1977

福岡市教育委員会

正 読 集

	訓	正		訓	正
2風 9行目	草場家一	草場家一	御歴 34行目	唐紙	唐紙
当風 20行目	胡基生	胡基生	99度 30行目	丹霞灰	丹霞灰
竹筒 32行目	しおし	しおし	102度 29行目	台形壁直す者	台形壁直す者
招致 11行目	若り入まれ	被り入まれ	32行目	ノ内	ノ内
真空		火 空虚	106度 7行目	理、存	鏡 存
抑度 12行目	あひ方。北	あひ方。氣室附照燈	118度 4行目	継加工	継加工
引負 2行目	船子印取	船子印取	注)	木水 小林	木水 小城
引度 22行目	29	落2度	109度参考文献	承承相應	承承相應
引締合	深締合點	深締合點			
正規 23行目	筋成規	筋成規			
沃及 11行目	5cm	1.5cm			
12行目	石炭酒を吸候	石炭酒吸候			
筋付本	縫 番	縫 番			
引通	通入	通入			
引物語	堅 織	堅 織			
御歴 4行目	タ	タ			
15行目	経學書	経學書			
26行目	網らぐまれ	網らぐまれ			
引領 1行目		主領下ル			
引箇 14行目	通ひたる	通ひたる			
15行目	上 端	上 端			
26行目	タ	タ			
引良 34行目	タ	タ	タ		

# 板付

県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集

1977

福岡市教育委員会

## 序 文

福岡市と筑紫野市を結ぶ県道「板付・牛頭・筑紫野線」は、交通量の増大に伴い、早くから拡幅が計画されておりましたが、路線が板付遺跡の中心部を通過しているため、拡幅に伴う遺跡の破壊が憂慮されておりました。

福岡市教育委員会では、文化庁・建設省をはじめ関係方面と協議をかさね、そのご理解とご協力により路線を一部変更し、遺跡の中心部を迂回して建設されることになり、今回調査を実施したものです。

発掘調査の結果、弥生時代前期の貯蔵穴群・中期の住居址・井戸遺構等の生活址が確認され、環溝遺跡との関係や板付丘陵における弥生時代集落の構造の解明に資するところが大きいと考えます。

これは、建設省、福岡市土木局、地元の方々の埋蔵文化財に対する深いご理解とご援助の賜物であり、深甚なる謝意を表するものであります。

本報告書がより多くの方にご活用いただき、文化財保護の一助となり、学術研究の分野でも役立つことを願うものであります。

昭和52年3月

福岡市教育委員会

教育長 戸田成一

## 本文目次

序 調査地と調査経過.....	
<b>第1章 A1~4、B1区.....</b>	
I 調査概要.....	3
II 袋状竪穴.....	3
III 竪穴遺構.....	46
IV 小竪穴群.....	48
V A3区土器群.....	49
VI A1~A3区表土層出土遺物.....	51
✓ VII まとめ.....	52
<b>第2章 A4区.....</b>	
I 調査概要.....	54
II 弥生時代の遺構.....	54
III 古墳時代の遺構.....	67
IV 歴史時代の遺構.....	70
V その他の遺構・遺物.....	73
VI まとめ.....	77
<b>第3章 県道調査のまとめ.....</b>	78
一付編—板付遺跡出土の異形土製品.....	79

## 図版目次

PL I	板付遺跡全景（航空写真）.....
PL II	A-1・2区発掘作業風景.....
PL III	A-1区遺構出土状態.....
PL IV	A-1区遺構出土状態.....
PL V	A-1区遺構出土状態・A-3区調査風景.....
PL VI	B-1区調査風景・B-2区：田端遺跡推定地.....
PL VII	A-1区第1号袋状竪穴・A-1区第4号袋状竪穴.....
PL VIII	A-1区第3号袋状竪穴出土石燃・第4号袋状竪穴出土甕・A-2区第5号袋状竪穴.....
PL IX	A-1区第3号袋状竪穴出土石燃・第4号袋状竪穴出土甕・A-2区第5号袋状竪穴.....
PL X	A-2区第6号袋状竪穴・A-2区第8・10号袋状竪穴.....
PL XI	A-2区第8号袋状竪穴土器出土状態.....
PL XII	A-2区第8号袋状竪穴・A-2区第8号袋状竪穴出土甕.....
PL XIII	A-2区第8号袋状竪穴出土甕.....
PL XIV	A-2区第8号袋状竪穴出土遺物.....
PL XV	A-2区第9号袋状竪穴・A-2区第10号袋状竪穴.....

PL. XVI	A-3区第11号袋状竖穴・A-3区第11号袋状竖穴出土石器・A-3区第11号袋状竖穴出土炭化米.....
PL. XVII	A-3区第12号袋状竖穴・A-2区第13号袋状竖穴.....
PL. XVIII	A-2区第13号袋状竖穴・A-2区第13号袋状竖穴出土石器.....
PL. XIX	A-2区第14号袋状竖穴・第6号竖穴.....
PL. XX	B-1区第15号袋状竖穴.....
PL. XXI	B-1区第15号袋状竖穴・A-1・2区第14号袋状竖穴出土石器・B-1区第15号袋状竖穴出土石器.....
PL. XXII	B-1区第16号袋状竖穴.....
PL. XXIII	B-1区第16号袋状竖穴東側段状部分・B-1区第16号袋状竖穴出土石器.....
PL. XXIV	B-1区第17号袋状竖穴.....
PL. XXV	B-1区第17号袋状竖穴出土状态.....
PL. XXVI	A-1区第2号竖穴・A-1区第6号竖穴.....
PL. XXVII	A-1区小竖穴群・A-1・2区出土石器.....
PL. XXVIII	A-1区道構出土状态・A-4区道構発掘調査風景.....
PL. XXIX	A-4区第1号住居址・A-4区第100号小竖穴.....
PL. XXX	A-4区第103号小竖穴出土状态・A-4区第103号小竖穴石器出土状态.....
PL. XXXI	A-4区第7号竖穴・A-4区第8号竖穴.....
PL. XXXII	A-4区第1号井戸址・A-4区第1号井戸址出土壺.....
PL. XXXIII	A-4区第1号井戸址出土壺.....
PL. XXXIV	A-4区第1号井戸址出土土甕・猪の骨.....
PL. XXXV	A-4区第1号土塙.....
PL. XXXVI	A-4区第1号小竖穴遺物出土状态・A-4区石庵丁出土状态.....
PL. XXXVII	A-4区第107号小竖穴石器出土状态・A-4区第2号井戸址状道構土製品出土状态.....
PL. XXXVIII	A-4区出土石器.....

### 擇 図 目 次

第1図	県道付近地形図(別添).....	第10図	第6号袋状竖穴・出土遺物実測図.....	14
第2図	県道路網内遺構出土状況図(別添).....	第11図	第8号袋状竖穴出土状況図.....	15
第3図	第1号袋状竖穴出土状況図.....	第12図	第8号袋状竖穴出土遺物実測図1.....	16
第4図	第1号袋状竖穴出土遺物実測図.....	第13図	第8号袋状竖穴出土遺物実測図2.....	18
第5図	第2号袋状竖穴出土状況図.....	第14図	第8号袋状竖穴出土遺物実測図3.....	20
第6図	第2号袋状竖穴出土遺物実測図.....	第15図	第9号袋状竖穴・出土遺物実測図.....	21
第7図	第3号袋状竖穴・出土遺物実測図.....	第16図	第10号袋状竖穴・出土遺物実測図.....	22
第8図	第4号袋状竖穴・出土遺物実測図.....	第17図	第11号袋状竖穴・出土遺物実測図.....	24
第9図	第5号袋状竖穴・出土遺物実測図.....	第18図	第12号袋状竖穴第1・2号土塙出土状況図	26

第19図	第12号袋状豊穴・出土遺物実測図	28	第38図	A.4区第1号住居址出土遺物実測図(2)	56
第20図	第13号袋状豊穴・出土遺物実測図	30	第39図	A.4区第7・8号豊穴および出土遺物実測図	57
第21図	第14号袋状豊穴・第6号豊穴出土状況図	31			
第22図	第14号袋状豊穴出土遺物実測図	32	第40図	A.4区第1号土壙および出土遺物実測図	59
第23図	第15号袋状豊穴出土状況図	33	第41図	A.4区第1号井戸址および出土上器実測図 (1).....	60
第24図	第15号袋状豊穴出土遺物実測図(1)	34	第42図	A.4区第1号井戸址出土土器実測図(2).....	61
第25図	第15号袋状豊穴出土遺物実測図(2)	36	第43図	A.4区第1号井戸址出土土器実測図(3).....	63
第26図	第15号袋状豊穴出土遺物実測図(3)	38	第44図	A.4区第1号井戸址出土土器実測図(4).....	64
第27図	第15号袋状豊穴出土遺物実測図(4)	39	第45図	A.4区第1号井戸址出土土器実測図(5).....	65
第28図	第16号袋状豊穴出土状況図	40	第46図	A.4区第1号井戸址出土土器実測図(6).....	66
第29図	第16号袋状豊穴出土遺物実測図(1)	42	第47図	A.4区第1号土壙および出土遺物実測図.....	68
第30図	第16号袋状豊穴出土遺物実測図(2)	44	第48図	A.4区第2号土壙および出土遺物実測図.....	69
第31図	第17号袋状豊穴・出土遺物実測図	45	第49図	A.4区第1号小豊穴および出土遺物実測図	71
第32図	第1~6・9号豊穴出土遺物実測図	47	第50図	A.4区第2号井戸址および出土遺物実測図	72
第33図	A.1~A.2区小豊穴群出土遺物実測図	48	第51図	A.4区各遺構出土遺物実測図.....	73
第34図	A.3区上器群実測図	50	第52図	A.4区各造構および表土層出土遺物実測図	74
第35図	A.1~A.3区表土層出土遺物実測図	52	第53図	A.4区表土層出土遺物実測図.....	75
第36図	A.4区遺構配図(別添)		第54図	出土地点および異形土製品実測図.....	80
第37図	A.4区第1号住居址および出土遺物実測図 (1).....	55	第55図	出土土器実測図.....	81

## 表 目 次

第1表 A.1、A.2区小豊穴表.....53

### 一 資料

- 本報告書は、福岡市教育委員会が1976年度に実施した県道板付・牛頭・筑紫野線建設に伴う発掘調査報告書である。
- 造構・遺物実測図は調査担当者、参加学生により、製図は主に各章担当者が当たった。
- 調査においては山口県秋芳台科学博物館太田正道先生に指導助言を得た。
- 写真は、造構を横山、沢、原。 遺物を沢が担当した。
- 本報告の執筆分担は本文末尾に示した。編集は山口の協力を得て沢、横山が行なった。



## 序　調査地と調査経過

本調査は県道板付 - 牛頸 - 篠紫野線（505号）に伴うものである。同路線は南北長さ約600m、東西幅200~100m、標高12m前後をはかる板付丘陵のほぼ中央部を東西に横切り、通津寺を周囲する環溝遺跡の南端から約10mの地点を通過する。

調査は対象地（路面幅8.5~9m、延長127m）の東側部分から行ない、順次便宜的に地区名を付した（A1~4区、B1区 第1、2図参照）。調査地は各区ともに家屋建設、土取り等による旧地形の改変が著しく、丘陵中央部（標高11.7m）にあるA2区は平坦に整えられ、両端部は段落ちとなるなど同様に削平がみられるが、西側斜面にあたるA4区は他区に比べて影響が少なかったと思われる。

以下調査区東側より各区の成果概要を記す。

1 B1区 調査区東端部にあたる。同区に近接する小字田端では1916年に弥生前期末の斐棺とともに細形銅劍、細形銅矛各三口が発見されている〔中山1917〕事から同時期の斐棺墓地の存在が予想されたが、これはなく弥生時代前期の袋状竪穴3基が検出されたにとどまった。

2 A1区 本区は終戦直後の数年間同地で機能した留置場の建設による破壊が大である。弥生時代前期の竪穴4基、柱穴群等が検出された。

3 A2区 丘陵の頂上部分に相当すると考えられ、環溝外の南方約10mにあたり、環溝との関連で生活遺構の存在が注目された。調査では弥生前期の袋状竪穴6基、柱穴群が確認された。

4 A3区 丘陵西側の最も削平の著しい部分にあたる。大量の炭化米を出土した弥生中期の袋状竪穴等計2基、土塙2基が検出された。

5 A4区 丘陵の西側斜面の裾部に近い。この地区では弥生時代前期の明らかな生活址はなく、中期住居址、井戸址、柱穴群、土師器出土の竪穴遺構等が検出された。

調査は51年7月から8月までの期間に実施した。

調査は福岡市教育委員会社会教育部文化課板付遺跡調査事務所で担当し、現場作業を同事務所の沢皇臣・山口讓治・横山邦継、諸事を橋崎幸利・草場九男・安田正義が担当した。

なほ、路線内出土石器類の材質鑑定は秋芳台科学博物館学芸員（理学博士）太田正道先生に依った。

調査に当っては下記の方々から多くの援助を受けた。記して感謝する。（敬称略）

中原志外顧・下條信行（九州大学考古学研究室）・後藤直（福岡市立歴史資料館）・江浜明徳（博多工業高校教諭）

地元 小西利三・中牟田久人

調査作業員 大部茂久・広田熊雄・中牟田顯歎・副島三好・屋山利久・岸原富士男  
川畠淳二・今川キチエ・永松伊都子・山本敏子・岸原松枝・岸原春子・菅谷初子  
江嶋光子・安高久子・金沢淑子・木下キミ子。

調査員 原俊一・吉田悟。

参加学生 岩崎次郎（九大院生）・小林義彦・橋本寛史・河本ひとみ（以上明治大）。

松村明子（明治大院生）森瀬圭子（奈良女子大）草場啓一・奥村俊久・吉留秀敏（以上別府大）

平山正（九産大）。

整理作業 木村良子・田村キミ子。

[中山1917] 中山平次郎「銅錆・銅劍の新資料」『考古学雑誌』第7号 東京

# 第1章 A-1~3・B-1区

## I 調査概要

調査は路線の幅8.5~9m、延長127mについて実施し、発掘の進行にあわせて東側より西側に従ってB1、A1~A4と地区名を付し、遺構の番号もこれによった。

調査区はいずれも削平が著しく、住居址等の比較的浅い遺構は失なわれた可能性が大きい。またこの為か遺構の分布は散漫である。

B1区では弥生時代前期後葉の円形袋状竪穴3基（第15~17号袋状竪穴）と近世以降の陶磁器類を出土する円形竪穴（第9号竪穴）が検出された。他に柱穴等の遺構はない。

A1区では弥生時代前期前葉~後葉にかけての隅丸長方形袋状竪穴4基（第1~4号袋状竪穴）、中世以降の竪穴（第1~5・6号第2~4号竪穴）と小竪穴（柱穴）群が知られた。また他に時期不詳の竪穴（第14号袋状竪穴）、中世以降の竪穴（第1・5・6号竪穴）を検出した。

A2区は丘陵の最高部にあたり、弥生時代前期後葉の袋状竪穴6基（第5~9・13号袋状竪穴）と東側に小竪穴（柱穴）群が検出された。また第5号袋状竪穴内より先上器時代の所産と考えられるナイフ形石器の出土があり、同期の居住の可能性がある。

A3区は丘陵西側にあたり、弥生時代前期~中期初頭の袋状竪穴（第11・12号袋状竪穴）と中世以降、近世以降の土塙2基を検出した。なお第11号袋状竪穴では大量の炭化米の出土がある。

なおA4区については項を改めて述べる。

以下検出された各遺構、遺物について詳述することにする。

## II 袋状竪穴

### 第1号袋状竪穴（第3図）

本竪穴はA区北側に位置し、第4号竪穴の西側隅を切って營まれている。平面は1.9×1.6m程度の不整な方形を呈し、約0.7mを残す壁面は各れも頭著な袋状を成している。また北壁に面して径70cm・深さ20cm程度の円形付設遺構があって、床面隅より更に奥に掘穿がなされているが、特に遺物の出土はない。そして竪穴全体でも遺物は床面から若干の土器類細片、黒曜石製石核・剥片數点の出土があったに過ぎない。

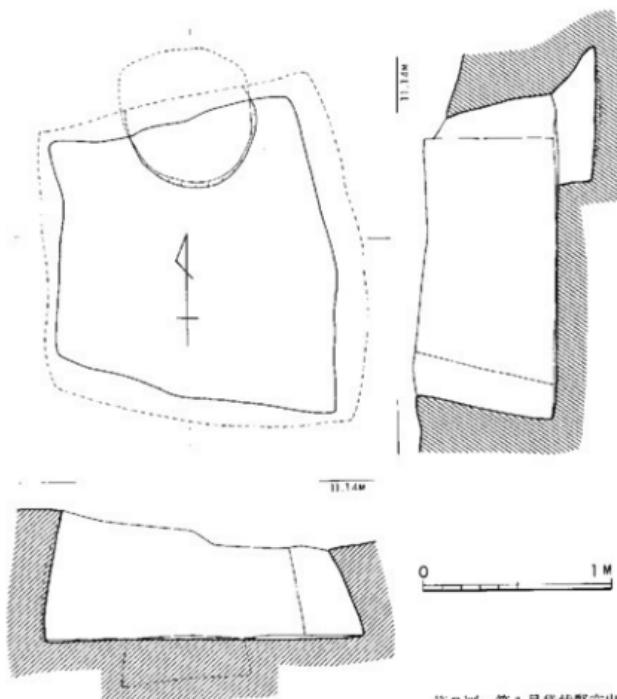
### 出土遺物（第4図）

1は外面に横位の条痕調整を施した甕。外面赤褐色、内面淡褐色を呈する。2は口唇直下に刻目突帯を付けた甕。刻目は下方に押引されて突帯からはみ出している。外面は横刷毛目調整で暗褐色を呈する。3も口唇直下に鈍い刻目突帯を付けた甕。内外面とも横なで調整で、淡赤褐色。以上は各れも胎土精成され、焼成良好である。夜臼式土器である。4は外面に横窓研磨を加えた高环々部破片。内面丹塗り。胎土は非常に精良で、焼成堅緻。5は口唇一杯に刻目を施す甕。内外面とも磨滅が激しく、灰黒色を呈する。6は口唇下方に細い刻目をもつ甕。内外

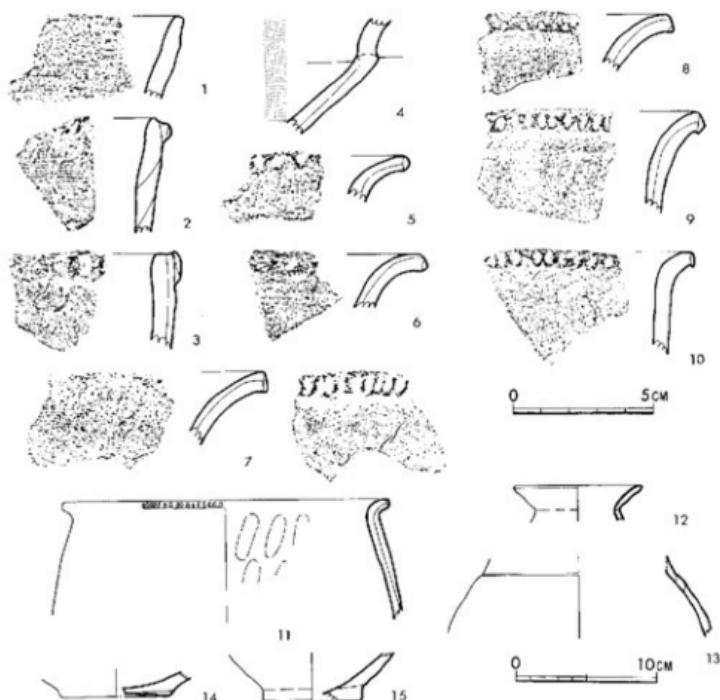
面とも横なで調整を加え、淡赤褐色。7も口唇下方に刻目をもつ甕。外面は縦、内面横の刷毛目調整で両面とも淡褐色。8は口唇下端に細かい刻目を施した甕。内外面とも横なで調整で、赤褐色。9も口唇下方に刻目をもつ甕。外面は暗褐色。内面淡赤褐色を呈し、両面とも横なで調整。10は口唇一杯に刻目を施した甕。内外面暗褐色を呈し、両面とも横なで調整。11は小さく外反する口縁をもち、胸部の脹らみの大きい甕。刻目は口唇一杯に付けられる。外面暗褐色で、なで調整、内面は指押えが顕著で、淡褐色を呈する。口径23.4cm。以上の甕は各れも胎土に石英砂を含み、焼成は良好であり、板付II式に含まれる。12は薄手の短い口縁部を有する甕。外面は磨き調整を加え、胎土は非常に精良、焼成良好。淡褐色を呈する。13は下端部に一条の沈線を巡らす甕頸部。外面は入念な横位の窓研磨、内面は横なで調整で、両面ともに赤褐色を呈する。径7.6cm、内面淡褐色を呈し、中央部に指押えがみられる。径7cm。これらは板付II式に属する。

以上の出土遺物から本竪穴は弥生時代前期後半に營まれたと考えられる。

(横山)



第3図 第1号袋状竪穴出土状況図

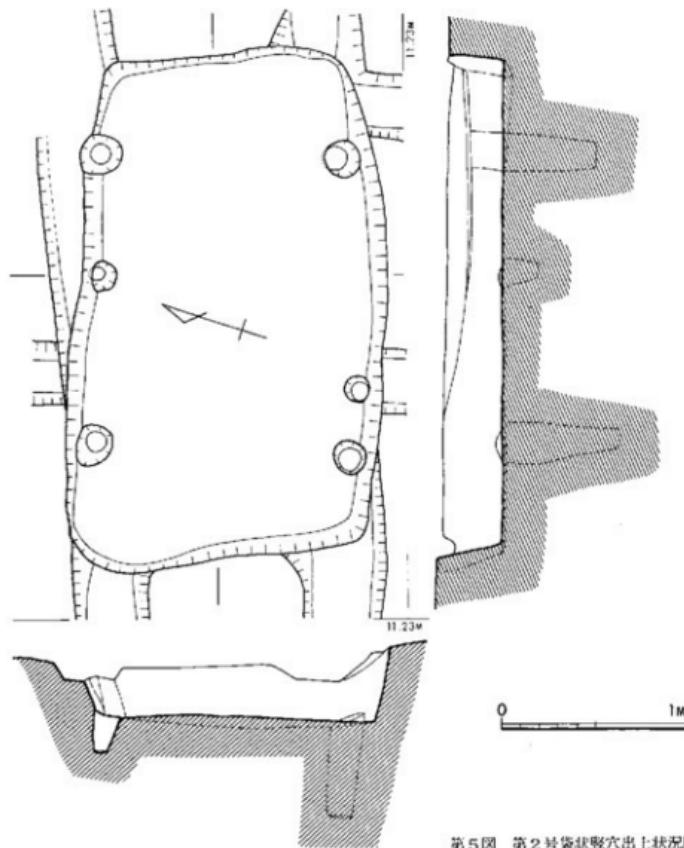


第4図 第1号袋状竖穴出土遺物実測図

#### 第2号袋状竖穴（第5図）

本堅穴はA-1区に位置し、長軸を略東西に向けて第3号堅穴と並列している。平面は長幅が $2.5 \times 1.5$ m程度の隅丸長方形を呈し、壁は30cmを残す。また南・北壁に沿って各々3個の小ピットがある。小ピットは柱穴と考えられ、いずれも径15~20cm弱であるが、両端部のものは若干大型で床面より深さ50~60cmをはかり、外覆施設の存在を考え得る。遺物はいずれも破片となったものが多いが、土器では、夜臼式土器壺口縁11点。弥生式土器前期壺口縁9、同壺8、高環脚2、鉢1点である。また石製遺物では紡錘車1、敲石1、砥石（粗粒砂岩）1、黒曜石製剝片（いずれも自然面打面）5点などである。また剝片のうち色調が乳白色を呈し、大分県姫島産黒曜石に類似するものが1点ある。また柱穴内では夜臼、弥生式前期土器の破片が若干出上している

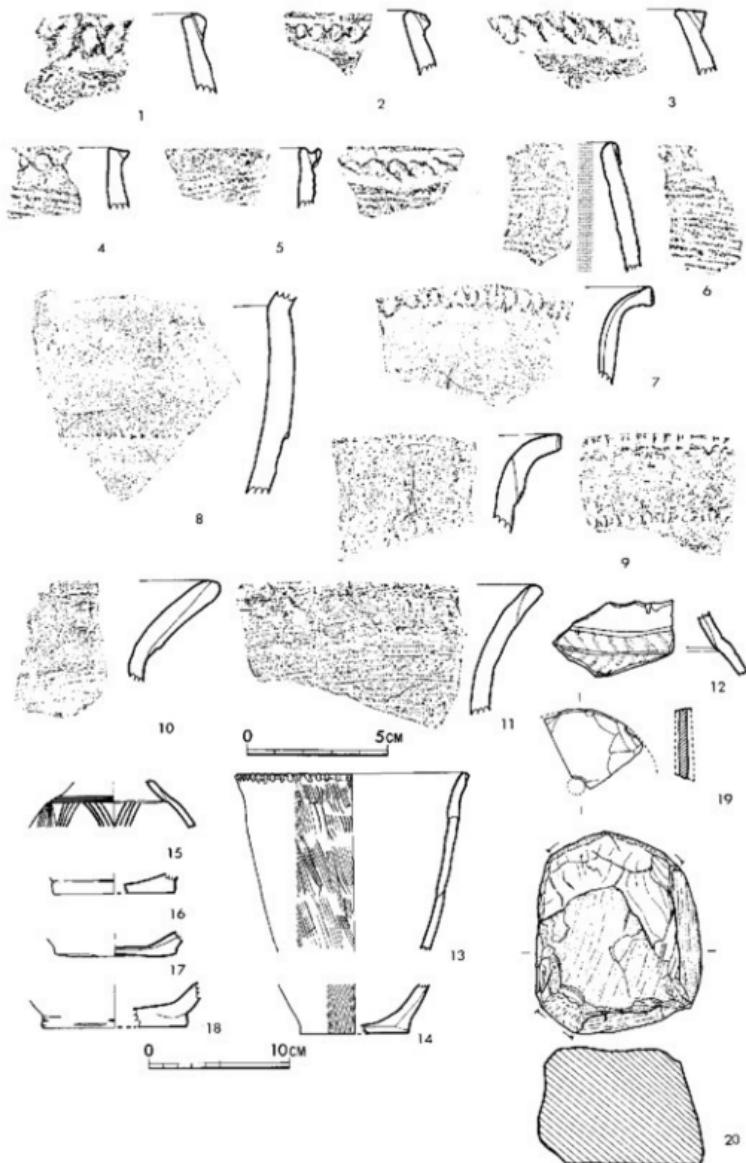
(草場伸一)



第5図 第2号袋状竖穴出土状況図

#### 出土遺物（第6図）

**土器** 變形土器1～6は夜臼式土器甕である。1～5はいずれも口縁部に直接粘土を貼付け口唇を形造っている。1は幅ひろく丹念な刻目、外面暗褐色、内面赤褐色を呈し、横なで調整。2は浅い刻目を施し、内外面暗褐色を呈し、いずれも横なで調整。3は口縁が小さな平坦面をなし、刻目は深い。内外面とも褐～暗褐色を呈し、横なで調整を加え、外面に煤付着。4も同様の口縁を有する。外面は黄褐色を呈し、丹塗りで横位条痕調整。内面赤褐色。5は内外面とも赤褐色を呈し、横位条痕調整。6は口縁の低平な帯に狭長な刻目を施した甕。外面黒色、内面褐色であって、丹塗り。いずれも横位条痕調整を施す。これらは胎土に石英砂の混入は多くなく、焼成も悪くない。7は口唇一杯に端正な刻目を付した甕。内外面とも暗赤褐色を呈し、



第6圖 第2号袋状竖穴出土遺物実測図

外面横なで。8・9は口縁下部～胴上部を肥厚させ、端部に刻目を付した壺。8は内外面褐色を呈し、外面は幅1.6cm程度の工具による細かい綴刷毛目調整を加え、煤が付着。内面には指揮がみられる。9は口唇一杯に幅広く、深い刻目を施す。内外面とも暗褐色を呈し、細い刷毛目調整。これらは板付II式である。13は胴部の脛らみが無く、11縁部の外反度の小さい壺。口縁部の刻目は小型の円棒状のもので口唇一杯に丁寧に付される。器面は粘土接合部分での凹凸が著しく、外面と内面口縁部は粗い刷毛目調整で、内面はそれ以上が構なで、外面は暗褐～黒褐色。内面は上部が黒色、下部は暗褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成は悪くない。口径16cm。14は壺底部。外面赤褐色で、細い綴刷毛目調整。内面は黒～暗褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。底径7.6cm。

壺形土器 10は外面を若干肥厚させた口縁部下端に一条の沈線を付した壺。内外面とも暗赤褐色を呈し、丹塗り。外面は竈状のものによるなで調整で、煤付着。胎土・焼成良好。11は均一な器壁をもち、素直に外反する壺、内外面とも褐色を呈し外面は竈状のものによる横なで。胎土・焼成良好。12は壺頸部。内面は接合部が段状をなす。外面は棒状工具により3本の横位沈線を施した後に黒色顔料で沈線間に羽状文を描き、これを有軸羽状様に仕上げている。内外面とも褐色を呈し、外面竈磨き。胎土・焼成とも非常に良好。15も頸部内面の接合部に段を有する。外面の頸部には3本の沈線を付し、肩部にかけて複線(4本)八字形文を描いている。内外面褐色を呈し、外面竈磨き。胎土・焼成とも非常に良好。16～18は壺底部。16・18は円盤貼付け手法をよく残している。16は内外面褐～赤褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。底径10cm。17は外面黒色で竈磨き。内面赤褐色を呈する。焼成良好。底径8.4cm。18は内外面とも灰色を呈し、外面竈磨き。胎土は精選され、焼成不良。径8.6cm。

石器 19は紡錘車。全体に剝落が著しい。復元直径5.8cm。孔径0.6cm。变成岩製。20は敲石。三部变成岩角礫を使用し、周縁は打撃によって潰れている。重量260g。

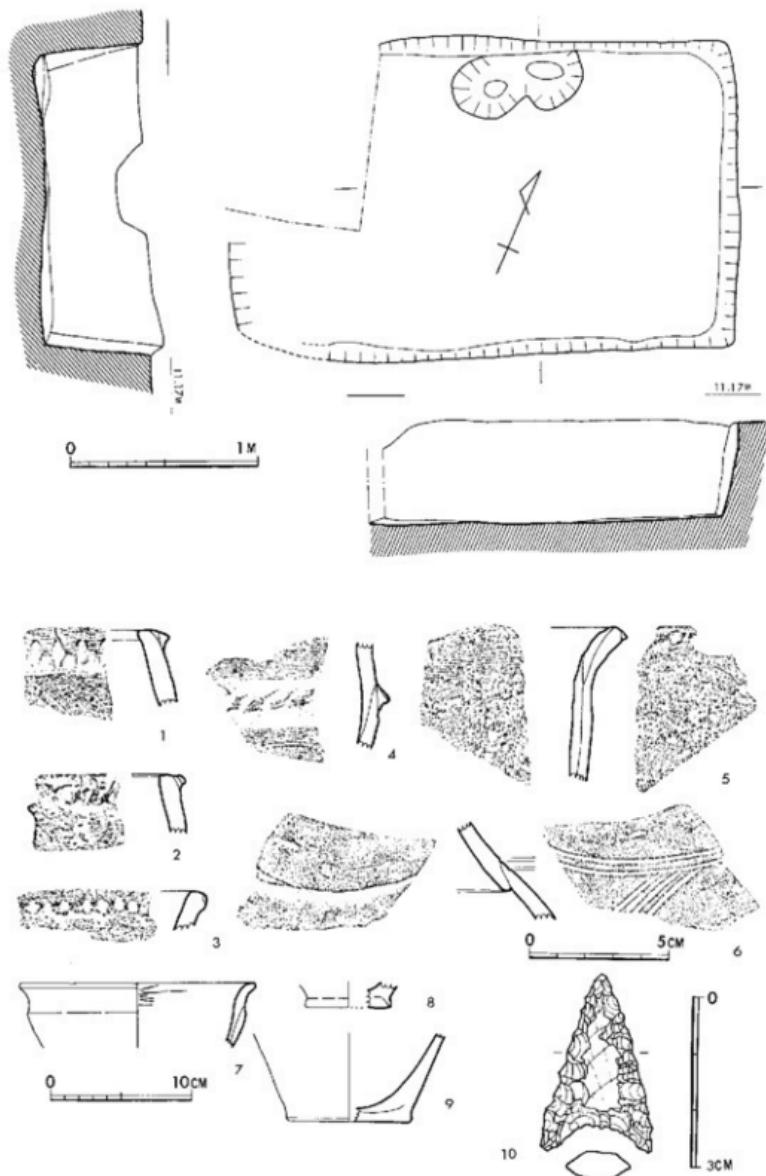
以上出土遺物によって本堅穴は弥生時代前期前葉～中葉に営まれたと考えられる。(横山)

### 第3号袋状竪穴(第7図)

本堅穴はA-1区に位置し、赤褐色ロームに掘込まれた竪穴で、長幅が2.8×1.7mの平面隅丸長方形を呈し、近代の造構によって、西北・西南隅を切られ、西側壁は40cm程度、他でも50cm程度が残っている。床面はゆるい凹凸があり、壁はほぼ直立している。北壁際に深さ約6cmの皿状窪みが2個あるが、造構の性格は不明である。遺物の出土量は多くない。床面に近い部分では夜臼式土器壺破片の出上が多く、板付I式に相当する壺・壺の破片を若干混じており、上部には板付II式壺破片も出土している。また床面に近く石鐵が出土した。(草場)

### 出土遺物(第7図)

1・2・4は夜臼式土器である。1は内外面ともに褐色を呈する。外面は煤が付着し、細い刷毛目後に横なで調整。刻目は棒状のものを押付けており、深い。2は内外面ともに黒褐色。刻みは細かく、丁寧である。4は胴部破片。内外面ともに赤褐色。器面はともに非常に細い刷毛目調整後に突帯上下を強く横なで。これらは胎土に砂粒の混入少なく、焼成良好。3・4は口縁下端に刻目を付す壺。3は端部が円味をもち、刻目は浅く、丁寧。内外面ともに淡赤褐色。



第7图 第3号袋状穴·出土遗物実測図

5は内外面ともに赤褐色。いずれも細かい刷毛目調整を施し、その後に口縁下を横なで。板付Ⅱ式に相当する。6は肩部内面に接合の段を有し、頸部下端に二条平行沈線を付し、この下に複線山形文を描いている。内外面ともに赤褐色で窓磨き調整。胎土は非常に精成され、焼成は堅密。板付Ⅰ式であろう。7は高环か。緩く反転する短い円縁を持つ。内外面ともに器面の荒れが激しい。内面は上部に横位の条痕を残し、外側も恐らく条痕調整であろう。器色はいずれも赤褐色を呈する。胎土には石英砂の混入は多くなく、焼成良好。夜臼式土器である。口径16.8cm。8は壺底部。円盤貼付底の特徴がみられる。外側暗褐色。内側灰黑色。石英砂の混入少なく、焼成良好。径6cm。9は甕底部。外側胴部暗褐色、底部黒褐色。内面は残滓が付着したものが黒褐色を呈する。外側は甕による縦なで調整で端部は指おさえがみられる。胎土に石英砂の混入多く、焼成は不良。10は腸抉りの大きい凹基無茎式鏡。長さ3cm、最大幅2cm、重量1.7gを有する。黒色黒曜石。

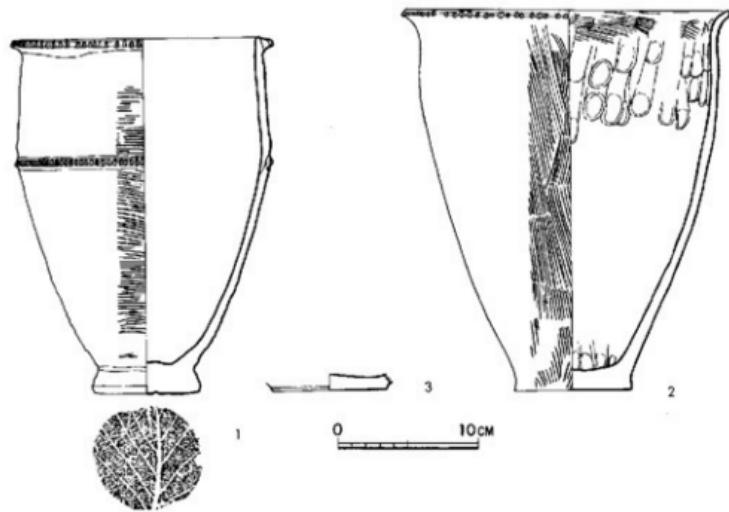
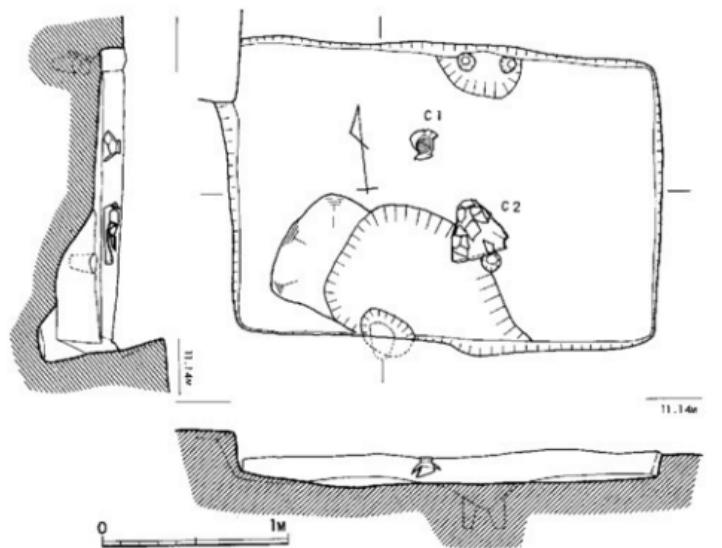
以上1・2・4・6~8など床面付近出土土器からこの竪穴の時期は前期前葉と考えられる。

#### 第4号袋状竪穴（第8図）

本竪穴はA-1区北東部に位置し、西側隅を第1号竪穴によって切られている。平面は長幅が2.2×1.1m程度の隅丸長方形を呈し、壁は15cm内外を残すのみである。北側壁中央部分に沿って長幅45×25cm、深さ約20cmの残い皿状のピットがあり、この中に25cmの間隔をもって径8~10cmの垂直な円形ピットが並列している。この点で少くとも北側壁は垂直に近く立てる可能性があり、また同構造は竪穴への昇降施設と関連をもつかもしれない。また南壁側には深さ20~30cmの不整な二段のピットが知られる。これは出土土器（C-2）がその一部を被覆している点で本竪穴に付設されたものと考えるが、性格については不明であり、特に遺物の出土は無かった。竪穴内での出土遺物は床面に潰れた状態で検出された變形土器（C-1・2）以外では、板付Ⅱ式甕口縁部1、同甕底部1点、砥石破片（砂岩）1、石斧破片（砂岩）1、黒曜石製石核（いずれも自然面打面）4、黒曜石製片8点等である。

#### 出土遺物（第8図）

1はC-1にあたる夜臼式土器である。胴部の屈折が顕著でない甕で、突堤以上は緩く内傾している。口縁部は口唇部に直接粘土を貼付けて形造り、深い整然とした刻口を施している。また底部は木葉痕を有す。器体外側は粗い横位の条痕調整を加え、各々突堤の上下は横なでをしている。底部と胴部突堤との中位以上は厚く煤が付着し、これ以下は赤褐色を呈する。内面は暗褐色で、下部は黒色を呈する。胎土に石英砂の混入少く、焼成は悪くない。口径18.6cm、器高25cm。C-2と共に共伴する。2はC-2にあたる。板付Ⅱ式土器である。全体に磨滅が著しく、口縁部下端に不整な刻目を施した如意状口縁を有する甕で、胴部は緩い腰らみをもつ。外側は粗い縱刷毛目調で、上方は全体に煤が付着し黒褐色、これ以下は明赤褐色を呈する。内面は口縁近くを刷毛目調整した後に横なでを加え、下部は指調整が著しい。胎土には石英粗砂を多く含み、焼成は良好。口径23.4cm、器高27cm。3は円盤貼付手法の退化した甕で、外側を棒状のもので沈線状に強く横なでしている。内外面赤褐色を呈する。胎土精選され、焼成良好。径8cm。



第8図 第4号袋状竖穴・出土遗物実测図

以上の出土遺物から本竪穴の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

(横山)

#### 第5号袋状竪穴（第9図）

本竪穴はA—2区北東側に位置する。平面は長幅が2.1×1.35~1.15m程度の隅丸長方形となる。壁は1m程度を残しており、袋状とならず垂直に立上っている。また北側壁では他の遺構と切り合っているが詳細は不明である。遺物は床面直上を除いて全体に数多く出土しているが、いずれも細片で図に供し得るものは多くない。土器類では夜臼式土器口縁7点、弥生式土器では甕口縁24点、また壺は精成品が多く口縁の細片23点、鉢口縁1点等である。石器類は黒曜石製石錐1点、棒状敲石（砂岩）1点と他に黒曜石利用の石核6点（いずれも自然面打面）、剝片9点等が知られ、また先土器時代の遺物と考えられるナイフ形石器の発見があった。

#### 出土遺物（第9図）

1~4・5は夜臼式土器甕である。1は口縁直下に刻目突帯を付す。外面は横位条痕調整で煤付着。内面は横なでか。両面とも暗褐~黒褐色。2は口縁に直接粘土を貼付けている。口唇の刻目は深く整然としている。褐色を呈し、内面横なで。3も1と同様の口縁を有し、暗褐~赤褐色を呈し、内外面横刷毛目調整。4・6は突帶なく口唇に直接刻目を施す。4は暗褐色を呈し、刻目は幅広く斜めに押付けている。6は外面褐色、内面赤褐色を呈し、両面とも丹塗り。以上の夜臼式土器は胎土に石英砂の混入多いが、焼成良好。5・7~13は弥生式土器である。5は口縁の外側に粘土貼りして小さな平坦口縁の端部に幅広い刻目を付す。褐色を呈する。8は厚手の口唇下端に鋭い工具で押引いた様な刻目を付す。内外面ともに褐色を呈し、横なで調整。9・11は如意棒状口縁を有し、丸味を持った口唇下端には整然とした刻目が付され、内面は緩い縦を持っている。9は内外暗褐~黒褐色を呈し、煤の付着あり。11は外面黒~黒褐色で煤が付着し、内面は褐色で指調整がみられる。10は口縁部を強く横なでした後に細かい刻目を付す。内外面とも暗褐色。以上はいずれも胎土に石英砂の混入多く、焼成は良好である。板付II式に相当する。12は円盤貼付手法のやや退化した壺底部。底部内面は使用によるものか磨滅が激しい、外面は黒色で横窓みがき、内面は暗褐色を呈する。13は小型壺底部か。磨滅が激しい。外面暗褐~黒褐色、内面黒褐色。いずれも胎土精成され、焼成は堅緻である。14は切出型のナイフ形石器。先端部を若干欠損する。打点を基部にもつ剝片の側辺部に刃溝し加工を施している。他の出土剝片類とはバティナを異なる。先土器時代の所産であろう。

以上の出土遺物から本竪穴の時期は弥生時代前期後葉と考えられる。

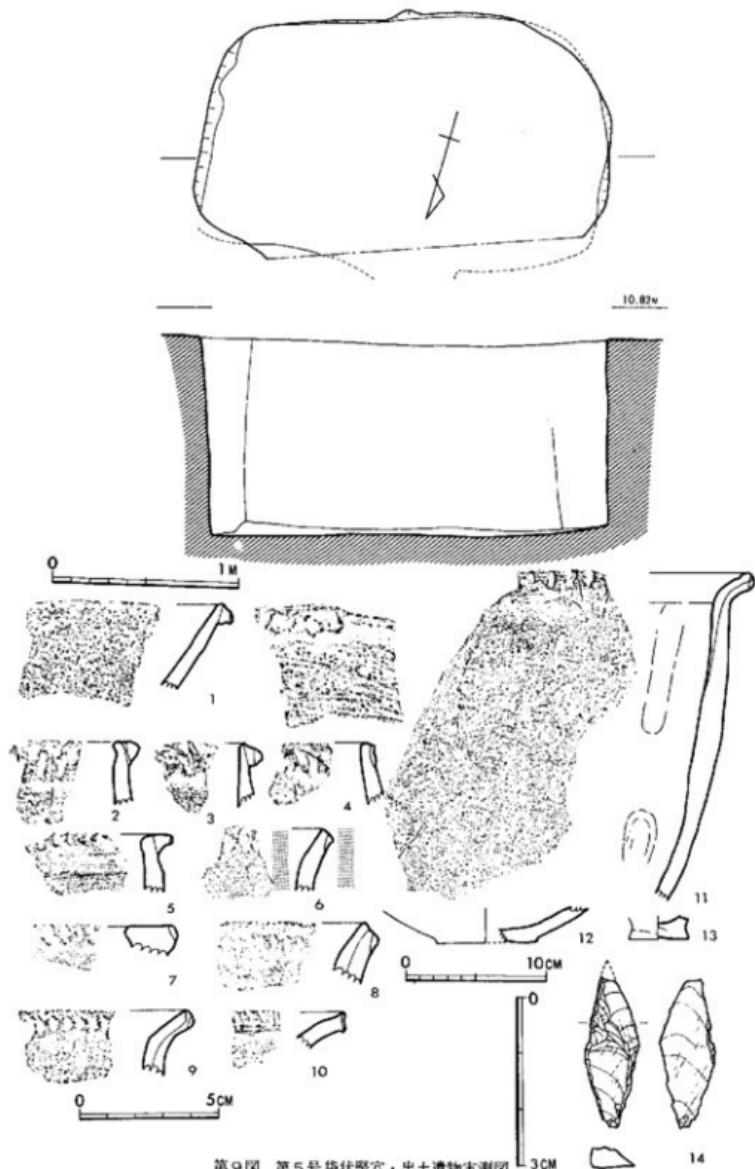
(横山)

#### 第6号袋状竪穴（第10図）

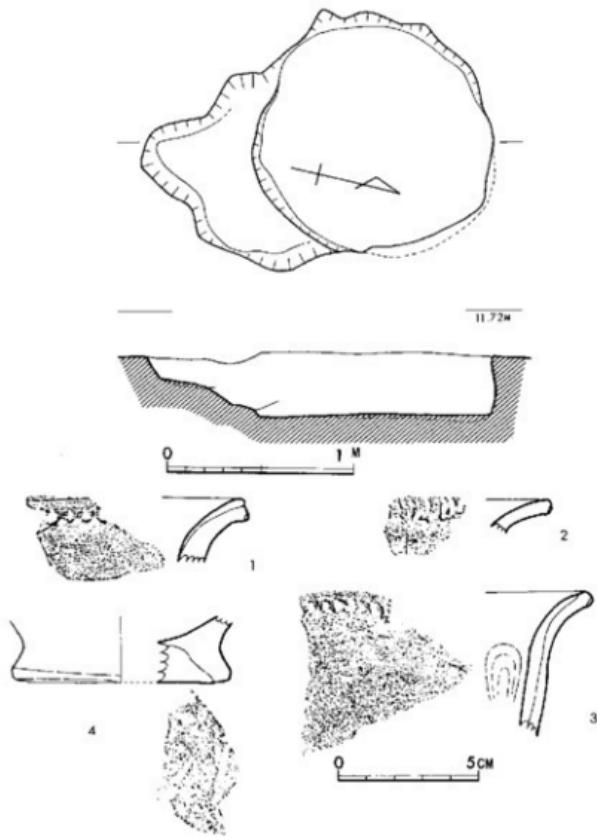
本竪穴はA—2区東側に位置する。平面は径1.2程度の円形であり、南側を他の遺構により切られている。壁面は30cmを残すが、本来は袋状をなしていたものと考えられる。また同遺構は他区検出の竪穴とは規模の点で同一のものとして良いか判らない。出土遺物は少なく弥生式土器甕3点、底部1点である。

#### 出土遺物（第10図）

1~3とも口唇下端に刻目を付す甕。1は内外面とも横なで調整を施し、口唇は著しい。両面とも暗褐色を呈する。2は横なで調整を施し、外面煤付着、内面暗褐色を呈する。3は内外



第9図 第5号袋状竖穴・出土遺物実測図



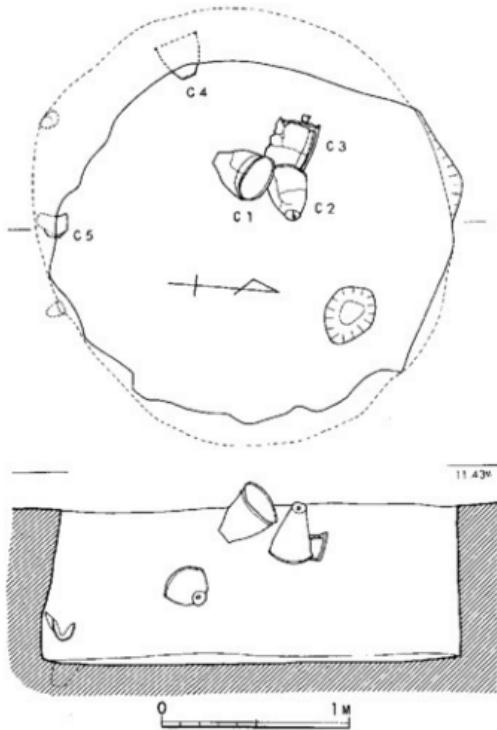
第10図 第6号袋状竪穴・出土遺物実測図

面とも横なで調整を施す。外面は煤付着。内面褐色を呈し、指おさえがみられる。これらはいずれも胎土に石英砂粒の混入は多くなく、焼成も悪くない。板付II式である。4は断面三角形に張出す底部で外側には小棒状の圧痕がみられる。外面は横なで調整で暗褐色、内面赤褐色を呈する。夜臼式土器壺底部であろう。

以上の出土遺物から本竪穴は弥生時代前期後半に営まれたと考えられる。 (横山)

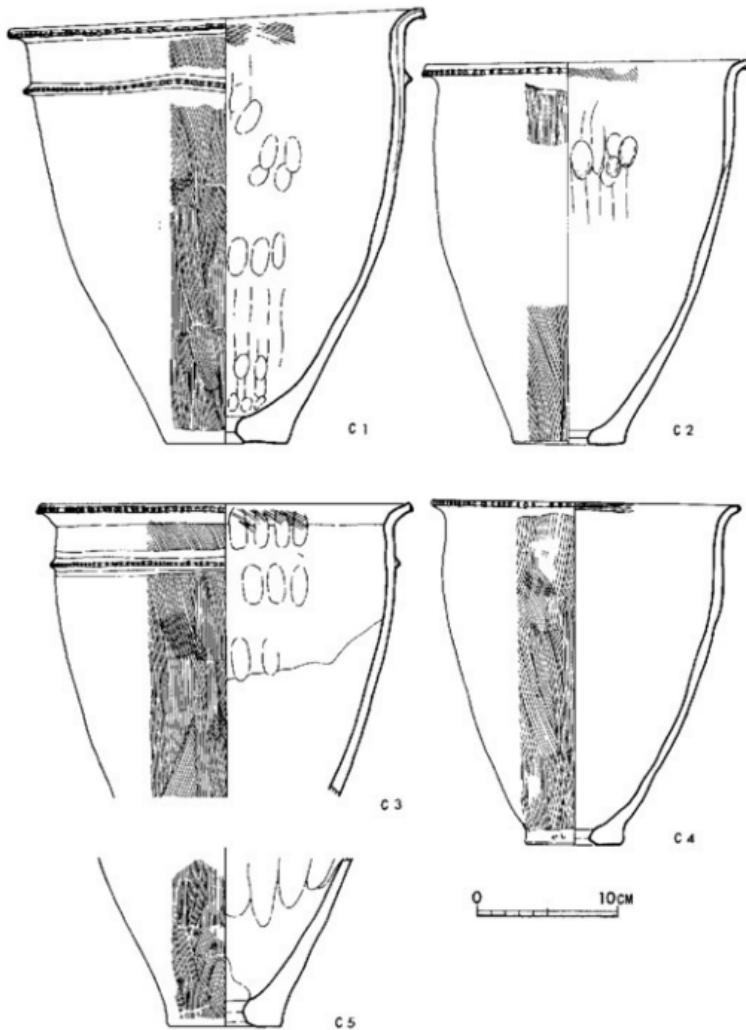
#### 第8号袋状竪穴 (第11図)

本竪穴はA-2区南側に位置し、第9号竪穴に隣接して営まれている。平面は径2.2~2.3mを測る円形である。壁は約80cmを計り、東・西側で袋状部分の残りが良い。北壁に近く長幅30×25cm、深さ8cmを測る不整円形の小ピットが1個、また南側壁面立上り部分に径10cm程度の



第11図 第8号袋状竪穴出土状況図

小ピット2個がそれぞれ見出されているが、性格は不明である。竪穴内では埋土のすべてに亘って土器類の出土があったがいずれも小破片で、まとまりを持つものは図示したものにとどまつた。C-1-3号は床面より55cm西壁寄りの位置に黄色味を帯びた青灰色粘土を貼りこの上に3個を固定しているが、以下の埋積が進み、而もC-2号などは口縁を下にして倒置の状態である点で貯蔵とは別の目的を想起させる。なおC-3号を除きいずれも底部に二次穿孔を施し、「懸」の特徴を具備している。この他石器類では玄武岩製太形蛤刃石斧破片、黒曜石製石鎌、C-2号内から玄武岩（サスカイト？）製石鎌などが出土し、投弾、不明土製品、炭化米数十粒・獸骨片などが検出された。

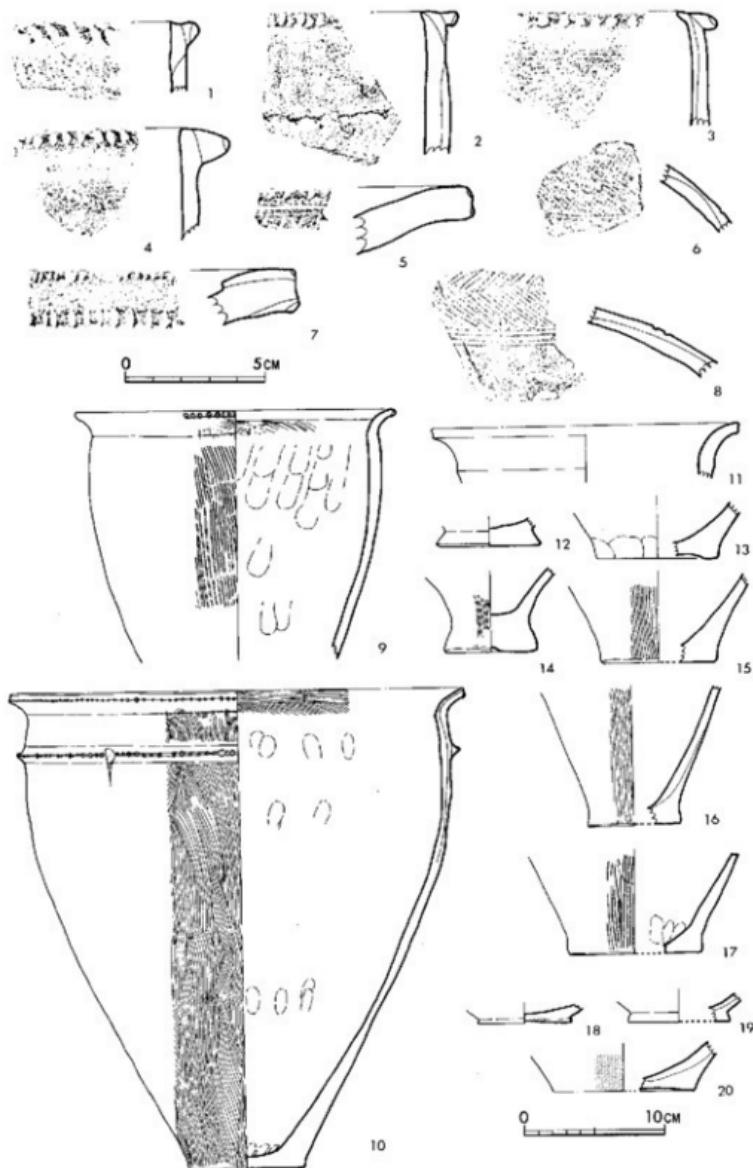


第12図 第8号袋状窓穴出土遺物実測図(1)

#### 出土遺物（第12・13・14図）

1 C-1～5号（第12図） C-1～3は共伴資料と考えて良い。C-1は如意形口縁の下端に略1cm間隔のまばらな刻目を施し、口縁下約5cmの所に低い刻目突帯を付す。底部は分厚く、若干上げ底となり、中央部に1.7×2.5cm程度の楕円形の二次的な穿孔がなされている。外面は淡褐色を呈し、細い刷毛目調整。内面は赤褐色で口縁部に細い刷毛目が残り、以下は指おさえが顯著であり、また磨滅が激しい。胎土には1～3mmの石英砂の混入がみられ、焼成は堅緻。口径29.4cm、器高30.5cm、底径8.7cm。C-2も口縁下端に整然とした刻目を付している。外面は荒れが激しいが、器色は淡褐色で継刷毛目調整。内面も同色であり、底部付近は淡黒色となる。口縁部には刷毛目を残し、上半部に指調整が顯著である。底部の暗中央には2.9×2.2cm程度の楕円形二次穿孔がみられる。胎土には径1～4mm程度の石英砂の混入多く、焼成良好。口径24cm、器高27.3～27.7cm、底径8.0cm。C-3はC-1と同様の器形であるが底部を欠損している。口縁下約4.5cmに付された突帯部分の刻目はかなり細かく整然としている。外面は淡黒褐色で粗い継刷毛目調整。内面は淡黒褐色で口縁付近は淡褐色となり、粗い刷毛目調整を残し、下方は指調整が著しい。また下半部には黒色～淡黒色の部分があつて残滓かと考えられる炭化物が付着している。胎土に径1～3mmの石英砂とその他の混入物多く、焼成は良好。口径26.2cm、現存器高21cm。C-4は胴部全体に脛らみが大きく、シャープさに欠ける。丸味を持った口縁端部には浅いいびつな刻目が付される。外面は淡褐色で上部は煤が付着して黒味を帯びており、粗い継刷毛目調整。内面は上半部が淡褐色、下半部が淡黒色を呈し、口縁付近に刷毛目が残る。また口縁以下は器面の磨滅が著しい。底部には中央より外れた所に径1.5～1.8cm程度の二次穿孔痕がみられる。胎土には径1～4mm程度の石英砂の混入多く、焼成良好。口径21～22cm、器高24.7cm、底径7cm。C-5は底部のみを残し他は散逸している。外面は暗灰褐色で幅1.5cm程度のかなり細かい刷毛目調整。内面は黒褐色で指調整が著しい。底部は若干上げ底となり、径2cm程度の二次穿孔がみられる。胎土には石英砂などの混入多く、焼成良好。底径8cm。

2 变形土器（第13図1～4・9～17） 1は夜刀式土器であろう。口縁の刻目は深く端正である。外面灰黒色で横なで、内面淡赤褐色で細かい横刷毛目。胎土に1～2mm程度の石英砂を少量含む。2・3は口縁上端が小さく平坦面をなす。2は口縁下の突帯が剥落している。内外面ともに淡褐色でなで調整。胎土に径1～2mmの石英砂を含み、焼成堅緻。3は内外面ともに淡褐色で横なで調整。石英砂の混入多く、焼成良好。4は外方に粘土を貼付けて小さな平坦口縁をなし、端部に浅い整然とした刻目を施す。外面淡黒色、内面淡赤褐色で、両面とも横なで調整。胎土、焼成とともに良好。9は小さく外反する口縁下端に刻目を付し、胴部の脛らみは強い。外面は黒褐色で口縁付近は淡紅色となり、粗い刷毛目調整。内面は上半部は淡紅色、下半部は淡灰色を呈する。口縁に近く刷毛目、横なでがみられ、これ以下は指おさえが目立っている。胎土には0.5～2mm程度の石英砂の混入多く、焼成良好。口径23.5cm。10は如意形口縁下端に刻目を施し、口縁下4.5cmに刻目突帯を付した胴上部の脛らみの大きい壺。外面は淡褐色で幅1.2～1.5cmの刷毛目調整を加える。内面上半部は淡褐色、下半部は淡黒褐色を呈し、口縁付近には幅1.3cmの細かい刷毛目が残り、これ以下は指おさえなどで調整が観察される。胎土には石



第13図 第8号袋状整穴出土遺物実測図(2)

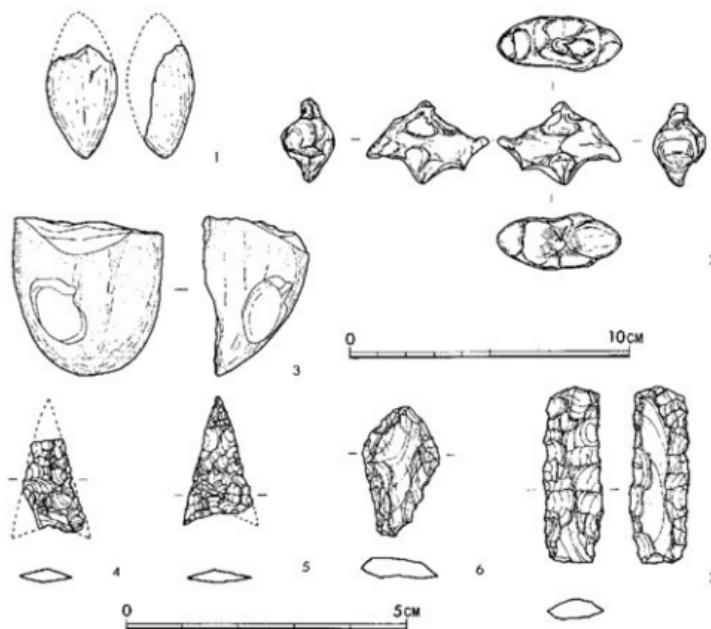
英砂などの混入物多く、焼成は堅緻。11径32cm。器高33.8cm。底径8cm。11はII線下の肩上部を肥厚させている。外面淡褐色で横なで。内面は淡赤褐色で粗い範磨きが残る。胎土精成され、焼成堅緻。口径21.8cm。12~17は甕底部であろう。12は端部が断面三角形に張出す。内外面とも赤褐色を呈し、範なで（？）調整。胎土、焼成良好、夜臼式土器か。径7.6~4.4cm、13は若干上げ底。外面淡褐色で端部に範なでがみられる。内面は黒色でなで調整。胎土に石英細砂を含み、焼成良好。径8.6cm。14は分厚く、不安定である。外面淡赤褐色で端部に丹の痕跡があり、細かい綿刷毛目が残る。内面は淡褐色で、なで、指おさえがみられる。胎土に石英砂の混入多く、焼成堅緻。径6.6cm。15は外面淡褐色で粗い刷毛目調整。内面は淡黒褐色で指なで上げ。胎土に石英粗砂の混入多く、焼成良好。径8.2cm。16は立上りが急でやや胴身。外面淡褐色で粗い綿刷毛目調整。内面暗褐色で指おさえ、なで調整。胎土に石英粗砂の混入多く、焼成良好。径6.6cm。17は安定した平底。端部は丸味を持つ。外面暗褐色で体部及び底部に粗い刷毛目調整。内面は淡黄褐色で指おさえ、なで調整を加える。胎土精成され、石英粗砂を多く含み、焼成堅緻。径9.4cm。

3 壺形土器（第13図5~8・18~20） 多量の出土土器片の中で壺形土器にはあまり良好なものが無かった。5・7は口唇両端に端正な刻目を施し、7は上端に粘土を貼付け肥厚させている。5は内外面ともに淡赤褐色を呈する。外面はなで調整後口唇中央に横位沈線を描く。内面は丹塗りで範磨き調整（？）。胎土、焼成ともに良好。7は内外面ともに淡褐色を呈し、なで調整。焼成良好。6は肩部を沈線で画し、これに網目状文を描いている。外面赤紫色で丁寧な範磨き。内面赤褐色でなで調整。胎土精成され、焼成堅緻。8は肩部に範による無軸羽状文を描き、さらにこの下に二条の横位沈線を廻している。外面暗赤褐色で範磨き。内面灰褐色で刷毛目が残る。胎土精選されるが、石英砂の混入多く、焼成堅緻。18~20は壺底部であろう。19は端部が若干断面三角形に張出す特徴を有する。18は円盤貼付手法の明らかなもので外面灰黒色を呈し、胎土、焼成とも非常に良好。径6.4cm。外面淡褐色で体部範磨き、底部なで調整。丹塗り。内面淡褐色。胎土精成され、焼成堅緻。径7.2cm。20は若干上げ底。外面丹塗りで淡褐~淡赤褐色を呈する。器面は綿刷毛目後に範なで調整。胎土に石英粗砂を多量に含み、焼成良好。径10cm。

4 石器（第14図1~7） 1は土製投弾。器色淡褐色。胎土精撰され、焼成は非常に良好。2は不明土製品。粘土塊を指で把み上げて製作しており、指紋が残る。淡黒色を呈する。胎土は極めて良好で、焼成堅緻。動物をモチーフとするものか。3は磨石、円礫の約1/4を残す。花崗岩製。4~6は打製石器。4は先端部と片脚部を欠損する凹基無茎式鎌。全体に調整は粗い。黒色黒曜石製。5も同形で脇抉りの浅い鎌。体部の仕上げは良好。黒色黒曜石製。5は小型の不定形剥片を素材にした凸基無茎式鎌。打点を先端部に有する。長さ2.3cm、幅1.4cm。安山岩製。7は小型の横長剥片の縁辺に調整を加えて矩形に仕上げている。組合せ石器の一部か。長さ3.1cm、幅1cm。厚さ3mm。安山岩製。

以上出土々器類から本駆穴の時期は弥生時代前期後葉であろう。

(横山)

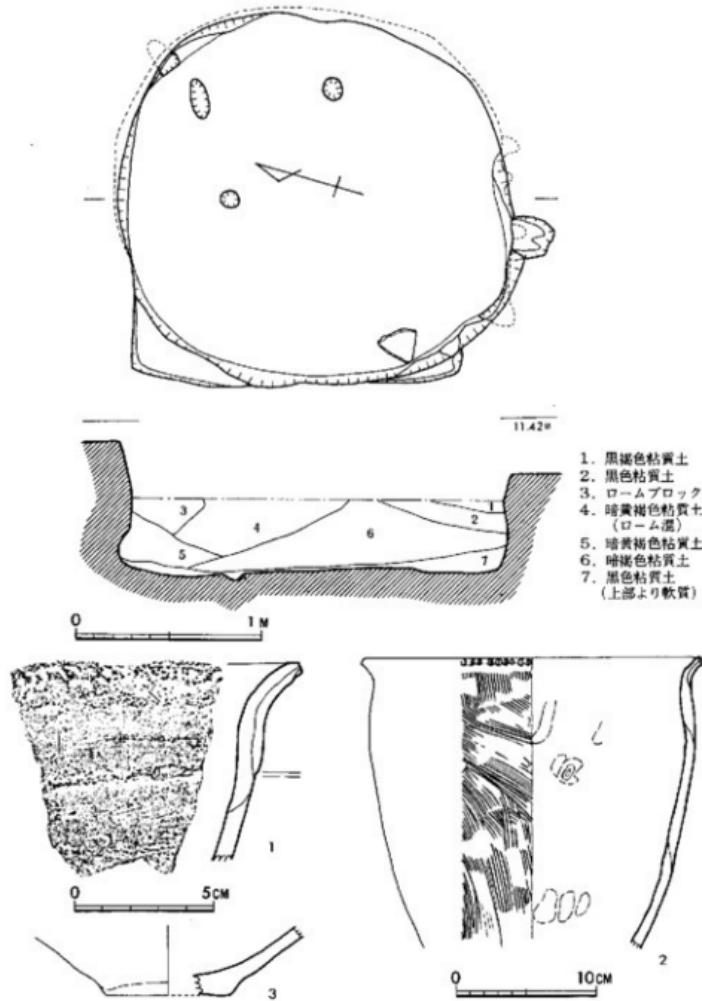


第14図 第8号袋状堅穴出土遺物実測(3)

### 第9号袋状堅穴（第15図）

本堅穴はA—2区南側に位置し、第8・13号堅穴に隣接している。遺構は他遺構との切り合いで関係にあって、上縁附近の改変著しい。平面は径1.9m程度の不整円形をなし、壁は約70cm前後を残し、袋状となる。また南・北側の床面の駆立上り部分には径、奥行きとも10~20cmのピットが計5個見出されるが、防湿施設の一部であろうか。遺物の出土は少なく、ほぼ図に供したもので全てである。

**出土遺物（第15図）** 1は口唇下端に細い刻目を施し、胴上部を肥厚させた壺。外面は暗褐色を呈し、横なで調整。内面は赤褐色で口縁下部に指おさえがみられる。胎土に石英砂の混入多く、焼成はとても良い。2は口唇部のやや下方に刻目を有し、胴上部の脹らみが特徴的な壺。外面は暗黄褐色を呈し、粗い刷毛目調整。口縁下はこの後に横なで。内面は黒褐色を呈し、残滓かと思われる黒色灰化物が全面に付着している。また指おさえが所々にみられる。胎土に石英砂の混入は少なく、焼成は堅緻。口径24cm。いずれも板付II式相当である。3は壺底部。円盤貼付底からかなりの退化がみられ、若干上げ底となる。外面黒色で、横荒みがき調整。内面

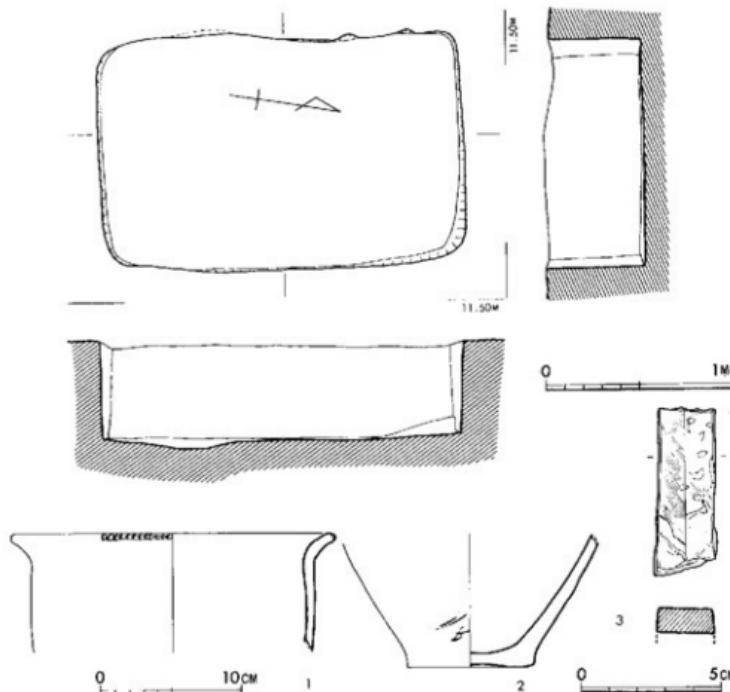


第15図 第9号袋状竖穴・出土遺物実測図

は暗黄褐色で、なで調整か。胎土に石英砂の混入多く、焼成は悪くない。

以上の出土土器から、本竖穴は弥生時代前期中葉に營まれたと考えられる。

(横山)



第16図 第10号袋状竪穴・出土遺物実測図

#### 第10号袋状竪穴（第16図）

本竪穴はA—2区に位置し、長軸をほぼ南北に向けて営まれている。平面は長幅が1.9×1.1m程度の隅丸長方形である。壁は約50cmを残し垂直に立上っている。遺物は弥生式土器前期甕口縁4、同底部1、同甕口縁3点、夜臼式土器甕胴部破片4点、砥石片（？）1点等で量的に多くない。

（草場）

#### 出土遺物（第16図）

1は如意状口縁を有する甕。口縁の刻目は整然としている。内外面とも褐色を呈し、横なで調整。胎土には若干の石英砂の混入があり、焼成は非常に良好。口径23cm。2は器色、器面調整、焼成の点で1と同一個体と考えられる。外面は横なで調整の他に範状工具でなでおろしに痕跡がある。また内面は黒変し煤状のものが付着している。底部はやや上げ底気味で暗赤褐色を呈する。板付II式に相当する。3は扁平で方柱状をなす磨製石器。片面を欠損しているが四面に研磨がなされている。花崗岩製。

以上出土土器から本竪穴は弥生時代前期後半に営まれたものと考えられる。

（横山）

### 第11号袋状竪穴（第17図）

本竪穴は調査区中央部北辺に位置する。第12号竪穴に接し、東側南部は第12号竪穴に属する小竪穴と切り合っている。南北約160cm、東西約110cmの不整な長方形の平面プランであり、北西隅は張り出した隅丸となっている。残存部で北壁東半は袋状を呈している。北壁西半付近は搅乱されているようである。現存で深さは、浅い南側で約5cm、深い北側で約15cmである。床面は北側の方が少々低くなっている。床面には炭化米が拡がっていた。その分布範囲は東側の南100cmの地点と西側の南10cmの地点を結ぶラインを南限としてそれより北側一面を覆い、壁や床面とじかに接している。炭化米は石のように堅い焼土塊や粘土質の焼ローム塊を挟んで層を成しているが、北面隅付近では炭化米層を上下に二分するような大きな焼土塊がある。この炭化米層の厚さは南限ラインで1cmにも満たないほど薄いが、北西隅に向って厚くなり10cmに達している。北壁の中央やや東寄りの22cmにわたる部分は焼けて赤褐色を呈し堅くなっている。この焼壁や炭化米層の状態から推定すると、本竪穴は袋状貯蔵穴として米を貯えられていたが、火災にあったものだと思われる。

（森瀬生子）

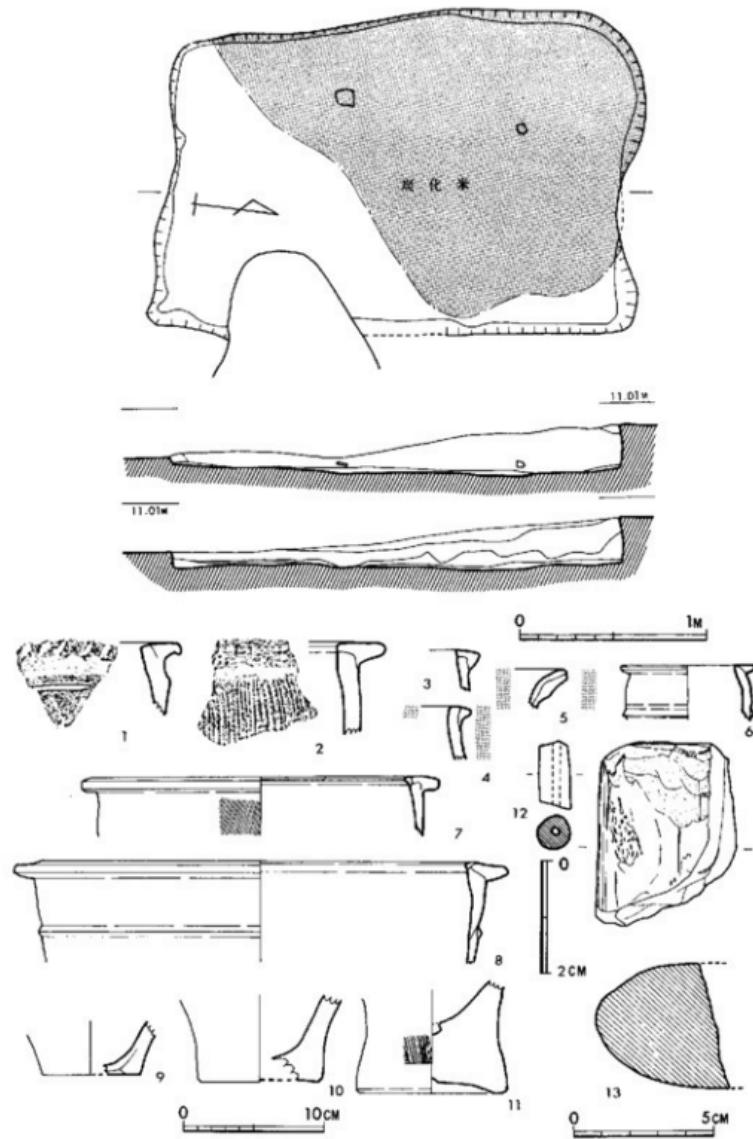
### 出土遺物（第17図1～13）

**変形土器（第17図1～4・7～11）** 1は小さい平坦口縁端部に細かい整然とした刻目を施し、口縁下に一条の沈線を廻す。外面黒褐色、内面暗褐色を呈する。胎土精成、焼成良好。2は逆「L」字形口縁で端部は横なでによって円味をもつ。内外面ともに暗褐色を呈し、外面は粗い縱刷毛目後に口縁下を横なで。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。3は口唇上部及び外側に粘土を貼付けている。口縁下端は指おさえ後に横なで。内外面ともに赤褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。4も小さい平坦口縁を有する。外面と口縁端部は丹塗り。内外面とも褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。7・8はとともに口縁が外方に発達したもの。7は内外面ともに淡褐色を呈し、外面はかなり粗い刷毛目調整の後に口縁下を横なで。胎土に石英砂の混入非常に多く、焼成は堅緻。口径25cm、8は若干重れる口縁下5cmの所に低い三角突帯を廻らす。器色は内外面ともに暗黄褐色～赤褐色を呈し、いずれも横なで。胎土は砂質で、焼成良好。口径35cm。9～11は甕底部であろう。9は外面暗赤褐色、内面黒褐色を呈し、外面横なでか。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。径6.8cm。10は外面赤褐色、内面褐色を呈し、外面は筒状のもので横なで。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。径8cm。11は非常に分厚い上げ底である。外面黄白～淡赤褐色、内面淡灰色を呈し、外面は粗い縱刷毛後に端部付近を横なでしている。胎土に石英砂を多量に含み、焼成良好。底径10cm。

**壺形土器（同図5）** 5は口縁外側に粘土を貼付け肥厚させている。内外面ともに丹塗りで、横窓磨き。胎土に石英砂の混入少なく、焼成堅緻。

**鉢（同図6）** 6は小さな平坦口縁下に低い三角突帯を廻す。内外面ともに淡褐色を呈し、横なで調整。突帯上部は棒状のもので強く横なでしている。胎土に多量の石英微砂を含み、焼成は堅緻。口径9.6cm。

**その他（同図12・13）** 12は土製管下。現在長約1cm、径6mm、孔径1mmをはかる。暗灰褐色



第17图 第11号袋状竖穴·出土遗物实测图

色を呈する。床面出土。13は今山産大型蛤刃石斧頭部破片。頂部及び側縁部には未だ敲打痕を残している。玄武岩製。

以上遺物の出土量は多くないが、出土した甕・鉢形土器によりこの竪穴の時期は中期初頭と考えられる。尚共に検出された多量の炭化米は現在洗浄中であり、成果は後日報告に付す予定である。  
(横山)

#### 12号袋状竪穴・第1・2号土塙(第18図)

本竪穴は、台地の中央、「わずかに西側斜面によつたA—3区にあり、東西3.5m、南北2.5mをはるか平面橢円形を呈する袋状竪穴で赤褐色ロームに掘り込まれている。地山とほぼ同質のロームを覆土とし、弥生前期末から中期初頭の遺物を出土する。北側と東側の壁際の部分に段状になった部分がある。西側を第1・2号土塙によって切られており、上部とくに南側を深く削平されている。

本竪穴の東北隅に中世以降と思われる平面隅丸長方形の第1号土塙が掘り込まれている。規模は調査員の手落ちで西側プランを破壊してしまったので推定によるが、南北0.5m、東西約1.3mと思われる。黒色粘質土を覆土とし、土器片少量と磁器の小破片が1点出土した。

第1号土塙は、残存状態が非常に悪く床面すれすれまで削されている性格は不明であるが、プランの形から土塙墓の可能性が考えられる。また12号竪穴北壁、東壁の残存状態から考えて、第1号土塙の掘り込み、及び削平が12号竪穴の規模を大きく出ないものと思われる。

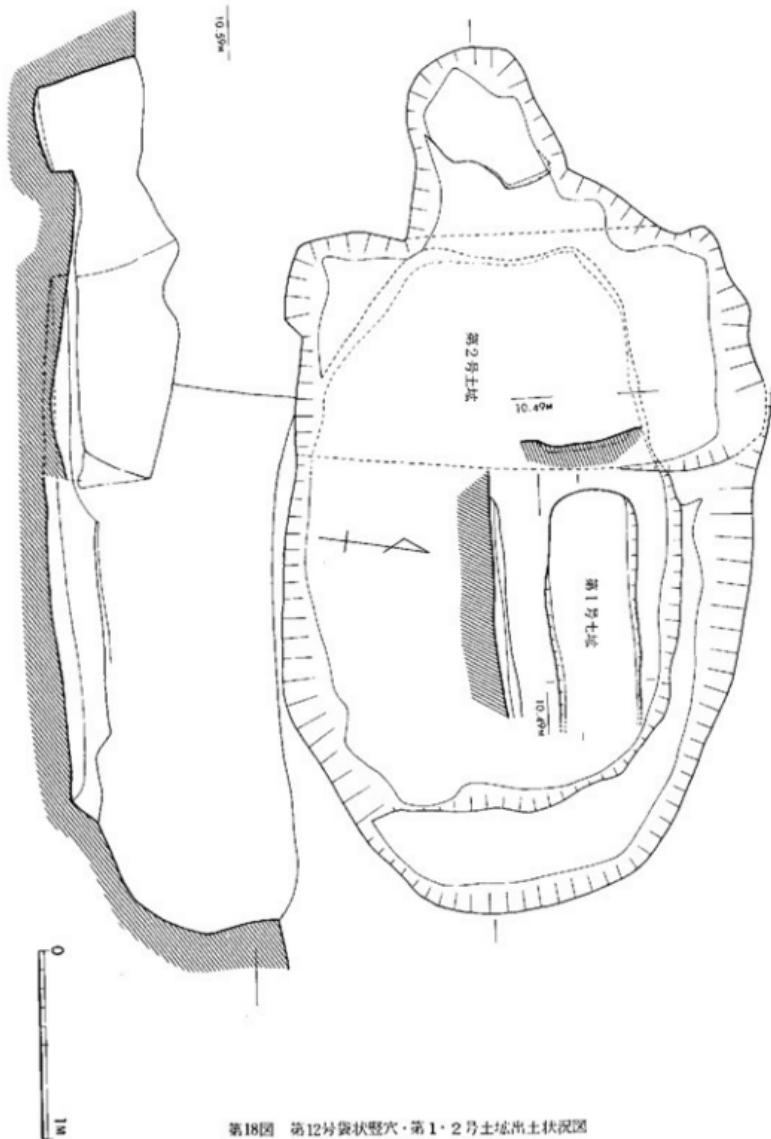
第2号土塙は、近世以降のものと思われる竪穴の西側ほぼ半分を切っている。規模は調査上の不備からプランをはっきりと確認できなかったが、東西約1.2m、南北約2.2mの平面隅丸長方形の土塙と推定される。

また本竪穴の西端には、隣接する11号と切り合っている性格不明のピットがあるが、本竪穴との前後関係等は不明である。  
(草場)

#### 出土遺物(第19図)

遺構は上記のように幾つかの切り合い関係にあるが、出土遺物では第1号土塙で見るべきものがなく、第12号竪穴、第2号土塙出土品について説明を加える。

第12号袋状竪穴(同図1~11) 1~3は口縁下端部に細かい刻目を有する甕。1は外面黒色、内面暗褐色で横なで。2は外面赤褐色、内面赤褐~褐色を呈し、横なで調整。3は口縁下が肥厚する傾向を持つ、内外面淡褐色を呈し、刷毛目調整。これらは各も胎土に石英砂の混入多く、焼成良好である。板付II式に相当する。4・5は口縁外側に粘土を貼付けて小さな平坦口縁を形造っている。4は口唇部に小さく細かい刻目を施す。外面褐~暗褐色、内面赤褐色を呈する。5は内外面赤褐色を呈する。各も焼成良好。6は口縁端部に刻目を持たない。外面は赤褐色で粗い刷毛目調整後に口縁下を横なで。内面は暗褐色で粗い横刷毛目後に横なでしているが十分でない。胎土に石英砂の混入多く、焼成は堅緻。口径23cm。7は短い「鋤形」口縁を有する甕。内外ともに暗褐色で口唇~内面にかけてはなで調整、口縁下は竪状のもので縦になでている。胎土精成、焼成良好。口径29cm。8・9・11は甕底部であろう。8は非常に



第18図 第12号袋状竖穴・第1・2号土坛出土状況図

分厚く若干上げ底となる。外面は暗褐色を呈し、横なで調整、内面灰色、胎土に石英砂の混入多くなく、焼成良好。径8cm、9は内外赤褐色を呈し、胴部は窓など。内面赤褐色で底部を指でなで回している。石英砂の混入少なく、焼成良好、11は若干上げ底となる。外面赤褐色で、胴部は窓状のもので縦に丹念になでている。内面は黒褐色で、底部には指おさえがみられる。石英砂の混入多く、焼成良好。径8.4cm、10は壺底部であろう。若干上げ底気味。外面は丹塗りで痕跡的に縦の細かい刷毛目・窓などが残る。内面褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成堅緻。径12.8cm。

以上の出土遺物から本竪穴の時期は弥生時代前期末～中期初頭の時期と考えられる。

**第2号土壙（12～18）** 本土壙では覆土内に近世陶磁器類の出上が多く、他に弥生式土器を若干混じていた。12は高環脚部。分厚い円筒形となる。外面は丹塗りで、窓で縦になで調整。また内面下部は絞りとなっている。胎土精成され、焼成堅緻。13・14・16は壺底部であろう。13は端部が舌状に張出す。外面は暗黄褐色で、粗い刷毛目調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。径7cm。14は分厚く、上げ底となる。内外面ともに暗褐～暗赤褐色となり、内面には指おさえが残る。胎土、焼成良好。径8cm。16は外面暗黄褐色。内面暗赤褐色。胎土、焼成不良。径8cm。15は壺底部か。外面暗赤褐色を呈し、粗い縦刷毛目調整。内面黄褐色。石英砂の混入少なく、焼成不良、径9.5cm。17・18は磁器。17は双耳を持つ花瓶か。底部は意識的に打抜いてある。外面と内面上部には淡い緑色釉が掛っており、露胎部は白色となる。また耳付近は水裂が著しい。現存器高14.5cm、底径6.8cm。18は碗である。高台置付部分を除きすべて乳白色釉が掛かる。外面は唐季に似た植物、内面では口縁下に平行線と見込み付近に一本の横線を各れも藍色釉で描いている。口径11.5cm。器高6.2cm。底径5cm。

(横山)

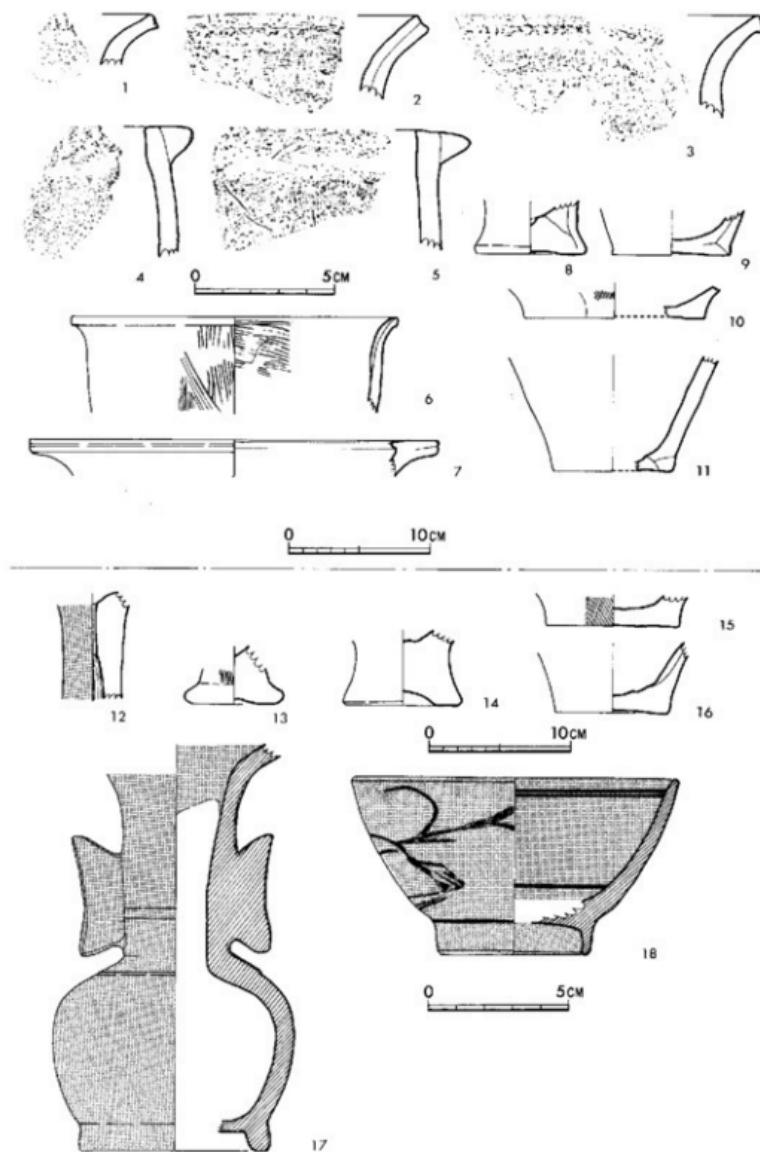
### 第13号袋状竪穴（第20図）

本竪穴はA-2区南隅に位置する。平面は径1.7m程度の円形であり、壁は60cm前後を残して袋状となる。遺物は少量で床面直上の黒色粘質土層より殆どが出土しており、図示したものがほぼその全てである。

### 出土遺物（第20図）

1は口唇よりやや下つた位置に突帯を付した甕。刻目は小さく整然としており、内外面とも赤褐色を呈し、刷毛目調整後の横なでが顕著である。胎土に石英砂の混入少なく、焼成は悪くない。夜臼式土器であろう。2～4はいずれも口唇下端・下部に刻目を施した甕。2は刻目小さく整然としている。外面黒褐色で縦刷毛目調整。内面暗褐色で横なで調整。3はやや外反度が急で内外面とも黒褐色を呈し、横なで調整。4も刻目は深く整然としている。外面は黒色～暗褐色、内面暗褐色でいざれも横なで調整。これらは胎土に石英砂の混入は少なく、焼成は良好で板付II式に相当しよう。5は口縁が若干垂れる小さな平坦口縁を有する高杯々部。内面は粘土を貼付けて小さく突出させているが、なで調整の不備で均一な口唇の造形にはなっていない。外面は暗褐色、内面暗褐～黒色を呈し、全面に黒疵が多い。器面はなで調整か。胎土に石英細砂を多量に含み、焼成は悪くない。外口径30cm。

**石器** 6は玄武岩円礫を利用した敲石。両端部と中央隆起部分に打痕が集中し、潰れている。



第19图 第12号袋状竖穴·出土遗物实测图

重量 770g。7は脚部を欠損するが基部脇挟りの深い凹基無茎式罐。安山岩製。8は片脚を欠損するが、基部の脇挟りはあさく平基式に近い凹基無茎式罐。両辺よりの細部調整は粗雑で中央部に接をもっている。黒色黒曜石罐。

以上の出土遺物から本竪穴は弥生時代前期後葉に營まれたと考えられる。

(横山)

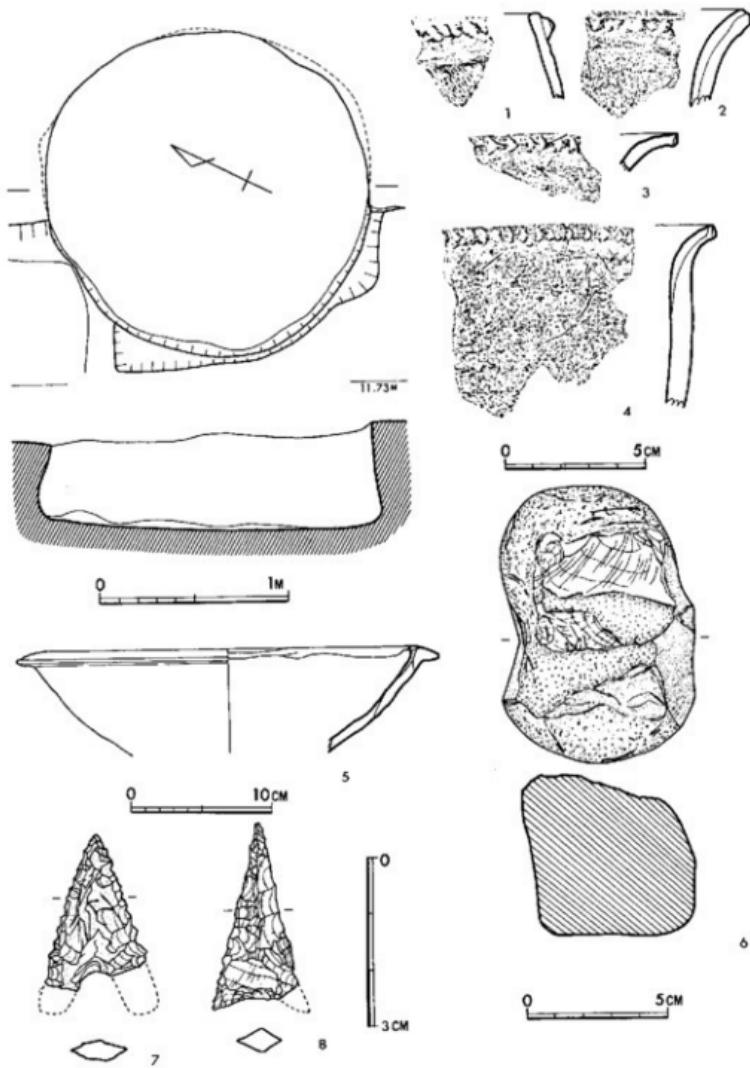
#### 第14号袋状竪穴（第21図）

本竪穴はA-1区北側に位置する。平面長幅が4×2.5m程度の大型竪穴であり、壁は70cmを残し、南西側をP-6号によって切られていると考えられる。発掘当初平面的に覆土上の変異が認められ、異なる造構の重複があるものと考えて、長軸に沿って覆土の断面観察を進めたが、明確な成果は得られなかった。造構は北・西側壁はほぼ立上りが垂直で、また段状部分を有している。また南側は度重なる水没で発掘後の変形が著しい。遺物は少量で覆土内、床面近くから出土しており、北・西側壁付近では弥生式土器、中央部付近で土師器、瓦器質土器の出土が目立っている。

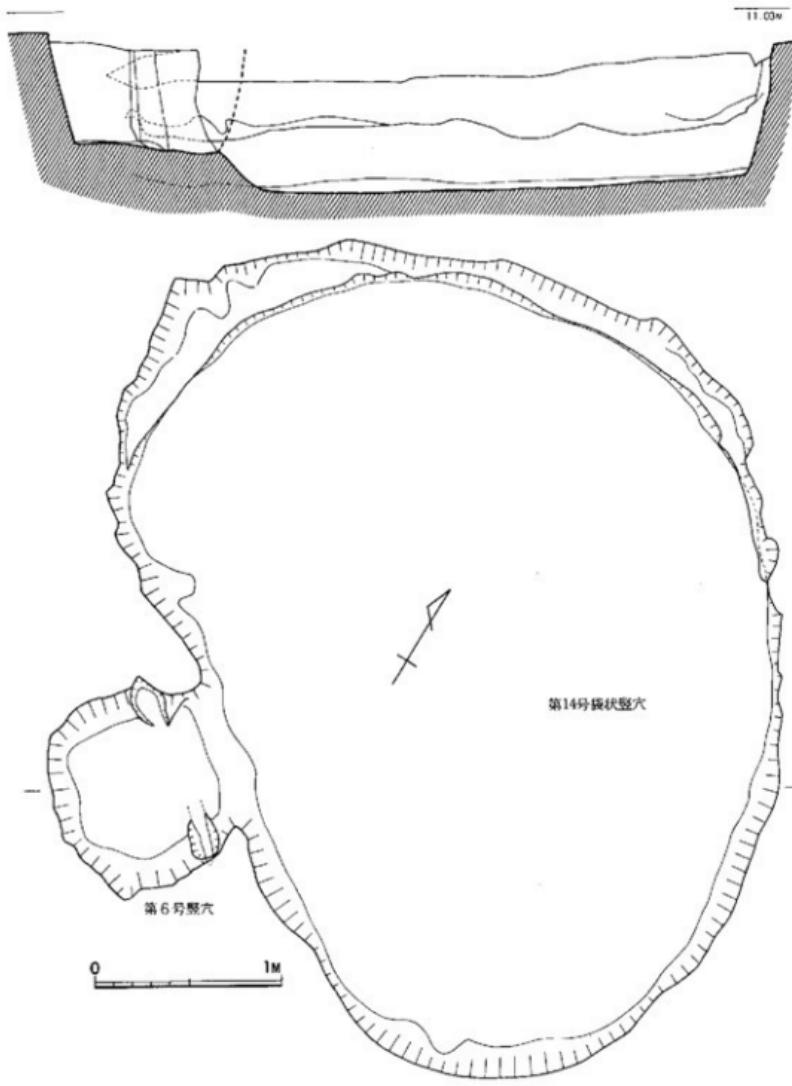
#### 出土遺物（第22図）

1は口縁下端部に端正な刻目を施した甕。外面褐色で、横なで、内面赤褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。2は小さい平坦口縁を有する。内外面とも赤褐色を呈し、外面粗い縦刷毛目調整後に口縁直下・上端・内面を横なでしている。石英砂の混入多し。3は1と同様に口縁下端に鋭い刻目を付す。内外面ともに黒色。細かい刷毛目調整後に外面横なで、胎土・焼成とともに良好。4は瓦器質土器である。口唇及び内面は横位の粗い刷毛目調整を加え、外面は箆状の平らな工具で横なで。また内面はその後に2本以上の単位の平行縦線が引かれる。博鉢か。5は底部糸切り離しの土師器皿。内外面ともに暗褐色で煤状のものが付着。焼成不良。6は外面刷毛目調整後に直口する口縁部端に粘土を貼付けて小さく突出させている。外面褐～暗褐色、内面赤褐色で横箆磨き、土師質。石英砂の混入多く、焼成良好。7・12はともに口縁下端部に刻目を有する甕。7は外面褐色。内面赤褐色。石英砂の混入多く、焼成良好。口径18.6cm。12は外面褐～赤褐色、内面赤褐色を呈し、石英砂の混入少なく、焼成不良。口径24cm。これらは2・3と共に板付II式であろう。8は球状の胴部と直立する口縁を有する甕。内外面ともに頸部以下に粗い刷毛目調整を施し、以上は横なで。赤褐色を呈する。胎土精成され、焼成良好。弥生終末期のものであろう。9は端部が断面三角形に張出し、上げ底となる。外面褐～赤褐色。内面褐色。径7.6cm。夜白式土器か。10は壺底部か。外面褐色、内面暗赤色を呈し、若干上げ底となる。焼成良好。径7cm。11は内傾する胴部に小さい平坦口縁を有し、口縁下に低い一条の三角突帯を付す。外面暗褐色、内面明褐色を呈し、横なで調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。口径19.5cm。中期初頭のものであろう。13は口縁下部が肥厚する甕。外面黄褐色で丹塗り、内面は暗褐色で横箆磨き。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。口径30cm。14は壺であろう。外面黄褐色。内面上部は同色。下部暗褐色を呈する。いずれもなで調整か。胎土に石英砂の混入は多くなく、焼成は良好。口径17cm。15は凹基無茎式の小形石罐。黒色黒曜石製。北側壁近くで出土。

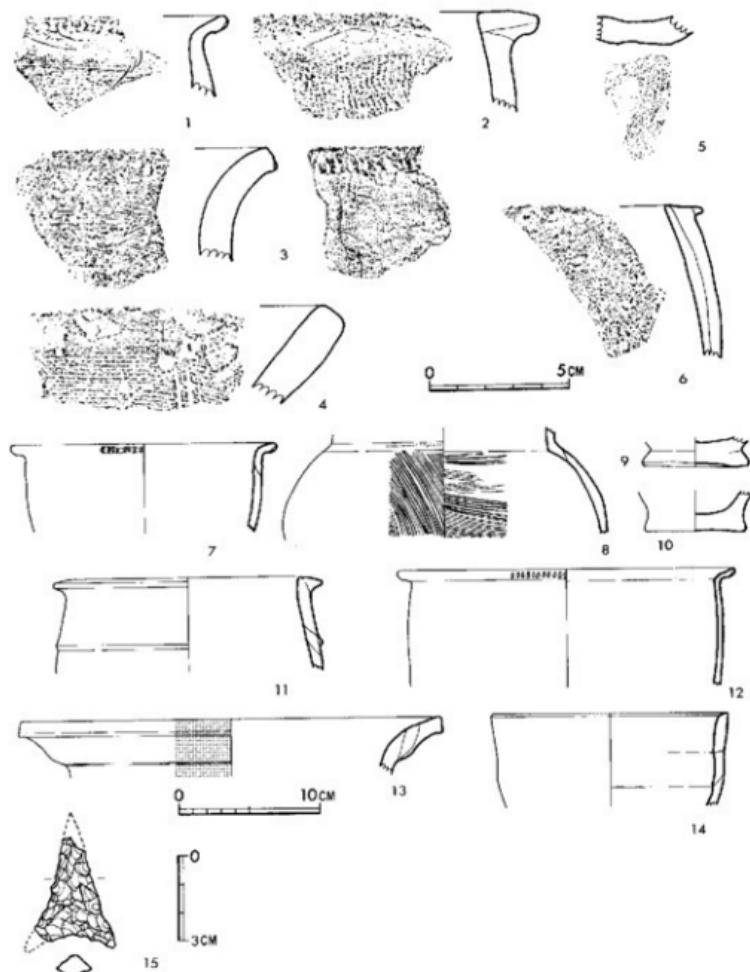
以上出土遺物には弥生時代前期後半以降の遺物が含まれるが、造構の主要な時期については



第20图 第13号袋状整穴·出土遗物实测图



第21图 第14号袋状竖穴·第6号竖穴出土状况图



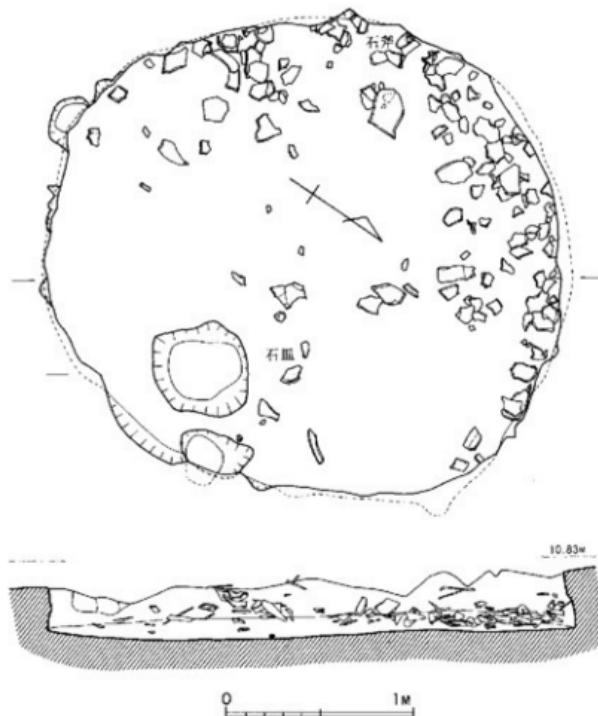
第22図 第14号袋状竖穴出土遺物実測図

不詳としなければならない。

(横山)

#### 第15号袋状竖穴 (23図)

本竖穴はB-1区西側に位置し、平面が径2.8~3mをはかる円形となる。壁は30cm程度を残し、袋状となっている。竖穴東側には長幅とも50cm、深さ30cmをはかる方形ピットと竪に接し

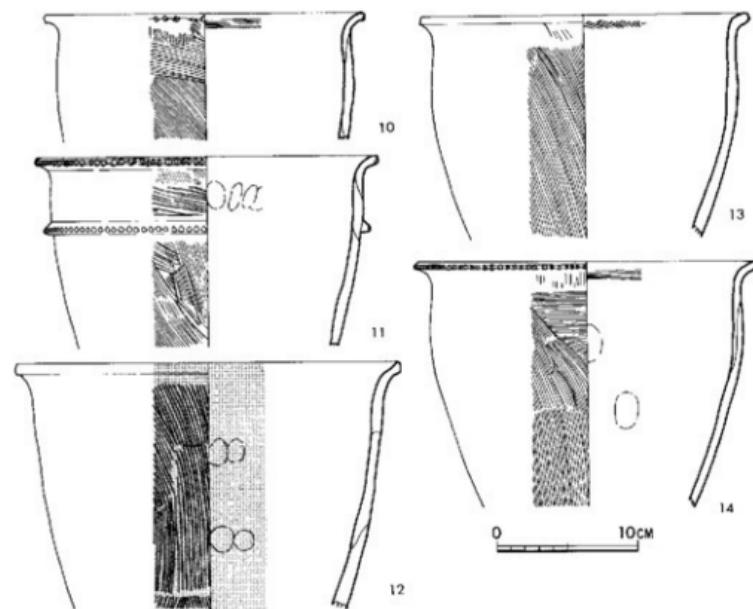
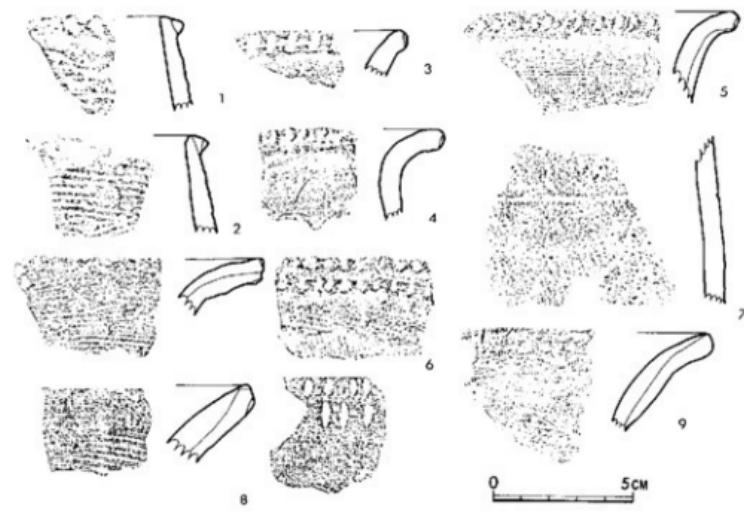


第23図 第15号袋状整穴出土状況図

て同40×20cm、深さ20cm程度の長円形ピットが見出され、これに伴うものと考えられるが、特に遺物の出土はなかった。遺物はかなりの削平にも拘らず、竪穴の西・北側壁付近に数多く集中して出土した。土器類は破片計155点で原位置を保つものが少くないと考えられるが、同部分は明らかに火に遭っており、土器類はすべて脆弱である。これらは接合可能なものが多く、甕20個体以上、壺15個体以上、甕蓋1個体などの数が得られた。また石器類では西側壁際に今山産と考えられる玄武岩製大型蛤刀石斧が出土した。この他に同石材使用の破片2点が知られ、東壁近くでは（粗粒砂岩製）石皿の発見があった。また床面に接して計6個の黒色黒曜石製石核が出土しているが、いずれも残核で球果状となっている。それから炭化米数粒が出土している。

#### 出土遺物（第24～27図）

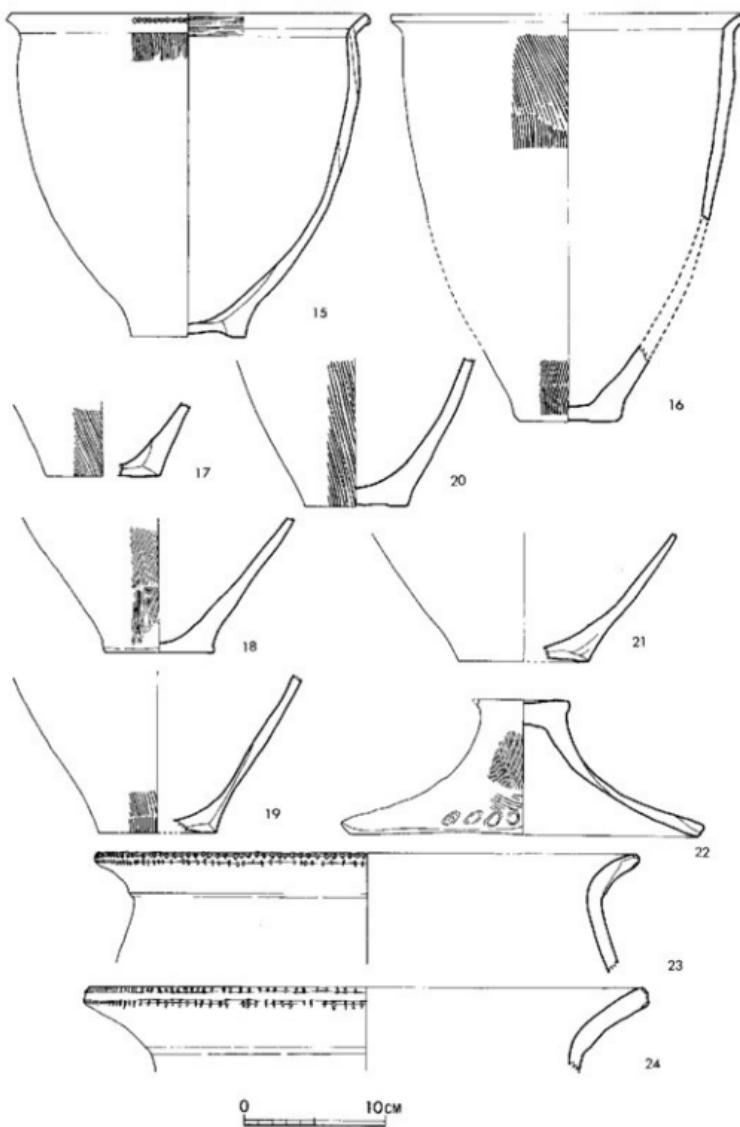
変形土器（第24図1～7・10～14・第25図15～21） 1・2は夜臼式土器甕である。1は外



第24图 第15号袋状窑出土遗物实测图(1)

面暗赤褐色、内面赤褐色でいずれも外面は条痕調整後に突帯上下部分を横なし、焼成は良好。3~5は口唇下部に刻目を有するもの。3は内外面ともに褐色。4は淡黄褐色、5は黄褐色で綿刷毛目調整後に横なし。いずれも胎土に石英砂の混入多く、4を除き焼成良好。6は口唇両端部に端正な刻目を有し、下部が若干肥厚する。内外面ともに黄褐色で、刷毛目調整後に横なしを加える。外面には煤の付着がみられる。焼成不良。7は口縁部を欠失するが、口縁下に一条の沈線を付す。内外面ともに暗黄褐色で、外面は粗い刷毛目調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。復元可能なものには口唇下端部に刻目を有するもの（10・11・14・15）と有していないもの（12・13・16）とがあるが12・16を除いていずれも胴上部の脹らみが大きい特徴を持っている。14の刻目は鋭く端正である。内外面ともに褐～黄褐色を呈し、外面細かい刷毛目調整で、内面は上部に刷毛目、下部に指わきえがみられる。胎土に石英砂の混入少なく、焼成良好。No.18と同一個体か。口径24.5cm。11は如意形口縁下約5cmの所に鋭い刻目突帯を付す。外面は突帯以上は暗褐～赤褐色、以下は黒色を呈し、粗い刷毛目調整後に横なし。内面は上半部黒褐色で指わきえが頗著で、下半部暗赤褐色である。胎土には石英砂の混入多く、焼成は良好。口径24cm。12は口唇に刻目を持たず、口縁の外反度は緩い。内外面ともに丹塗り。外面は褐～暗赤褐色で、粗い刷毛目調整を加え、下半部は煤付着。内面は上部が淡黄褐色で、下部は磨滅して黒色となる。指わきえがみられる。胎土に石英砂の混入は沢山あり、焼成不良。口径27cm。13も同様に刻目を持たない。均一な器厚を有し、口縁は小さく外反する。内外面ともに黄褐色を呈する。外面全面と内面の一部に粗雑な刷毛目調整を加え、この後に口縁付近に集中して横なしで調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。口径23.5cm。14は口縁部の刻目がまばらで略1cm程度の間隔を有する。内外面ともに赤褐色を呈する。外面全面と内面口縁近くに細かい刷毛目調整。胎土に石英砂の混入は少なく、焼成は堅硬。口径22.5cm。15は口径値に比べて器高が低く鉢に近い。口唇部の刻目は小さく整然としており、胴部の脹らみは大きい。また底部は若干上げ底となる。内外面ともに火に遭って灰～紫色となり艶い。口縁付近には細めの刷毛目調整が窺える。胎土に石英砂の混入多い。口径25cm。器高23cm。底径8cm。16は口縁部に刻目を持たず、比較的脹らみの小さい胴部から急に外反する短い口縁を有する。また底部は若干あげ底となる。内外面ともに黄褐色～暗赤褐色で火に遭っており艶い。外面は刷毛目調整がのこる。胎土に石英砂の混入は特に多い。口径25cm。復元器高29cm、底径7cm。17~21は腹底部であろう。17は外面赤褐～暗赤褐色で胴部は綿刷毛目調整。底部は竈による磨きを加える。内は黒～暗褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。底径8cm。18は外面黄褐色で細かい綿刷毛目調整。内面は赤褐色、指わきえがみられる。No.14と同一個体か。底径7.5cm。19は若干上げ底となる。外面淡灰～褐色で下部に粗い刷毛目が残る。内面赤褐～褐色を呈し、なで調整か。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。20も若干上げ底。外面淡灰～黄褐色で非常に粗い刷毛目。内面黄褐色で磨滅がはげしい。石英砂の混入多く、焼成不良。底径7cm。21も若干上げ底。外面は黄褐色で胴部及び底部を竈なし。内面は黄褐～暗褐色であるが、荒れが激しい。底径約9cm。

壺形土器（第24図8・9、第25図23・24、第26図25~35） 8は口唇両端部に狹長な刻目を有する。外面赤褐色で横なしで下部は竈磨き。内面暗褐色で粗い刷毛目を残す。石英砂の混入

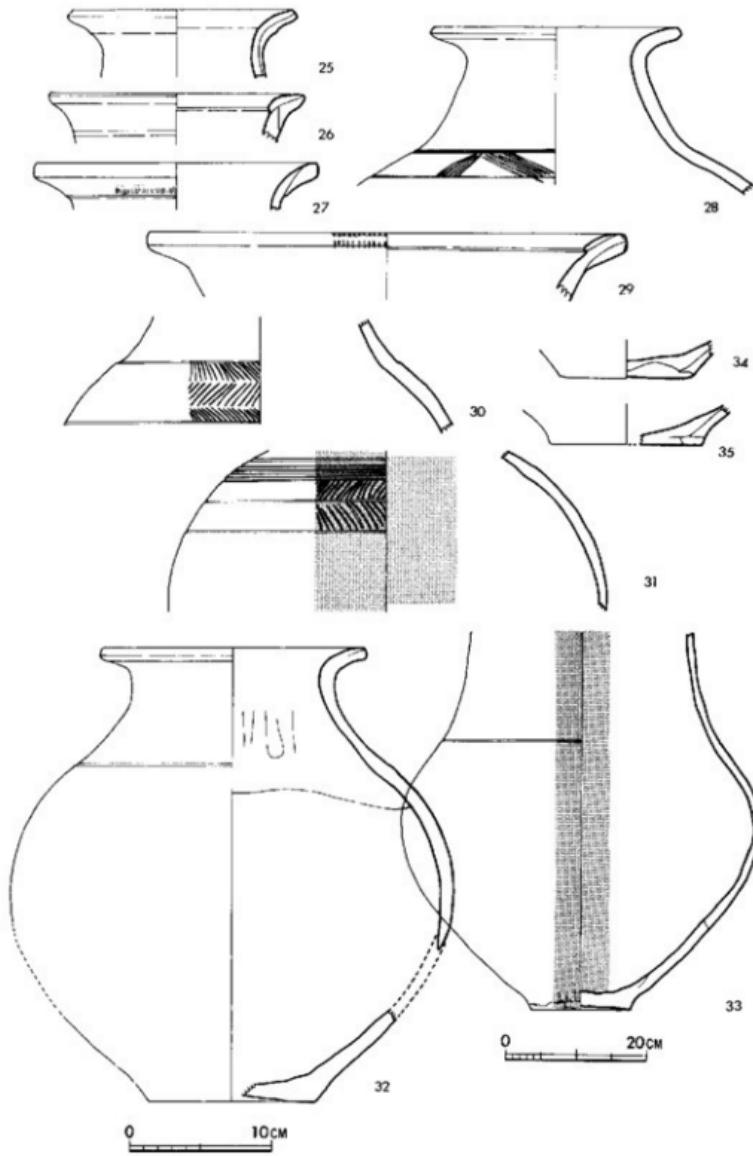


第25图 第15号袋状竖穴出土遗物实测图(2)

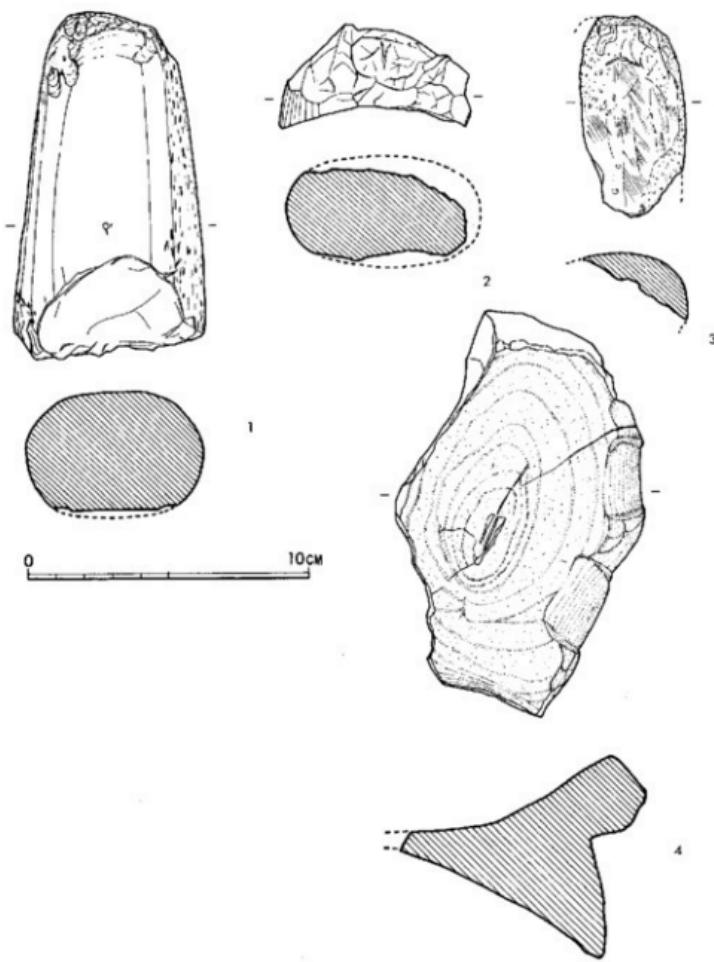
多く焼成良好。9は下部が若干肥厚する。外面丹塗り。内面褐色を呈し、両面とも横範磨き。胎土に石英砂の混入多く、焼成堅緻。23・24は口唇両端部に細かい端正な刻目を施すもので口縁は緩く外反し、下部は若干肥厚して低い段を有する。23は上端の刻目が大きく、外面赤褐色。内面は淡灰～褐色で丁寧な範磨きを加えている。胎土は砂質で焼成良好。口径36cm。24は外面褐～淡赤褐色、内面赤褐色で横範みがきが残る。胎土に石英細砂を含み、焼成良好。口径40cm。25は口縁下部が肥厚して稜をなす。外面褐色で丹塗り。横なで調整を加える。内面赤褐色で上部は横なで、下部は横範磨き。胎土精成され、焼成堅緻。口径17cm。26は口縁上端に粘土を貼付けて内傾する口縁を形造っており、外端部は尖る。内外面ともに褐～灰褐色を呈し、内面横なで調整。石英砂の混入多く、焼成不良。口径18cm。27は外方に粘土を貼付けて肥厚させ口縁を有し、下部は段状となる。外面赤褐色で細かい刷毛目調整後に横なで。内面黄褐色で横刷毛目がわずかに残る。胎土・焼成とともに良好。口径20cm。28は頸部下端付近に複線山形文を付す。器壁は均一で肩部内面には接合痕を残さない。外面は淡黄褐～赤褐色。内面は淡黄褐色で口縁付近に範磨きが残る。石英砂の混入多く、焼成良好。口径17.5cm。29は26と同様に口縁上部に粘土を貼付けて分厚い口縁を成しており、口唇両端部に刻目を付す。内外面赤褐色で、外面は口縁を壺なで、内面は口縁下に細かい横刷毛目を残す。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。口径34cm。30は肩部に鋭い端部の壺状工具によって不整な無軸の羽状文を付し、頸部下端は強い壺なで段状となる。外面は黄褐～赤褐色。内面褐～暗褐色で指によるなでがみられる。胎土、焼成とともに良好。31は肩部に六条の平行沈線とその下に貝殻腹縁による右軸羽状文を付す。内外面ともに丹塗りである。外面黄褐色で横位の範磨き。内面暗褐色で指おさえがみられる。胎土に砂粒の混入は少なく、焼成は良好。32は胸部の脹らみが頭著でなく球状となり、境の明確でない刷・頸部には一条の沈線が描かれている。内外面ともに器面の荒れ、剥落が著しい。外面は暗褐～赤褐色。内面は暗赤褐色で指調整がみられる。胎土に石英粒の混入多く、焼成は不良。口径18.8cm。復元器高32cm、底径12cm。33は非常に大型の精成壺。胴・頸部の境には一条沈線が描かれるが、区別は不明瞭である。底部は上げ底となる。内外面ともに丹塗り。外面は黄褐色で、縦・横の範磨きが頭著であり、底部端は壺状工具の在痕がみられる。胎土精成され、焼成堅緻。器高54cm以上。胴部最大径51cm。底径14cm。34・35は壺底部であろう。34は外面黄褐色で横範みがき、内面赤褐色を呈する。胎土に砂の混入多く、焼成不良。底径9.5cm。35は外面褐～灰褐色で横範磨き調整。内面は剥落。石英砂の混入多く、焼成不良。底径10.8cm。

**蓋形（第25図22）** 22は壺蓋である。頭部径7cm、口径25cm、高さ9.5cmをはかり、頭部は緩くくぼむ。外面は赤褐色を呈し、細かい粗雑な刷毛目調整を施し、端部上面は指おさえがみられる。内面は淡褐色で口縁付近を横なで調整。全体火に遭って黒い。胎土に石英砂の混入非常に多い

**石器（第27図）** 1～3は大型船刃石斧。今山産玄武岩製である。1は刃部を大きく欠損する小形品。体部は頭部・両側辺部に敲打痕を残す以外は、研磨が行き届いている。現重量570g。西側壁出土。2も体部破片で、両側辺も丁寧な研磨がなされていることが知られる。3は頭部破片。頭部、側辺には敲打痕を残し、他は丹念に研磨されている。4は両面に凹面をもつ石皿



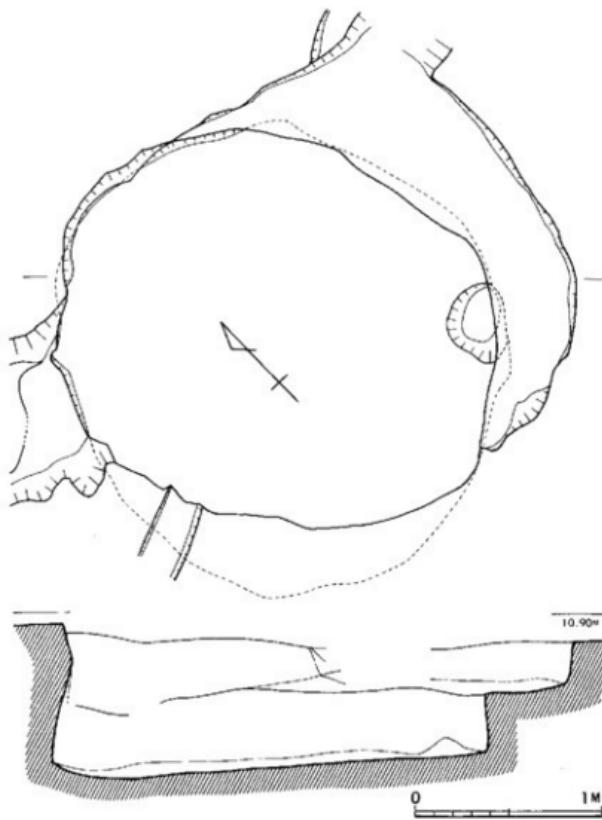
第26圖 第15號袋狀竖穴出土遺物實測圖(3)



第27図 第15号貯蔵整穴出土遺物実測図(4)

破片と考えられる。また側面には水平な擦切り部分があって把手を想定させる。粗粒砂岩製。  
以上出土甕・壺形土器から本堅穴の時期は弥生時代前期末と考えられる。

(横山)



第28図 第16号袋状竪穴出土状況図

#### 第16号袋状竪穴（第28図）

本竪穴はB-1区西側に位置する。平面は径2.4m程度の不整円形を呈し、壁は80cm前後を残して袋状となっている。竪穴東側は段状となっており、他遺構との重複かと考え精査したが明瞭な結果は得られなかった。また床面は東南側から北に向って傾斜しており、覆土の堆積は遺存部分で略3層として区別できる。上部より第1層（暗赤褐色土層）、第2層（暗赤褐色粘質土層・ロームの小プロックを多量混じる）、第3層（黒色粘質土層）であり、出土遺物を層序毎に区別図示した。全体に遺物の量は多くなく、他に炭化米数粒が第3層より出土している。

## 出土遺物（第29・30図）

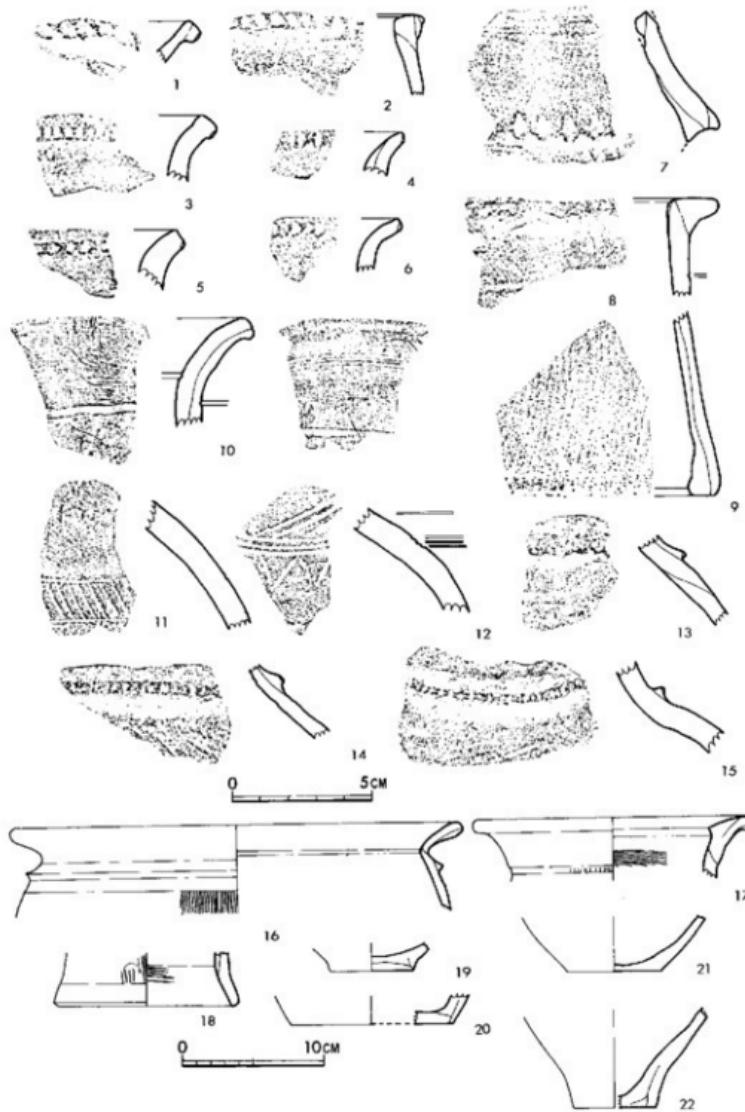
**第1層（第29図） 麒形土器（1～8・16・20～22）** 1は口唇に直接粘土を貼付け、浅い幅広い刻目を施す。内外面暗褐色～褐色。胎土に石英砂の混入少なく焼成良好。夜臼式土器か。2は小さな平坦部を有し、端部に端正な刻目を施す。器面は荒れが激しい。外面は赤褐色～灰色、内面淡い灰褐色。3～6はいずれも口縁下端に刻目を施す。3は内外面とも黒褐色で横なで調整。4は内外面ともに丹塗りで横なで調整。5は内外面ともに黒褐色で横なで調整。6は内外面ともに暗褐色で刷毛調整。以上は6を除いて胎土に石英砂の混入多く、焼成良好である。板付II式に相当しよう。7は腹脇部の屈折部。外面は丹塗りで横なで調整。夜臼式土器であろう。8は鋭い逆「く」字形の小さな口縁下に一条の沈線を有する。内外面とも暗褐色を呈し、外面は綴刷毛目調整で煤付着し、内面はなで調整。焼成不良。16は外面に粘土を貼付けて肥厚させた口縁部が「く」字形に鋭く屈折する壺。口縁直下には一条の三角突帯を付す。内外面とも赤褐色を呈し、外面突帯以下は粗い綴刷毛目調整がみられ、他は横なで調整か。口径32cm、後期の所産である。20・21は鉢底部か。20は外面暗褐色、内面黄白色を呈し、胎土、焼成とともに不良。21は内外面ともに淡褐色を呈し、横なで調整か。胎土精成、焼成良好。底径6.6cm。22は壺底部であろう。外面は赤味を帯びた黄褐色、内面黒褐色で指調整がみられ、また残滓の付着がみられる。底径5.6cm。

**壺形土器（10～15・17・19）** 10は頸部がかなり直立に近い壺で口縁下内外面に一条沈線を付す。口唇はなでによって緩く窪む。内外面ともに褐～淡灰褐色を呈し、外面は細い綴刷毛目調整後に横なで。内面は横なで。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。11は肩部に窪による有輪羽状文を付す。外面黒褐色で鏡磨き調整。内面暗赤褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。12は肩部に上部から窪による一条沈線下に複線八字形文、更に三条沈線をおいて單線の八字形文を付している。外面赤褐色、内面褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。13～15は頸部下端に低い刻目突帯を付すもの。13は内外面黄褐色を呈し、丹塗りか。14は外面黒褐色で粗い刷毛目調整後に横なで。内面は暗褐色。15は外面暗褐色で煤が付着し、内面は黄白色で下部に指おさえがみられる。これらは胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。17は短い頸と内傾する丈夫な口縁を有する。外面は暗褐色を呈し、痕跡的に綴刷毛目がのこる。内面は褐～黒褐色を呈し、粗い横刷毛目調整、煤の付着がみられる。胎土に石英砂の混入多く、焼成堅緻。外口径20cm。19は壺底部であろう。若干上げ底気味で外面褐色、内面赤褐色を呈する。胎土精成され、焼成良好。底径6cm。

**器台（9・18）** 9は端部が肥厚し、外面は黄褐色で粗い綴刷毛目調整後に端部を横なで、内部は褐～赤褐色で丹塗りか。胎土に混入物が少なく、焼成不良。18は緩く聞く脚部。外面は褐～赤褐色で粗い綴刷毛目調整後に横なで。内面は褐色で横位の粗い刷毛目を残し、他は横なで。胎土、焼成とともに良好。径12cm。

以上の様に第1層では中～後期の遺物を混じている

**第2層（第26図1・3・4・8・10）** 1は口唇に直接粘土を貼付けて突帯とする。刻目の有無は不明。外面は暗褐色で鏡磨き（？）、内面赤褐色で条痕（？）調整。胎土精成され、焼成



第29图 第16号袋状竖穴出土遗物实测图(1)

良好。夜白式土器か。**3**は緩く外反する妻。内外面とも丹塗りで、細い刷毛目調整を加え、口縁部外面は横なでを加えている。胎土に混入物少なく、焼成良好。**4**は壺口縁か。外面は黒褐色で横なで、内面は褐色で粗い横位の条痕に似た調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。**8**は妻底部であろう。若干上げ底となる。内外面ともに赤褐～暗赤褐色を呈し、外面は細い刷毛目調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。径8cm。**10**は妻蓋であろう。内外面とも褐色を呈し、外面は笠状のもので丹念に横箆磨き。端部は横なで。胎土に石英砂の混入多く、焼成良好。

**第3層（第26図2・5・6・7・9・11）** **2**は壺口縁か。外面灰褐色、外面褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。**5**は如意形口縁下端に刻目を施し、口縁下約5cmの部分に一条の刻目突帯を付す。外面は煤の付着が著しく、暗褐色を呈し、刷毛目調整。内面は褐色で横なでがみられるが、荒れが激しい。胎土に石英砂の混入少なく、焼成良好。板付II式でも時期の下降するものであろう。**6**は塊であろう。口縁よりやや下る部分が肥厚する。内外面とも暗褐色を呈し、丁寧な横箆磨き調整を加えている。胎土は非常に精成され、焼成は堅絶。口径16cm。**7**は臺底部。円盤貼付底の特徴を有し、若干上げ底となる。内外面とも褐色で胎土・焼成とも非常に良好。径5cm。**9**も臺底部。内面は剥落している。外面黒褐色を呈し、丁寧な横箆磨き、胎土に混入物少ない。底径10cm。**11**は妻底部で上げ底となる。外面褐色で継刷毛目調整。内面黒～黒褐色。胎土に石英砂の混入少なく、焼成良好。径10cm。

次に石器類の出土は多くなかったが、**12・13**は第3層に属する。**12**は黒曜石製鐵形石器。素材は打点を基部としており、打磨を削除し、両側縁にも二次加工を加えて尖頭状に仕上げている。**13**は黒曜石製石核、長幅とも4cm、厚さ2.5cm程度の扁平角礫の礫面を打面として5～6回の剝片剝離を行なっている。重量160g。

以上層序毎に遺物の説明を加えたが本竪穴の時期は第3層の遺物に基いて前期後葉と考えられる。

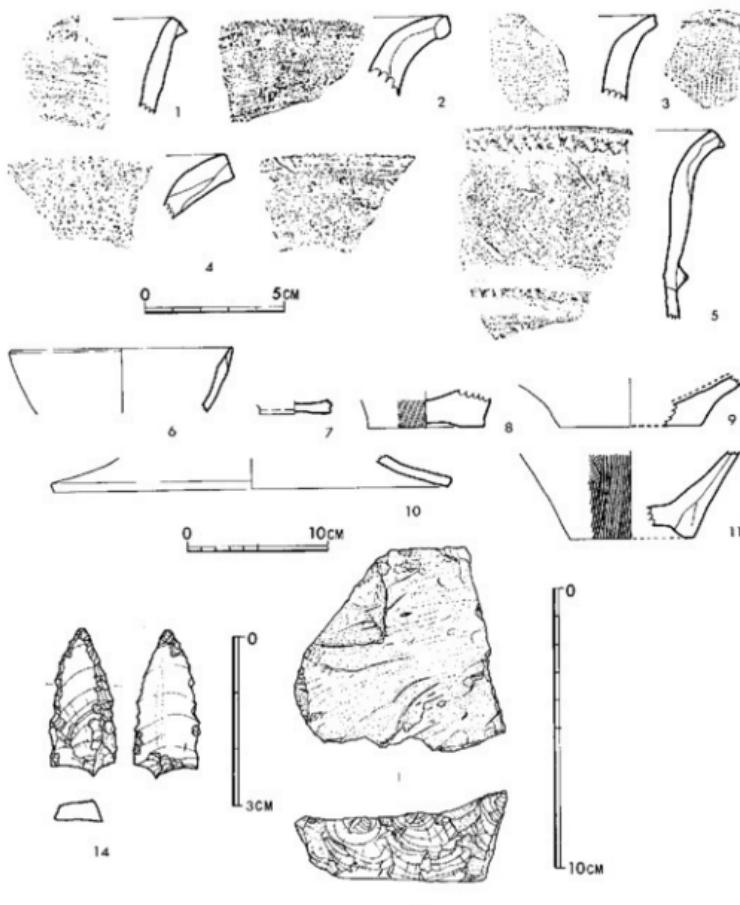
(横山)

#### 第17号袋状竪穴（第31図）

本竪穴は調査区東側（B区）に位置し、後世の削平が著しい。平面は底径2m内外の略円形で、壁面は10cm内外を残すが、東側を失っている。遺物は床面より變形土器口縁4・壺形土器口縁2、底部3個が出土した。

#### 出土遺物（第31図）

**1**は口唇に幅広く、深い刻目を施す妻口線部で内外面赤褐色を呈する。夜白式土器である。**2**は口唇に深い刻目を施す妻口縁部。外面横なで調整。暗褐色を呈する。**3**は肥厚して円味を有する口縁が逆「L字」形に近く屈曲する特徴をもつ妻口縁。刻目は鈍く1cm間隔である。内外面横なで調整を加え、内面一部に横刷毛目を残す。外面暗褐色。内面赤褐色を呈する。**4**は口縁下端の肥厚部に沈線を有する妻口縁。内面に粗い横刷毛目を残し、外面は横施磨き。また内面と口唇部は丹塗りで端正な造りである。以上の変形土器は各れも板付II式に属する。**5**は胴上端部に貝殻による精微な有輪羽状文を施した壺。頸部はしまりが良く、短く外反する口縁は若干肥厚する。外面の口縁部、胴部は横、頸部は縱の箆磨き調整を加え、暗褐～赤褐色。内面

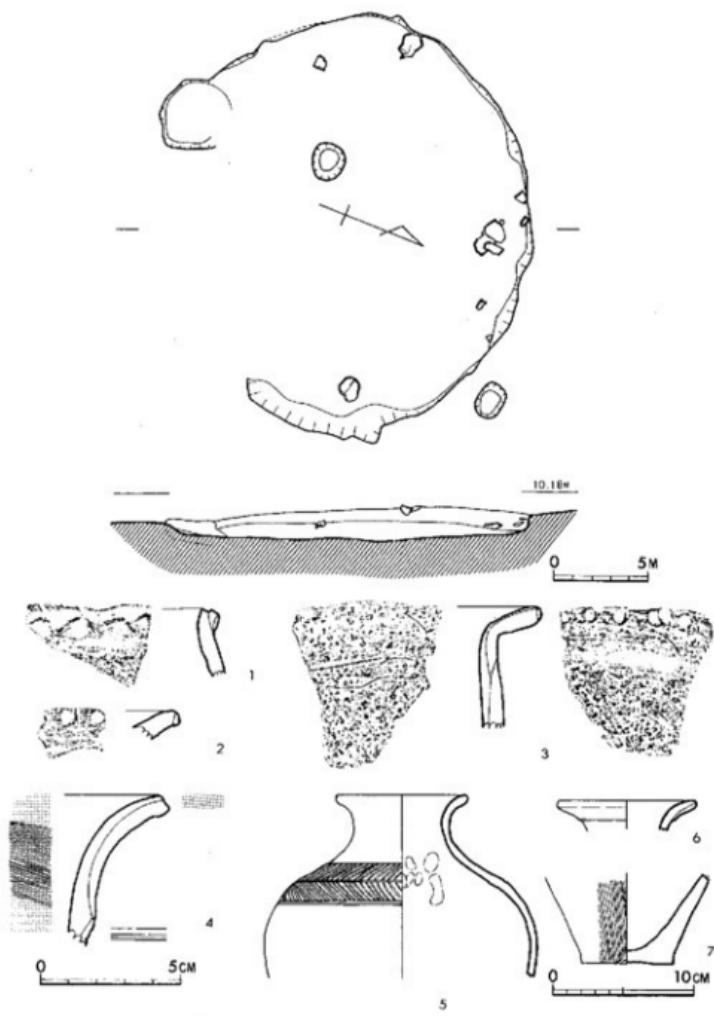


第30図 第16号袋状窓穴出土遺物実測図(2)

は頭部付近に指おさえで、以下は指なであげがみられ、赤褐色を呈する。胎土精良。11径9.4cm。6はII縁部が肥厚し段を有する壺。外面横なで、内面横斎磨き調整。暗褐色を呈する。口径9.8cm。各れも板付II式である。7は甕底部であろう。外面は細い継刷毛目調整で端部が幅0.8~0.9cmの工具を使用しており、煤付着。赤褐~黒褐色を呈する。内面は褐色で指おさえがみられる。

以上の遺物から本竪穴は前期後葉に營まれたと考えられる。

(横山)



第31図 第17号袋状窓穴・出土遺物実測図

### III. 竪穴遺構

#### 第1～6・9号竪穴（第32図）

第1～6号竪穴はA-1区に、9号竪穴はB-1区に位置している。第1・5・9号竪穴は湧水と壁面崩壊の危険性があったために中途で発掘を放棄した。第6～8号を除く他のものの形状は全体図を参照されたい。また遺構内からの出土遺物の量はかなり多いが、いずれも細片で冈に供しうるものは多くない。以下個別竪穴と出土遺物について説明をくわえる。なお第7・8号はA-4区で述べる。

#### 第1号竪穴（第32図1～5）

第1号は直徑1mを測る円形竪穴で、深さは1.5m以上ある。素振りの井戸址かと考えられる。遺物は近世以降の陶磁器、土師器、弥生式土器等であり、花崗岩礫も落込んでいる。

**遺物** 1・2は平坦口縁を有する甕。1は端部が垂れる。外面暗赤褐色。口縁上端、内面ともに灰褐色を呈し、横なで調整。胎土に石英粗砂の混入多く、焼成良好。口径32cm。2は口縁の外方への発達が良く、口縁下約4cmのところに鋭い一条の三角突帯を付している。内外面ともに淡褐色を呈する。胎土に石英粗砂の混入多く、焼成堅緻。口径約42cm。いずれも弥生中期後葉の所産であろう。3は口縁が「く」形に屈曲する甕。外面淡赤褐色、内面赤褐色を呈し、とともに粗い刷毛目調整を施している。内面はこの後胴部に指おさえがみられる。胎土に石英微砂の混入多く、焼成は良好。口径約14cm。弥生時代後期のものである。4は回転切り離し（？）底を有する土師器皿。若干上げ底となる。内外面ともに淡褐色で、内面は指おさえ後に横なでを加える。底径7.4cm。5は約半分を欠損する投弾。淡褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好。

#### 第2～4号竪穴（第32図6）

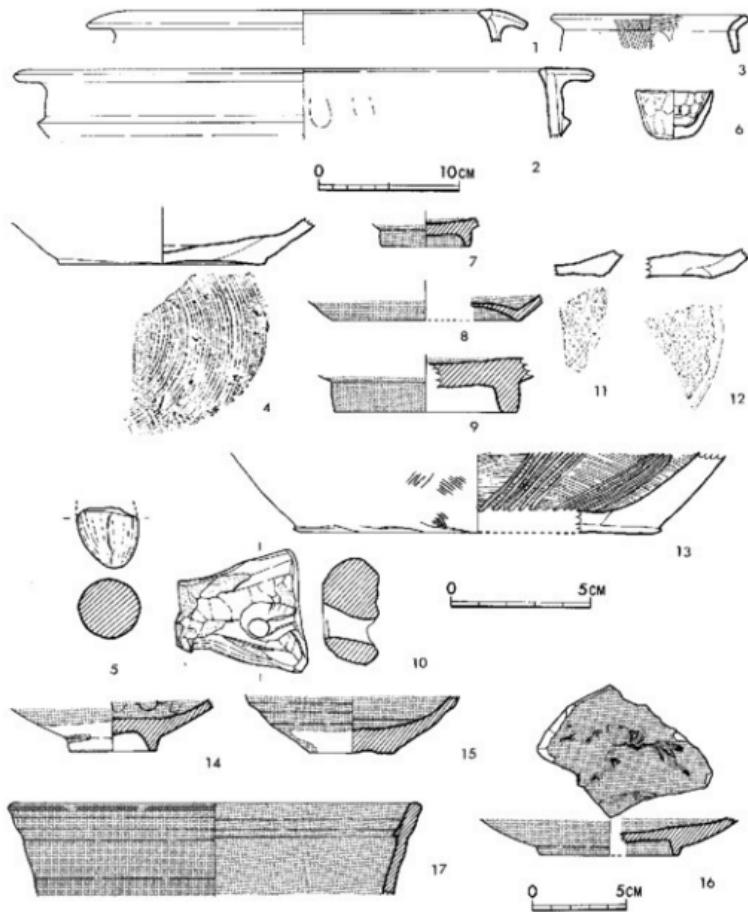
これらはいずれも削平をまぬがれた南側段状部にあり、近接して営まれている。それぞれ形状と法量を記せば、2～4号とも円形であり、2号—径68cm・深さ33cm。3号—径60cm・深さ39cm。4号—径45cm・深さ42cmであって、床面に薄く炭化物の付着がみられるが熱を受けた痕跡はない。同所に見出されるP 1～8・10等の出土遺物を援用すると、生活遺構の一部をなすと思われる。遺物は弥生式土器破片であり、3号より手捏ね上器1個が出土した。

#### 遺物

6は内外面ともに指調整が著しい。内外面ともに淡灰褐色を呈し、焼成良好。口径5.5cm、高さ3.5cm内外である。

#### 第5号竪穴（第32図7～10）

5号は中央南側に位置し、形状不明で長さ1.5m、深さ1m以上。内部より近世以降の陶磁器、弥生式土器破片等が出土した。未完掘。7～9は磁器底部。7は見込みに青灰色釉が掛かり、露胎部は淡褐色。底径3.4cm。8は皿か。上げ底となる。体部外面淡黒色、内面淡褐色。釉が掛かっている。底径6.6cm。9は分厚く安定した底部を有する。体部外面は黒褐色釉。底部外面は露胎となり淡褐色。底径6.6cm。10は滑石片岩を使用した不明石製品。扁平な分銅状部分中央に一孔を穿っており、片面はこの孔より上方に溝を連絡させている。



第32図 第1～6・9号竪穴出土遺物実測図 (1～5-1号・6-3号・7-10-5号; 11-13-6号  
14-17-9号)

### 第6号竪穴 (第2・32図13)

6号は第14号袋状竪穴の西南隅を切っていると考えられる。直径1.1mの円形で深さ65cmを残している。東側には対峙する位置に縦の細長いビットを設けている。遺物は瓦器實土器・土師器・青磁器小片・弥生式土器破片等である。

**遺物 (11～13)** 11・12は糸切り離し底の土師器皿底。11は褐白色を呈し、底部端を籠状のもので削り取っている。12は外面褐色、内面淡灰色。いずれも胎土精選され、焼成良好。13は

桶鉢である。内外面ともに明褐色を呈する。外面は刷毛目調整後に胴部のみで調整。内面は横位の刷毛目調整後に6本単位の櫛齒状工具でなであげている。胎土は精成され、焼成良好。底径11cm。

#### 第9号竪穴（第32図14～17）

9号はB-1区に位置し、第16号袋状竪穴横に営まれている。直径85cmの円形で深さ1m以上を残す。素掘りの井戸址か。未完掘。遺物は近世以降の陶磁器。弥生式土器破片。花崗岩大礫が出土している。

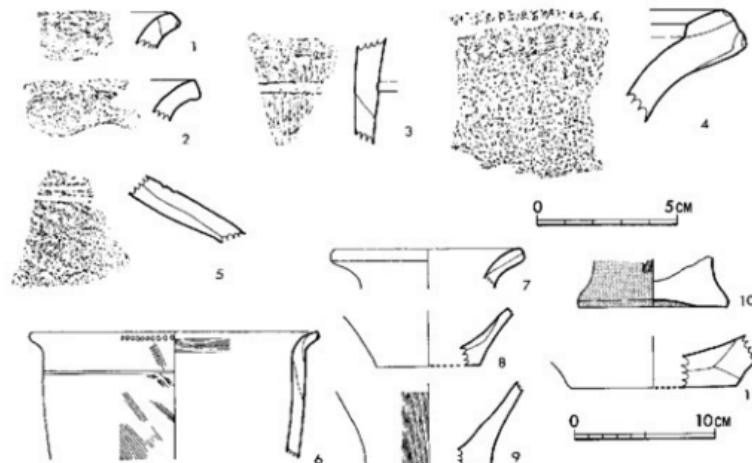
遺物（14～17） 14～16は磁器。14は高台端部に削りを加えている。外面白褐色、内面灰褐色釉を掛けている。内面見込みより上った位置には藍色釉で半円文を描いている。底径4.4cm。15は皿か。体部内外面に褐色を帯びた緑色釉を掛け。底部外面は中央を窓状のもので削り取り、ヘソ状となる。露胎部は赤褐色。底径4.4cm。16は体部外面に褐白色釉を掛け、内面見込みに暗い藍色で花文様を描いている。底径7.5cm。17は陶器鉢か。内外面ともに黒紫色釉を薄く掛けている。内面にはかえし状の小突起が付されている。口径22cm。近世以降のものであろう。

（横山）

#### IV 小竪穴群（第33図1～11）

柱穴と考えられる小竪穴は、A-1区で12個・A-2区11個が検出された。いずれも径30cm程度の小型竪穴であり、細部は第2図を参照されたい。ここでは内部より出土した実測可能な遺物を挙げるにとどめる。

遺物はまずA-1区のもので8・9が2号。11が4号。2・5が5号。1・3・4・7が6号である。またこれ以外はA-2区で10が1号。6が6号の出土である。1は口縁下端に刻目



第33図 A-1～A-2区小竪穴群出土遺物実測図

8・9-S-P-2, 11-S-P-4, 2・5-S-P-5,  
1, 3, 4, 7-S-P-6以(A-1区)、以下A-2区10-S-P-1,  
6-S-P-6(SPは小竪穴)

を付す甕。外面暗褐色、内面赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。板付II式である。2も甕。内外面ともに暗黄褐色、石英砂の混入多く、焼成不良。3は口縁下に一条沈線を付す甕。内外面褐色。石英砂の混入多く、焼成良。板付II式である。4は口縁上部に粘土を貼付けて肥厚させ、両端部に刻目を施している。外面黄褐色、内面黒色で、横なで調整。焼成不良。前期末の所産であろう。5は頸部下端に二条沈線を付した甕。外面赤褐色、内面淡褐色。焼成良好。6は口縁下端部に細かい刻目を付し、下部に一条沈線を廻らしている。内外面ともに暗褐色を呈し、刷毛目調整。器面の荒れが激しい。口径20.4cm。板付II式である。7は口縁端部が若干肥厚する甕口縁部。外面明褐色を呈し、横なで。内面褐色。石英砂の混入多く、焼成良好。口径14cm。8・9は甕底部。8は外面淡黄褐色。内面黒～暗褐色を呈する。胎土に石英砂の混入は多く、焼成不良。径7cm。9は若干上げ底となる。外面赤褐色で非常に細かい刷毛目調整。内面は暗褐色。胎土は非常に精成され、焼成良好。径8.4cm。10は端部が断面三角形に突出し、上げ底となる。底部及び体部外面は丹塗り。外面に細かい刷毛目が残る。径10.4cm。11は甕底部であろう。非常に分厚く安定している。外面暗褐色、内面褐～赤褐色を呈する胎土に石英粗砂の混入が多く、焼成は不良。径12cm。

(横山)

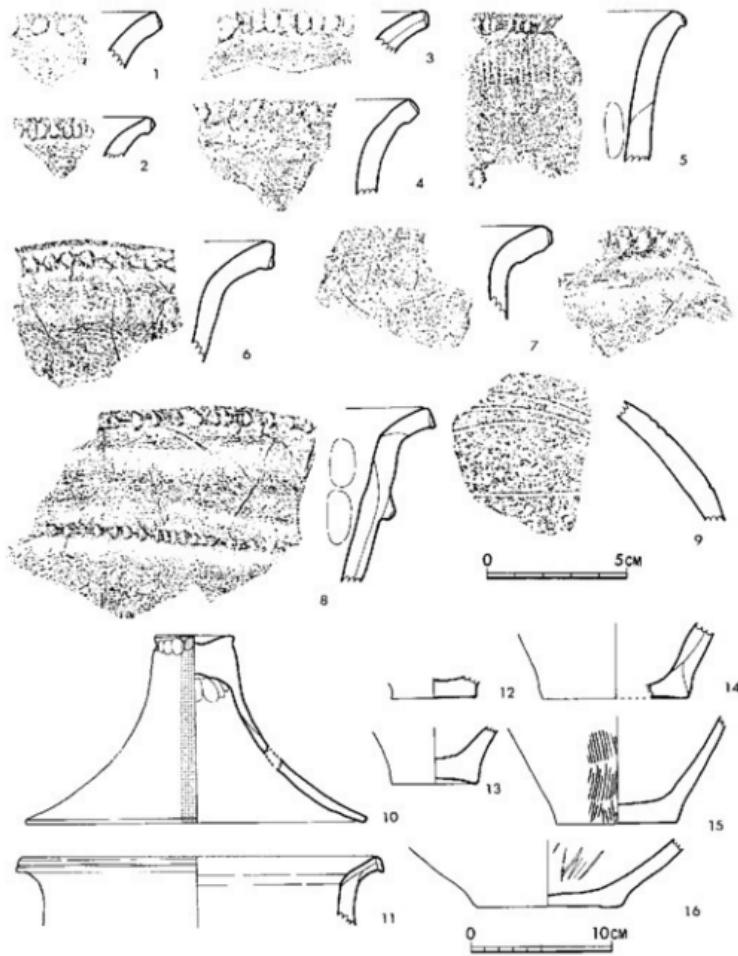
## V A-3区土器群（第34図1～16）

A3区では第12号竪穴の南側に隣接して黒色土層の拡がりがあり、土器類の出土がみられた。本区は後世の削平が著しく弥生時代の竪穴と考えて調査したが遺構としてのまとまりは認めなかつた。

以下出土遺物について個別に説明を加える。

### 變形土器（1～8・11・13～15）

1・3・5～8は口縁下端に刻目を付した甕。1は外面黒褐色、内面暗褐色を呈し、横なで調整。刻目は幅ひろい。3は端部が丸味をもつ。内外面ともに赤褐色。刻目は細かく端正。5は内外面ともに暗褐色、外面に粗い刷毛目調整。内面は指おさえ。6・8は口縁端が幅広くなる。6は内外面ともに暗褐色。外面は細かい刷毛目調整後に口縁下を横なで。刻目は鈍く、端正。8は口縁下約4cmのところに一条の刻目三角突帯を付す。内外面ともに黄褐色。外面は細かい縱刷毛目調整後に口縁下と突帯上下を強く横なで。内面指おさえ。7は口縁が若干肥厚し、端部は丸味を有す。以上はいずれも胎土に石英砂の混入多く、焼成は良い。板付II式に相当する。2・4は口唇いっぱいに端正な刻目を施す甕。2は外面黒褐色、内面褐色を呈し、刻目は間断なく付される。焼成良好。4は内外面とも灰褐～黒色。内面横はで。刻目は緩い間隔で丸味をもつ。焼成不良。11は口唇が幅ひろく端部が垂れて、口縁は屈曲が著しい。外面赤褐色、内面黒色。いずれも横位の蒐磨き調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。口径26cm。13～15は甕底部であろう。13は上げ底となる。外面褐色、内面暗褐色で外面は縱の範なで。焼成良好。径6cm。14は端部が若干脹らむ。内外面ともに暗赤褐色で外面は縱の範なで。焼成不良。径10cm。15は内外面ともに暗黄褐色を呈し、外面は非常に粗い縱刷毛目調整。胎土、焼成とも不良。径8.6cm。



第34图 A3区土器群实测图

**壺形土器 (9・12・16)** 9は胴上部に重弧文を付す壺。外面淡灰褐色。内面褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。12・16は壺底部であろう。12は内外面ともに褐色。内面は細い刷毛状のものでなで回している。胎土精成され、焼成良好。径6cm。16は外面暗褐色、内面黒色。外面は施磨き調整。内面に窓の端部痕がみられる。胎土に石英砂の混入非常に多く、焼成不良。底径10.6cm。

**蓋形土器 (10)** 10は甕蓋。器高に比べて頭部が大きい。頭部頂は瘤み、外面端部は丁寧な指おさえがみられる。外面褐色で丹塗り。指などで調整を施す。内面は褐～暗褐色を呈し、横などで調整。頭部には指おさえが著しい。頭部径5.4cm。推定器高13.5cm。口縁24cm。板付II式であろう。

(横山)

以上出土遺物では前期後半期のものが殆どを占めている。

## VIA 1~3区表土層出土遺物 (第35図)

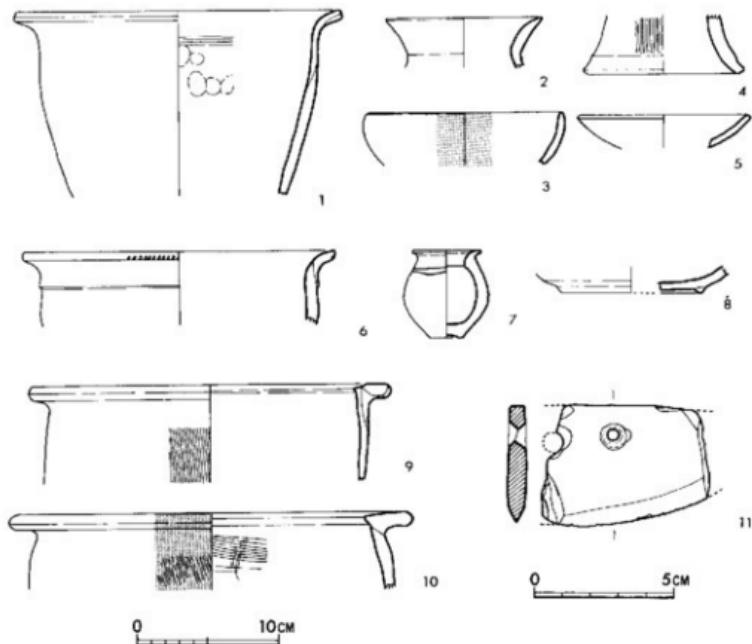
同区内の表土層ではA 4区に比べて特に近世以降の陶器類の出土が多く、次いで弥生式土器、瓦器質土器、土師器皿等が知られるが、ここではその若干を挙げる。

**A 1区 (1~5)** 1は緩く外反し、端部が肥厚口縁を有する壺で、胴部の脛らみは小さい。内外面ともに暗褐色を呈する。内面に粗い横刷毛目、指おさえがみられる。口径23.5cm。2は口縁、頭の区別が明らかな壺。外面褐色。内面淡灰色である。胎土は非常に精選され、焼成良好。口径11cm。板付I式である。3は口縁が内寄する鉢。内外面ともに丹塗り。胎土、焼成とともに良好。4は器台。外面端部付近は若干脛らみ、横などで調整。上部には粗い横刷毛目が残る。内外面ともに赤～黄褐色。径10.5cm。5は内外面ともに横なでを加え黒色を呈する浅い碗か。胎土に石英砂の混入は少なく、焼成良好。弥生式土器ではない。口径12.5cm。

**A 2区 (6~8)** 6は口縁部下端に細かい刻目を付し、下部が肥厚して緩い段を有する壺。外面暗褐色～赤褐色を呈し、口縁下を横なで、段状部以下を窓の窓など。内面明褐色。石英砂の混入多く焼成良好。口径22cm。板付II式である。7は施磨き調整を加えた小型壺。内外面黒色を呈し、頭部に鋭い窓状のもので不整な二条沈線を廻らす。口縁はかなりいびつで、底部は上げ底となる。胎土は精成され、焼成良好。口径5m。器高63cm。底径2.4cm。板付II式であろう。8は低く丸味をもった高台を有する壺。内外面ともに淡黄褐色。体部横なで、底部は窓状のもので横に削っている。底径10cm。

**A 3区 (9~11)** 9・10はいずれも口縁外方に発達の良好な窓。9は胴部の張りが弱く、直立している。内外面ともに暗赤褐色を呈し、外面に刷毛目を残す。胎土精成され、焼成良好。口径26cm。中期初頭であろう。10は胴部がやや脛らんで口縁は内傾している。外面褐色、内面暗褐色を呈する。いずれも刷毛目を残す。胎土精成、焼成堅緻。口径29cm。11は身幅の狭い半月形石突丁破片で、刃部は両刃となる。三郡變成岩質の雲母片岩製。

(横山)



第35図 A 1～A 3区表土層出土遺物実測図

## VII 率め

以上出土した諸遺構、遺物について述べたが、A 1～A 4、B 1区での弥生時代前期前葉～末にかけての袋状空穴（貯藏穴）群の検出は、中期には既に埋覆が進み、溝施設としての機能がそれほど活発でなかったものと推定される環溝遺構の廃絶の傾向と弥生時代前期後半以降の生活址が板付丘陵のほぼ全面をおおっている事などと関連し、板付「ムラ」の分散・拡大化を物語るものとして興味深い。

また前期の墓地については、前期末の槨棺とともに青銅利器類が見付かった田端遺跡に近いB-1区で関連が把めるものと予想したが果せず、路線東側の来年度調査地点に期待がもたれる。

更に生産遺跡は丘陵東・西側にあたる路線両端部で検出される可能性はあるが、板付水田遺跡の沖積地調査で知られた様に弥生中期以降の河川の氾濫はすさまじく、これによって耕作面が失なわれている事も予想される

（横山）

第1表 A1·A2区小竖穴表

区名	番号	形狀	径(cm)	深さ(cm)	備考
A-1	1	円	31	30	高脚盤片1 小脚盤片2
	2	円	30	38	圓盤片1 圓盤片内12 枝脚盤片1 枝脚(?)1 小脚(花脚)1
	3	円	25	40	圓盤片2
	4	円	30	24	圓盤片1 圓盤片2
	5	円	30	27	圓盤片1 圓盤片1 不規則盤片12 圓盤片内12 枝脚(?)1 枝脚(花脚)1 圓盤片1 小脚 1
	5'	円	40	45	圓盤片1 圓盤片1 圓盤片2 枝脚(?)1 圓盤片1
	6	円	44	60	圓盤片2 圓盤片2 枝脚盤片1 枝脚盤片2 不規則盤片3 枝脚(花脚)3 枝脚(?)3 小脚 1
	6'	円	25	60	SP-Gと並び

区名	番号	形状	径(cm)	溝さ(cm)	備考
A-2	7	円	34	27	要打鍔 斜面切片1 斜面切片2 内円(周厚)1 外円(周厚)1
	8	円	35	25	斜面切片1
	9	円	37	30	斜面切片4
	10	円	35	13	イフツナ1 斜面切片2 不規則切片1
	1	円	36	27.5	地 斜面切片3 不規則切片4 斜面(周厚)1
	2	円	40	41.5	地 斜面切片1 不規則切片4 斜面(周厚)1
	3	円	44	21.5	イフツなし
	4	円	65	26.5	*
	5	円	44	29	*
	6	円	70	26.6	*
	7	円	33	40.6	*
	8	円	48	35	*
	9	楕丸方形	50×70	32.2	*
	10	楕丸方形	70×80	25.3	*
	11	円	50	12.5	*

## 第2章 A 4区

### 1. 調査概要（第36図）

A 4区は板付台地の西斜面にあたる。調査前には納屋などが建てられていたが、他の調査区に比較して遺構の残りが良かった。

遺構としては弥生時代の竪穴遺構2、竪穴住居址1、土塙墓1、井戸址1、古墳時代の土塙2、中世以降の井戸址1、柱穴その他と思われる小竪穴130が検出された。この小竪穴群も第77号小竪穴を中心とした半径3m以内のものや、第110号小竪穴を中心とした半径3m以内のものは円形にまとまる可能性があり、あるいは住居址が床面まで削平され、柱穴のみ残存したものかもしれない。

この他に台地端に近い調査区西側の擾乱層中から細石核の出土があり、この台地上にその時期の包含層が存在していたことは確実である。

### II. 弥生時代の遺構

#### 1. 第1号住居址（第37・38図）

本調査区西端に位置する。南半は調査区外で、現在もその上に家があるため調査できなかった。西半は近世の土取りか何かで柱穴を残して全く消失しているため調査できたのはほぼ住居址の1/4である。住居址は円形を呈し推定径約6m 20cm前後であろう。残在の壁はしっかりとしているが、東側の一部をSP103に、北壁を第8号竪穴に切られている。現存の壁高30cm。東側と北側では壁から約20cm程度の床面で小さな段がつけられる場所がある。床面は暗褐色土層の上に黄色い鳥栖ローム層を固めている。ピットは内部で16個検出された。主柱穴と考えられるものは2・3・7・11で、1・4・5も補助柱穴と思われる。また14・16も内部の柱穴であろう。15は後世のものである。

#### 出土遺物（第37・38図）

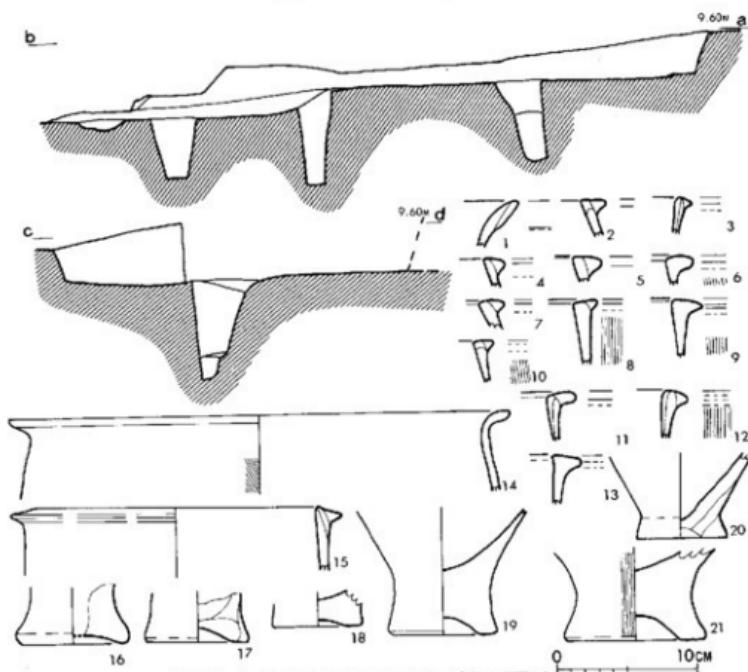
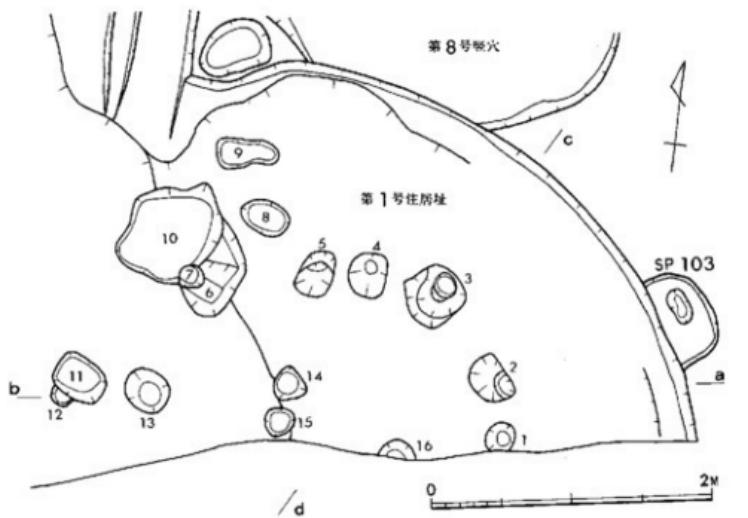
##### 橢形土器（第37図2～15・第38図1～9）

第38図1は夜臼式土器である。口縁部に刻目突帯が巡り、口縁下面是条痕。第38図2～6、第37図14は板付II式土器である。第38図2～5は外反する如意状II縁の下端に刻目を施したもので、第38図2は口縁部横、胴部は縱の刷毛目調整。第38図6は口縁部を欠くが口縁下に二条の沈線を巡らし、そこ以下に斜めの刷毛目調整。第37図14は刻目はもない。外面斜めの刷毛目調整。第38図7～9は前期末～中期初頭の上器である。第38図7は口縁部で刻目突帯をもつが、夜臼式に比べて突帯が大きく刻目は小さい。第38図8・9は胴部に刻目突帯を巡らす。第37図2～13・15は中期初頭の土器で、いずれも断面三角形に近い外側張り出しをもつものと、その発展段階ともいえる第37図11・13のようなものである。第37図6・8～10・12は外面に縱刷毛目調整。口縁部は横なで調整。

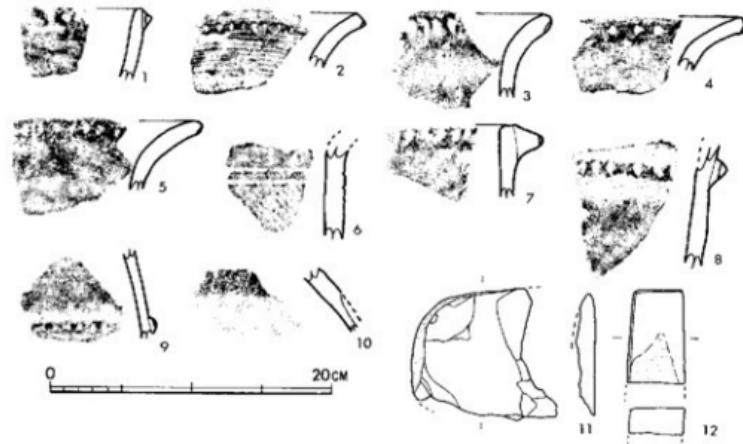
##### 壺形土器（第37図1・第38図10）



图362 A.4.1. 满佈化石



第37図 A 4区第1号住居址および出土遺物実測図(1)



第38図 A-4区第1号住居址出土遺物実測図(2)

第37図1は外反する口縁部が肥厚し外側に段がつく。板付I式。第38図10は脇部で、櫛状の工具か、細い貝殻腹縁で文様をつける。板付II式か。

#### 底部 (第37図16~21)

第37図20は平底、他は上げ底を呈する。第37図20は断面三角形に外面が張り出す。夜臼式のものであろう。他はいずれも中期初頭の特徴をもつ。第37図21は外面に縦刷毛目調整。いずれも甕の底部であろう。

#### 石器 (第38図11・12)

第38図11は砾石であろう。褐色の中粒砂岩製であろう。第38図12は片刃石斧の破片であろうか。左右両側面は磨研されている。暗褐色の粗粒砂岩製。

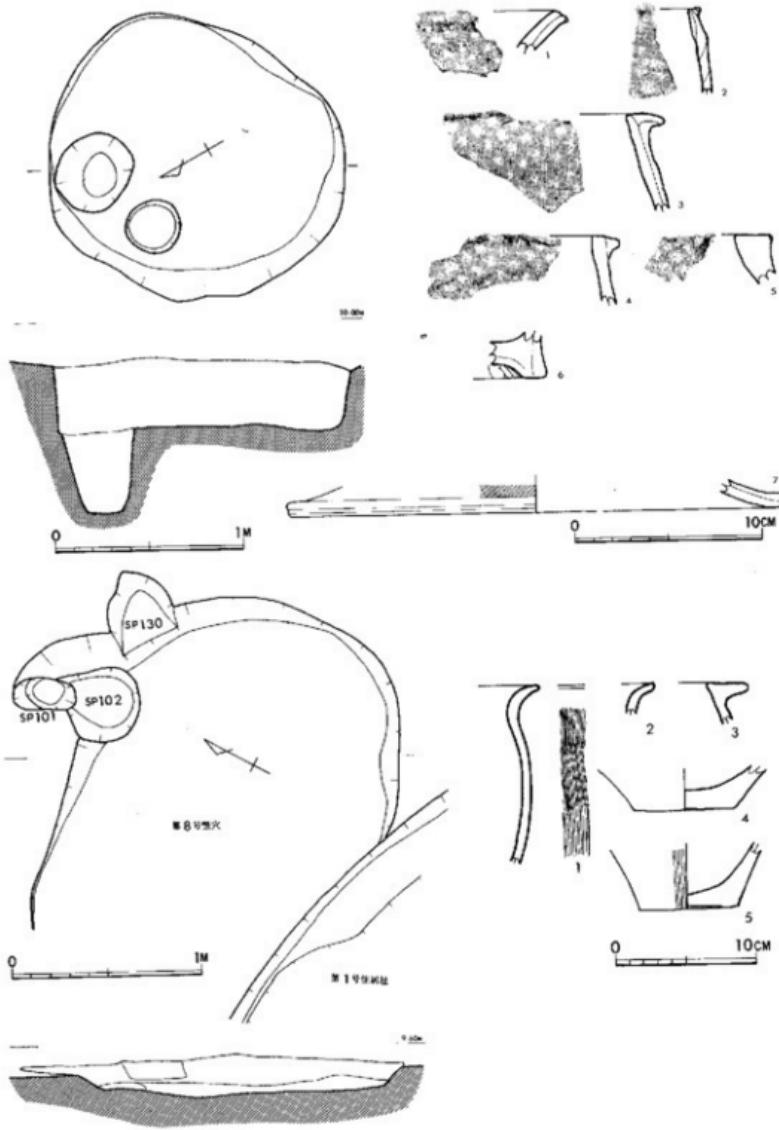
以上の如く、第1号住居址は中期初頭のものである。

(沢重臣)

#### 2. 第7号竪穴 (第39図)

径1.50mの不規円形の竪穴で、床面からの立ちあがりは、比較的急であるが、発掘時の鳥柄ローム層の掘り込みは、35cm前後である。内部堆積層は、上から黒褐色土層、黄褐色土層、黒色土層と3層で、ほぼ水平に堆積している。遺物は黒褐色土層にほとんど含まれているが、最下部の黒色土層中にも、少量の遺物が含まれている。なお、平坦な床面の北側に2個の柱穴状竪穴があり、北側の深い方はこの竪穴より時期的に後出であるが、他の1個はこの竪穴付設のものと考えられる。

**出土遺物** 1~6は変形土器の破片で、1は外反する口縁下端に刻目がつけられており、2~4・5は先端に刻目がある三角突帯を巡らし、4は口縁下に縦の刷毛目調整が施されている。3は逆「L」字状口縁で、口縁下に二条の浅い沈線を巡らし、口縁直下から縦の刷毛目調整が



第39図 A.4区第7・8号竖穴および出土遺物実測図

施されている。6は上げ底の底部である。いずれも胎土には石英・砂粒を含み、堅緻で焼成も良好であり、褐色から灰褐色を呈している。7は脚部。

以上からこの竪穴の性格はわからないが、弥生時代中期初頭以前のものと考えられる。

(山口謙治)

### 3. 第8号竪穴（第39図）

台地西側に位置し、南側で住居址の壁を切り、北側でも、101号、102号、129号小竪穴を切っている。西側は台地の削平により、平面を確認できない。壁の立ち上がりはゆるやかで、床面は弱い凹凸である。

**出土遺物** 1は甕で、口縁部横なで調整。外面は継刷毛目調整を施す。石英砂粒含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。2は甕で、口縁部横なで調整。石英砂粒を含み、焼成良好。赤褐色を帯びる。3は甕で、逆「L」字状口縁部の上面は平坦である。器面は横なで調整。石英砂粒を含み、焼成良好。黄白色、淡褐色を帯びる。4は壺、5は甕の底部である。石英砂粒を含み、焼成良好。黄白色、暗褐色を帯びる。1・2は板付II式。3は中期中葉、4・5は中期である。

以上の土器から、この竪穴の時期は中期中葉であろう。

(原 俊一)

### 4. 第1号土塙墓（第40図）

A4区西側、第1号住居址の東側に位置する。東側を小ピット（P-66・P-67）に切られているが、外径123cm×70cm、底径93cm×39cmの長方形を呈する。西側と北側にかけて「L」字状に段がつき西側段上には小さなピットが1個存在する。底面は若干西に傾斜している。埋土中からは若干の炭化米と弥生式土器片が出土した。

#### 出土遺物（第40図）

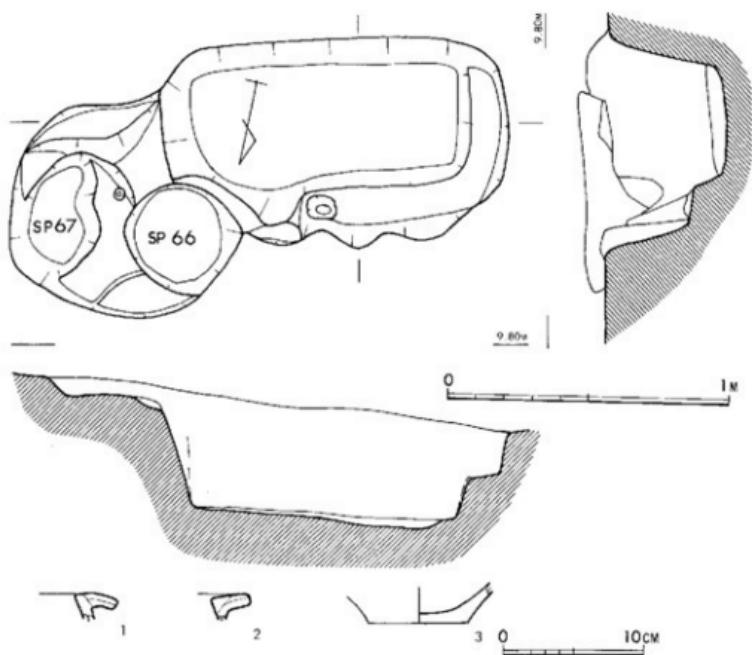
1・2は逆「L」字状を呈する甕の口縁部である。1は口縁外端、2は口縁内端が下がる。いずれも横なで調整。1は中期中葉、2は中期前葉のものであろう。3は壺の底部か。

以上のことから、これが墓であるかは不確実ではあるが、一応土塙墓とし、時期は中期中葉以降のものであろう。

### 5. 第1号井戸址（第41図）

第一号井戸址はA4区の東端で、本調査区の最も高所に位置する。標高10m 32cmに位置する井戸口は後世の細長い浅い土塙によって切られているが口径は約1mを測る。標高9m 5cmまではややすばりながら下り、ここから急速に肩が張り、標高8m 73cmの地点で最高の広がりをもち、2m 12cmを測る。この点はまた鳥栖ローム層から八女粘土層への変化点であり、最初の湧水点もある。そこから急速にすばり、標高8m 45cmから8m 25cmの間に一度段がつくが、標高約7m 90cmの点からはほぼ垂直な壁をもち、75~80cmの径で下がる。標高6m 80cmの点で八女粘土層から青灰色砂層へと変化するが、ここから漸次すばり、標高6m 25cmで底に達する。底部の径は約50cmで、現存の深さは4m 7cmを測る。この青灰色砂層もまた湧水点であり、井戸としてはこの湧水点の方を利用したものであろう。

遺物はほとんど全域から出土するが、特に標高8m 50cmから7m 85cmの間に壁に密着する様

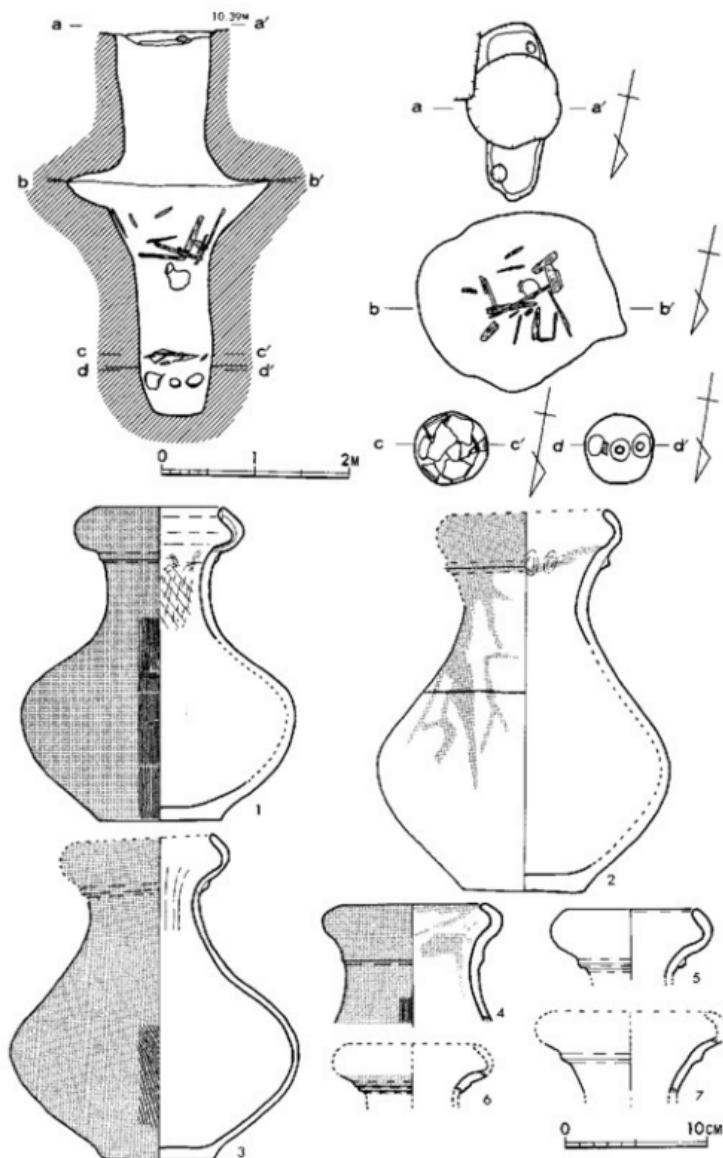


第40図 A4区第1号土塙窯および出土遺物実測図

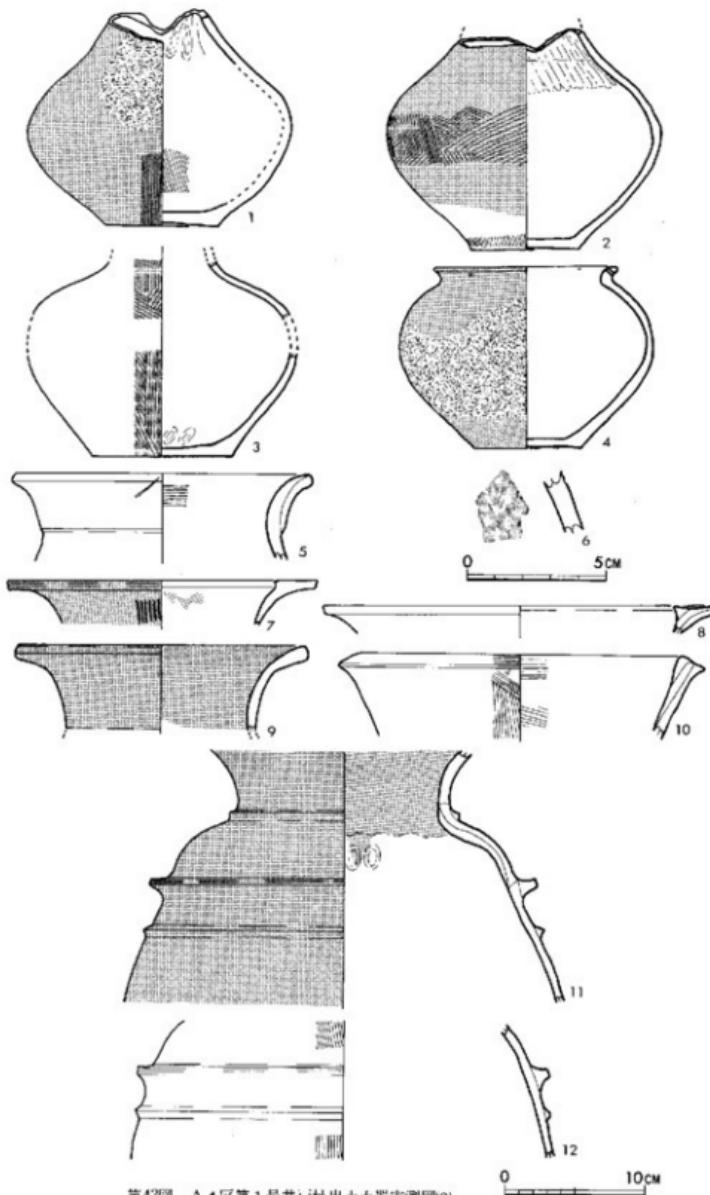
に、縦、横の木材がみられた。これは、このあたりの八女粘土層が非常に崩落し易いために、強化したものと考えられる。これと同じようなものが昭和26~29年調査の第3号井戸にもみられる（森・岡崎1961）。この下部標高7m 60cmの所に口縁部一部打ち欠きの丹塗りの袋状口縁壺1個（第41図1）が検出された。このことは、この深さが井戸として最後に使用された可能性を示している。その下は約60cm程度遺物の少ない層があり、標高6m 90cmの所に大型の壺棺（第45図1）の胴部より上を、わりと大きな破片にして敷いた遺構がある。この地点は八女粘土層と青灰色砂層の境界の若干上部であり、湧水の漏りを防ぐためと、井戸さらいをもし、この時代にもしているとするならばそれを容易にするという利点をもつであろう。板付遺跡G・H-5地点第10号軽穴とした井戸址でもこのような遺構がみられる（山口1776）。この下にはやはり丹塗りの口縁部を一部打ち欠いた袋状口縁壺（第41図2）1個と同じような袋状口縁壺の頭部以上を打ち欠いたものの2個（第42図1・2）が出土している。この井戸からは土器の他に石器としては石庵丁未製品、自然遺物としてイノシシの歯1個が出士している。

#### 出土遺物（第41~46図・第51図11）

第41図、第42図1~3は袋状口縁の壺である。第41図1は標高7m 60cmの位置から出土した

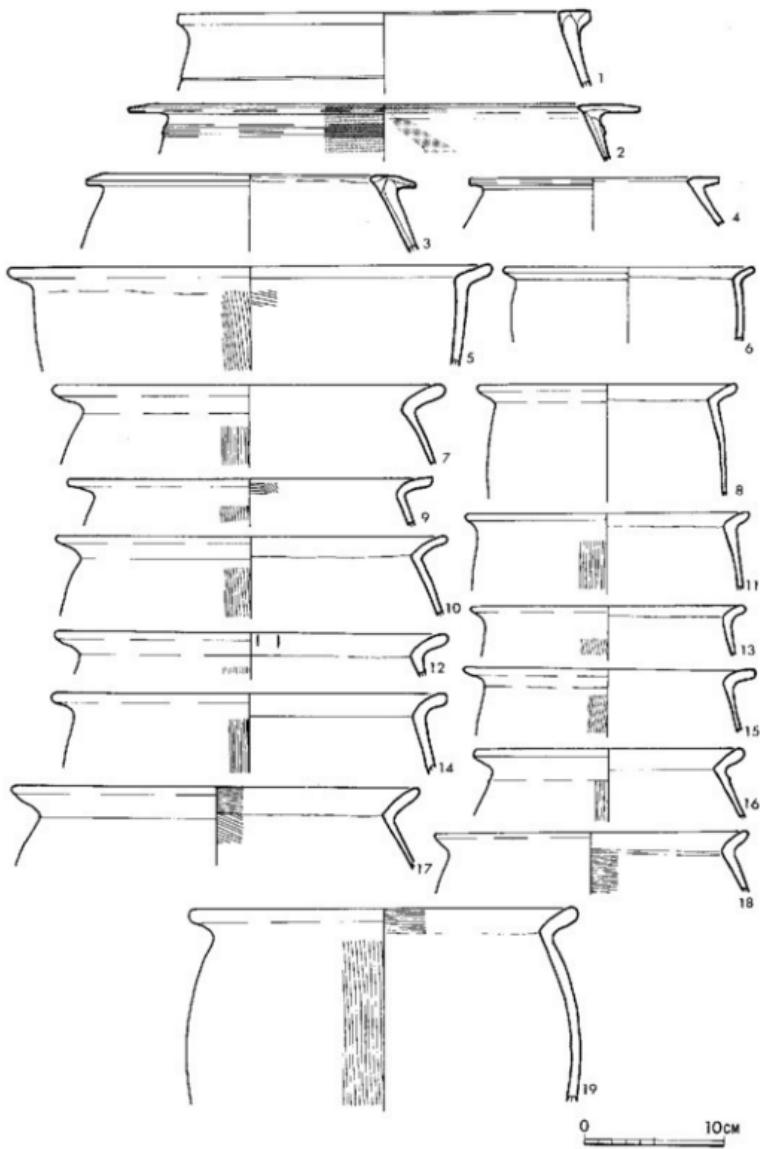


第41図 A-4区第1号井戸址および出土土器実測図(1)

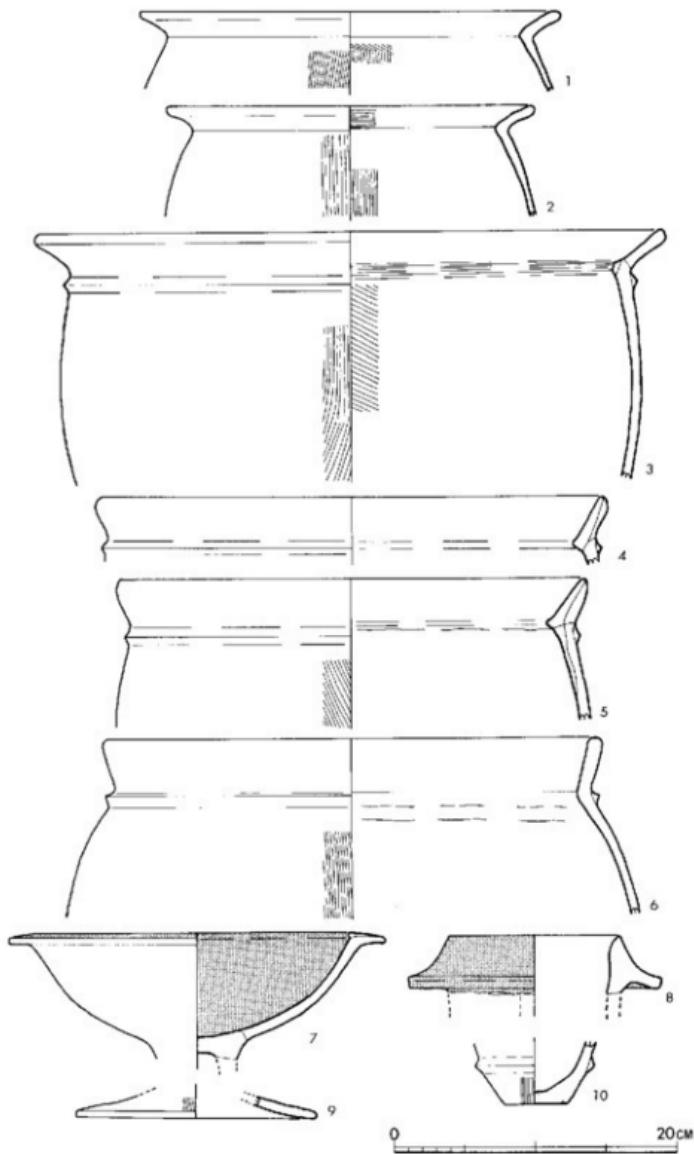


第42図 A4区第1号井H-2出土土器実測図(2)

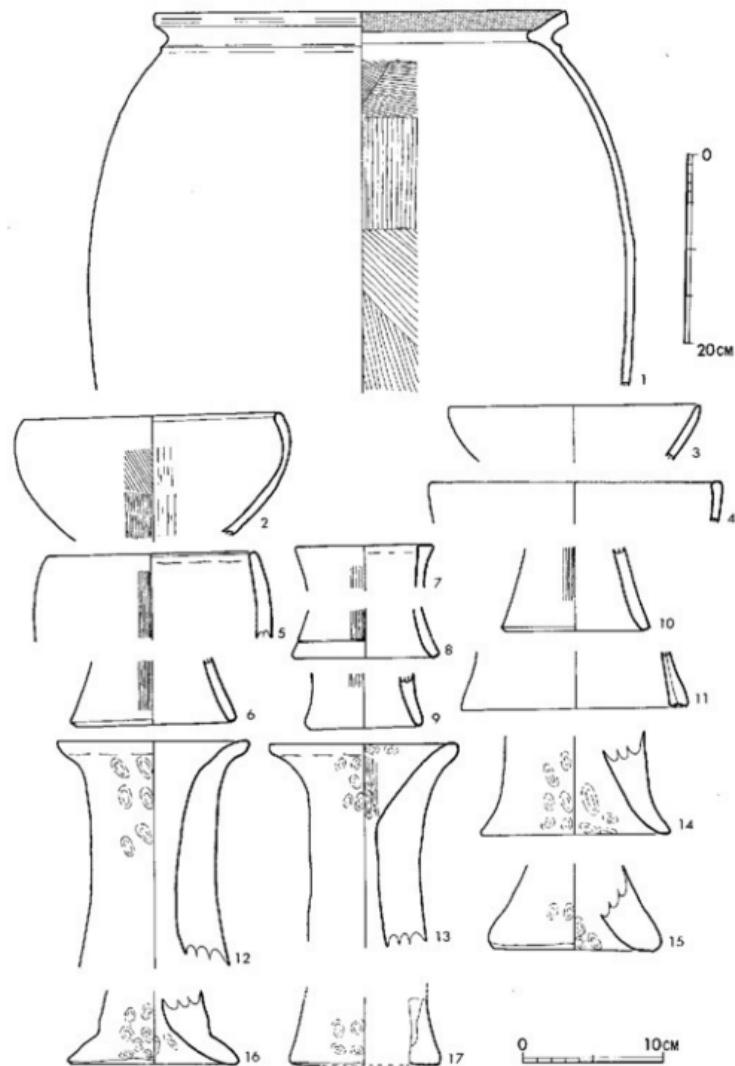
ものである。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。外面は頸部以上は横なで調整、それ以上は縱刷毛目調整の後全面丹塗り。底面には丹は塗らない。口縁内面は横なで調整。頸部内面にはしづぱり痕がみられ、その後指なで上げ調整。胎土には砂粒少量と金雲母を混入し、焼成良好。褐色を呈する。口径9cm、底径8.6cm、器高22.5cm。第41図2は標高6m51cmの所から出土したもので口縁部の一部を打ち欠いている。口縁下に一条の三角突帯が巡り、肩部には沈線状に線が巡る。外面は強い刷毛目状のもので横なで調整の後丹塗りだが全面にではない。口縁内面は指の横なで調整および押圧調整痕がみられる。胎土に石英粒砂、金雲母を含むが焼成良好。暗褐色。口径11.2cm、底径8.5cm、器高27cm。第41図3は復原されたものだが、やはり口縁の一部を欠くために打ち欠かれた可能性が強い。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。胴部以下に斜めの刷毛目調整の後丹塗り。頸部内面にしづぱり痕がみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。口径9.8cm、底径8cm、器高23cm。第41図4は口縁部のみである。口縁下に一条の低い三角突帯を巡らす。口縁部は横なで調整、頸部以外は縱刷毛目調整の後丹塗り。内面にも口唇付近に丹塗りが認められる。胎土は石英粒砂を含むが良好で、焼成も良く淡赤褐色を呈する。口径10cm。第41図5も口縁部で、口縁下に一条の「M」字状突帯を巡らす。口縁内外面とも横なで調整だが丹はみられない。胎土は石英粒砂を含み、淡褐色を呈する。第41図6は頸部破片で口縁下に低い「M」字状突帯を巡らし、外面丹塗り。第41図7も同様に頸部のみであるが、三角突帯であり、丹塗りはない。第42図1・2は標高6m51cmの所から出土した頸部以上打ち欠きの壺で、口縁部は袋状口縁を呈したものと思われる。第42図1は外面胴上半部は横なで調整、胴部以下縱刷毛目調整の後丹塗りだが、胴部上部に焼成時の黒変がある。内面は頸部に指の調整痕があり、底部近くには細い刷毛目調整。底部は若干上げ底。胎土は石英粒砂を含み、焼成良好。内面は黒褐色。第42図2は胴上半部と下半部は箆磨研、胴部最大径部は斜めや縱に暗文風に、底部付近は縱の刷毛調整。その後丹塗りだが底部付近は塗らない。内面は頸部に指の調整痕が残る。底部は上げ底。胎土に石英粒砂混、焼成は良く黄褐色を呈する。第42図3も口縁部と胴部を欠くが、同じものであろう。外面は縱あるいは斜めの刷毛目調整の後丹塗り。底部内面には指の押圧痕がある。胎土に砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。第42図4は無頸壺である。口縁部は「く」の字状となり無頸壺では新しいものである。外面は箆磨研の後丹塗りだが、胴部最大径あたりは焼成時の黒変がある。この黒変はあるいは意識的なものかもしれない。口縁部は横なで調整で、対になる小孔が2個づつ焼成前にあけられる。底部は若干上げ底。胎土は石英粒砂を含むが、表面にはでない。焼成は良くない。内面は黒褐色を呈する。口径13cm、底径7.6cm、器高12.9cm。第42図5・6は弥生時代前期の壺で、混じり込みであろう。第42図5は外反する口縁部が、肥厚して外側に段がつく。外面には箆状の工具で切口がつけられる。横なで調整で口縁内面には横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良く、黄褐色。第42図6は胴部破片である。第42図7・8は箆状口縁をもつ壺である。第42図7は横なで調整の後外面丹塗り。口縁下には6本以上の単位で縱に暗文を箆で描く。胎土、焼成とも良好。第42図8は口縁上面が凹む。横なで調整。第42図9は内外面ともに丹塗り磨研の壺で、朝顔状の口縁をもつ。胎土に若干の砂を含むが、焼成とともに良好。第42図10は口縁部に断面三角



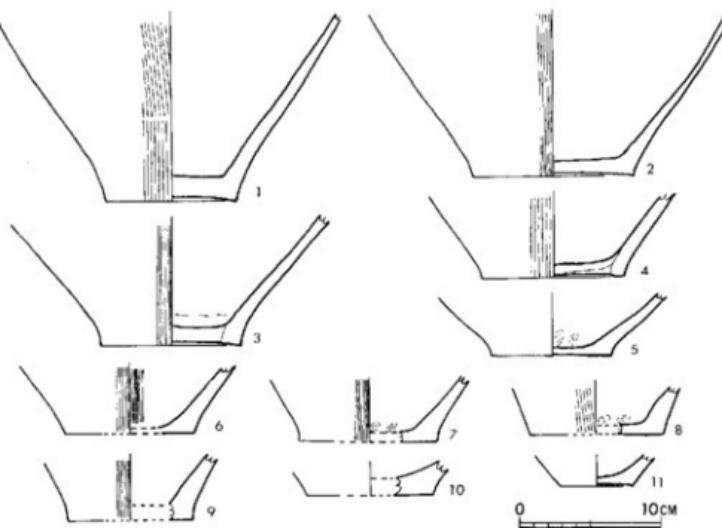
第43図 A 4区第1号井戸址出土土器実測図(3)



第44图 A4区第1号井口址出土土器实测图(4)



第45圖 A4區第1號井戶址出土土器実測図(5)



第46図 A4区第1号井戸址出土土器実測図(6)

形の張り出しをもつ型である。外面は横、斜め、縦の、内面は横、斜めの刷毛目調整。中期初頭のものであろう。第42図11・12はいわゆる瓢形土器の退化したものであろう。第42図11は口縁部と胴下半部を欠く。頭部下に一条の三角突帯が、胴上半部にはいわゆる錫状の突帯、その下に三角突帯が一条巡る。外面は横なで調整の後丹塗り。内面も肩部までは同様に丹塗り。その下には指の押圧調整痕が残る。胎土に石英砂を含み、焼成は良好。赤褐色。第42図12は胴上半部のみである。外面は縦刷毛目調整で突帯の上下は横なで調整。丹は塗られておらず、内面に炭化物の付着がみられる。第43図1は口縁下に一条の弦線が巡り、口縁周辺は横なで調整。中期初頭のものであろう。第43図2～4は逆「L」字状かそれに近い口縁をもつ。第43図2は口縁下に一条の「M」字状口縁をもつ。外面は横なで調整でその後丹塗り。内面も上部は丹塗りでそれ以下にも斜めになたように丹がつけられる部分がある。胎土・焼成とも良好で淡褐色を呈する。第43図3・4とも良好で淡赤褐色を呈する。第43図3・4とともに胴部のふくらみが強い。ともに口縁部は横なで調整。第43図5～19、第44図1～3は「く」の字状に折れる口縁部をもつ。外面刷毛目調整のもの（第43図5・7・9～16・19・第44図1～3）、内面にも刷毛目調整のあるもの（第43図5・9・17～19・第44図1～3）があるがいずれも口縁部横なで調整。第43図12は口縁内面に竪で二条の切目を入れている。同様の切目が諸岡遺跡から出土しており、合口甕棺の埋置の際の符号とされている（横山1976）。第43図16は口縁部に低い三角突帯状の突起が巡る。第44図3は口縁部が若干跳ね上がり状となり、口縁下に一条の三角突帯が巡る。第44図4～6はやはり口縁部が「く」の字状に折れるが、前述の土器群に比べて立ち上

がりが強い。口縁下には一条の三角突帯が巡る。第45図1は底の近くに敷かれていた壺底である。口縁部は「く」の字状となり、口縁下に一条の三角突帯が巡る。胴部内面は横、斜め、縱の刷毛目調整。口縁内部には丹塗りの痕跡がある。第44図7は鈎状口縁をもつ高环の环部である。口縁上面と内面は丹塗りだが、外面は器面のあれが激しいために不明。第44図8は大型器台の口縁部である。外面は丹塗り磨研。特徴の口縁下の鈎状の突帯下には透孔があるが、破片のため何個あるか不明。胎土は若干の砂を含むが良好。焼成もよく、淡褐色を呈する。第44図9は高环の脚部であろう。外面縱刷毛目調整。第44図10は鉢である。口縁部を欠くが、胴部に一条の三角突帯が巡る。突帯下部は縱刷毛目調整。第45図2～5も鉢である。第45図2～5は外面刷毛目調整。口縁部は横なで調整。第45図3・4は器面があれいるため調整は不明。第45図6～17は器台である。第45図6～10は縱刷毛目調整。第45図12～17は器盤の厚い器台で指の調整痕が多い。第45図13は内面に刷毛目調整がみられる。第45図8は脚部上部に沈線が一条巡る。第46図は底部である。第46図5・10・11は壺で他は壺である。壺はすべて外面に縱刷毛目調整。第46図6には内面にも縱刷毛目調整。第46図5・9・10は内面底部近くに指の押圧調整痕がつく。第46図1～4・11は若干上げ底を呈する。第51図11はこの井戸址唯一の石器である。半折しているが周辺部を加工しており、石庵丁の未成品と考えられる。褐色安山岩質凝灰岩製。

また埋土中よりイノシシの歯が出土した。左上顎M3。

以上の如く、この井戸址からは多数の土器が出土した。その大半は弥生時代中期後葉のもので、第42図5・6のような前期のもの、第42図10、第43図1のような中期初頭のものは混入であり、内部に打ち欠いて投入された丹塗りの袋状口縁壺、あるいは敷き詰められていた壺底などと、第44図4～6のような後期初頭と思われる土器を出すこの井戸の使用期間は中期後葉～後期初頭と推定される。そしてまたこのことはその湧水点である青灰色砂層は掘り込んでいることも含めて今までに調査された板付遺跡の弥生時代井戸址と全く同様の性質形態をもつといえる（森・岡崎1961・下條1970・山口1976）。そして、福岡平野での弥生時代の井戸址が現在のところ板付遺跡と有田遺跡でしか発見されてないが、このすべてが弥生時代後葉～後期初頭の時期であることは一つの問題点として指摘できよう。

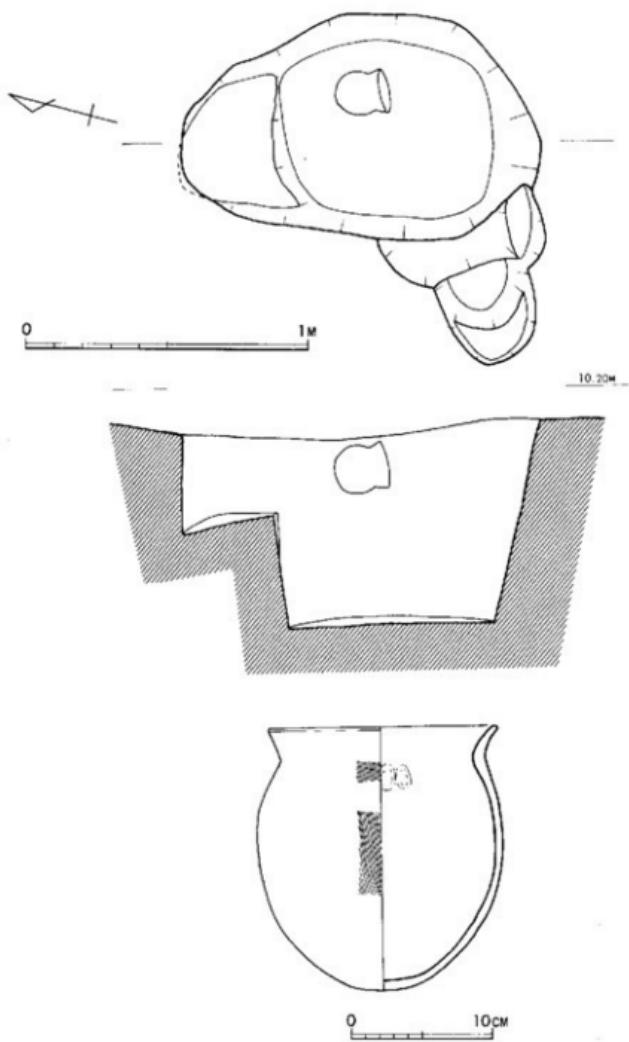
(済)

### III. 古墳時代の遺構

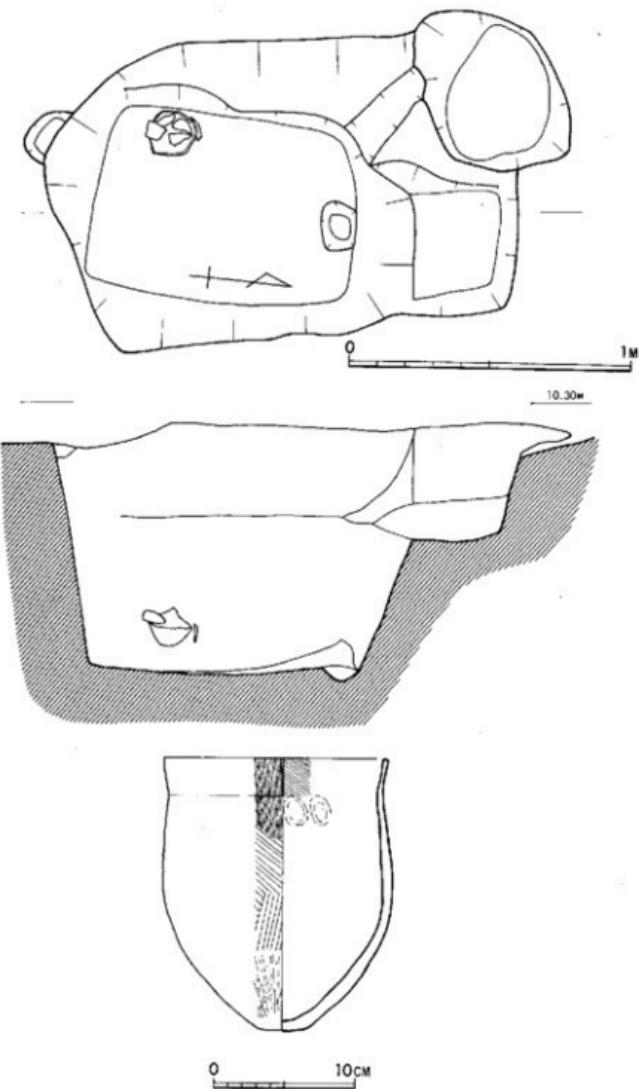
#### 1. 第1号土塙（第47図）

本調査区の中央北寄りに位置する。第68号ピットと切り合っているが、平面は、南北に長軸をもつ橢円形である。現状で、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.7mを測り、底は平坦となるが、北側に段をつくる。土塙墓なのか貯藏穴か明確でない。なお伴出遺物として、土師器壺の完形品1個が上面20cm下から出土し、土師器片多数と弥生式上器片を出土した。本土塙は、古墳時代のものと考えられる。

伴出の土師器壺は、口縁部で外反し、頸部でやや肥厚し、胴部は球形をなす。胎土に1～2mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。外面頸部下と胴部の一部に細い斜刷毛目調整がみられる。内面頸部には指圧痕がめぐっている。また口縁部は、内外面とも指の横なでがみられる。



第47図 A.4区第1号土坑および出土遺物実測図



第48図 A4区第2号土塁および出土遺物実測図

色調は、内外面とも黄褐色を呈するが、外面では、胴部の相対する面に焼成時の黒変が残っている。なお口径16.4cm、高さ18.6cmを測る。

## 2. 第2号土壙（第48図）

本調査区の東北部に位置する。他の二つのピットと切り合っているが、平面は南北に長い隅丸長方形である。現状で長さ約1.5m、幅1.1m、深さ0.9mを測り、底は平坦である。形状からして土塙墓とも考えられるが、明確にしえなかった。なお、伴出遺物として土師器甕の完形品一個が底面上約10cmから出土した。土師器片多数と弥生式土器片を出土したが、本土塙は古墳時代のものと考えられる。

伴出の土師器甕は、口縁部でやや外反するが、全体的に卵形を呈する。胎上に砂粒を含み。焼成は良好である。外面口縁部から頸部まで細い継刷毛目、胴部は粗い斜刷毛目調整。胴下部から底部にかけ箠削りがみられる。内面は口縁部に細い斜刷毛目調整、頸部には指圧痕がみられる。外面は赤褐色、一部に黒変がみられ、内面には丹が付着している。なお、口径16cm、高さ29.4cmである。

（吉田 恒）

## 3. 第1号小豎穴（第49図）

調査区の若干西側寄りに位置する。長径80cm、短径60cmの不整椭円形を呈し、深さは約30cmのピット内に円錐1個と土師器の破片が出土した。この土師器の小ピットの下に弥生時代のピット2個が存在する。

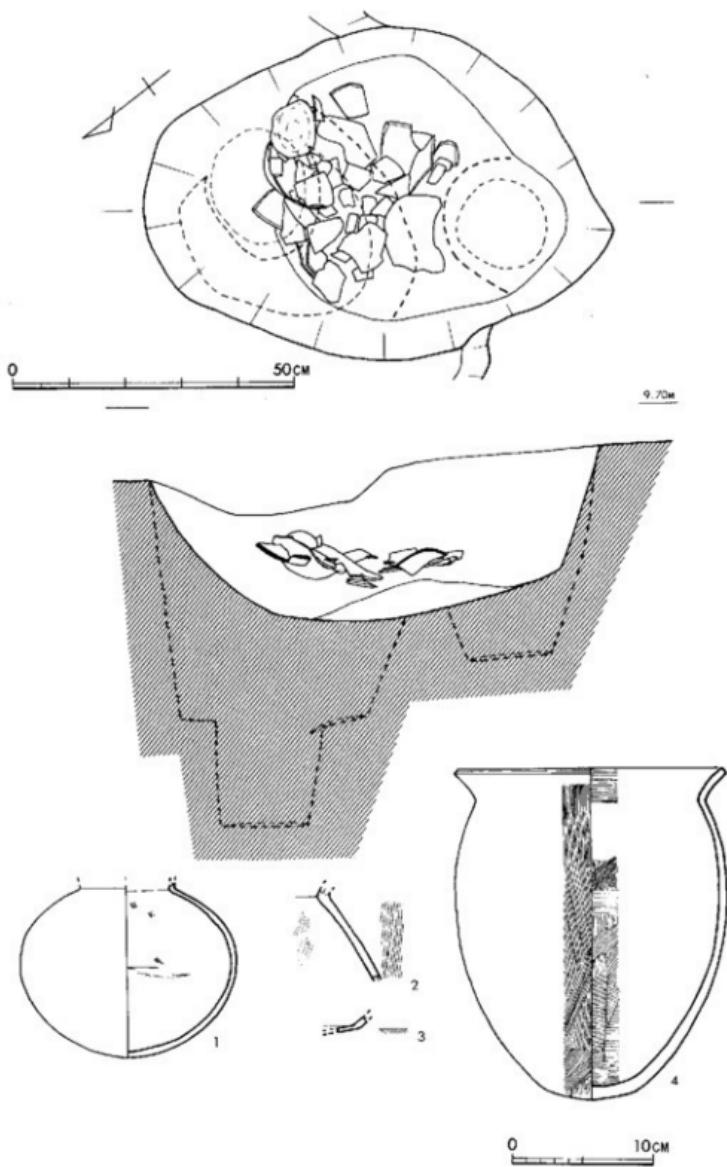
### 出土遺物（第49図）

1は壺である。口縁部を欠くがほぼ球形に近い胴をもつ。内面はところどころに短く細い刷毛目調整。黒褐色を呈し、焼成良好。胎土には石英粒砂を混入する。2は甕の頸部から胴部にかけての破片である。内外面とも刷毛目調整。3は高杯の杯の屈折部の破片である。内外面とも段は明瞭につく。外面の段より下は斜めの刷毛目調整。4は「く」の字状に外反する口縁をもつ甕で、底部は丸底を呈する。内、外面とも各方向の刷毛目調整が行われる。口唇部は若干凹む。5世紀代のものであろう。

## IV. 歴史時代の遺構

### 第2号井戸址（第50図・第52図6）

本調査区西端に位置する。一辺2~3mの不整な豎穴の北東隅にあるが、この豎穴との関連は不明。標高9.18mにある。井戸口は径1m程のハート形に近い不整な円形を呈する。標高8.12mの所までは、わずかにひらきながら下がるが、その点から急速にひらく。この点が鳥栖ローム層と八女粘土層の境界点であることは前述の第1号井戸址と同様である。標高8.06mで最大径3m20cmまでひろがる。そこから急にすぼまり、標高7m80cmからは垂直に近くわずかにすぼまりながら下がる。標高6m40cmまで下げたが、標高7m50cmから始まる青灰色砂層が非常に多く、危険となつたため調査を中止した。出土遺物は弥生式土器、土師器、須恵器、磁器、石器などが出土した。

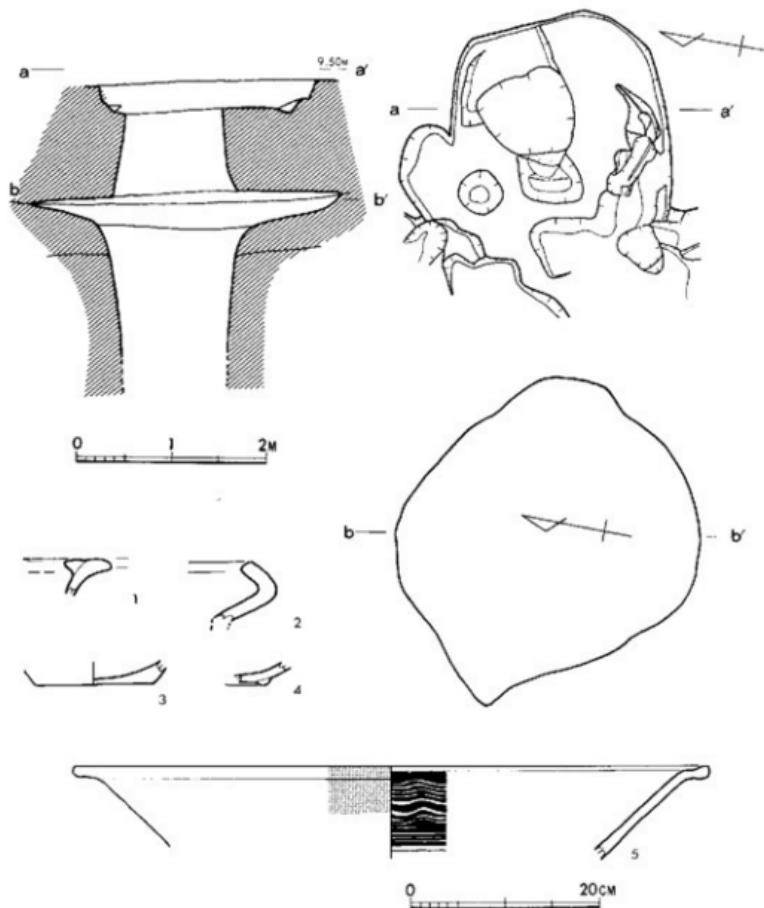


第49図 A.4区第1号小窓穴および出土遺物実測図

出土遺物（第50図・第52図6）

1・2は弥生式土器で、1は鉢状口縁をもつ壺、2は袋状口縁の壺とともに中期のものである。3は土師器、4は高台付の須恵器である。5は磁器で内面は茶色と白色の釉で波形と直線を描く。外面は胴部中央から下には釉がかからないが、それから上は茶色の釉がかかる。第52図6は石剣の破片である。暗灰色凝灰質中粒砂岩製。

以上のことから第2号井戸址は中世以降のものであろう。



第50図 A4区第2号井戸址および出土遺物実測図

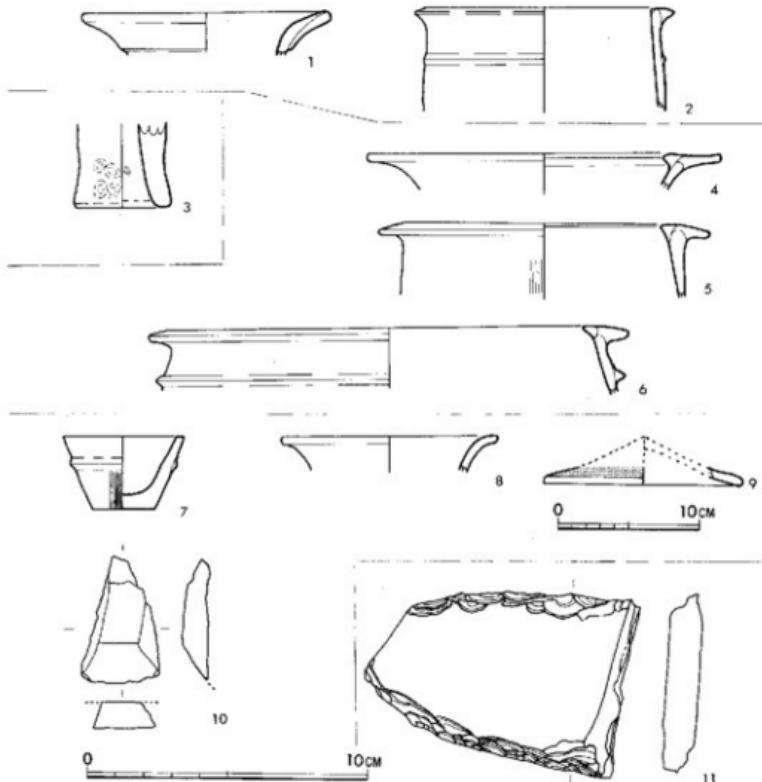
## V. その他の遺構、遺物

### 1. 第2号井戸址上の竪穴出土の遺物（第51図1・2・第52図8）

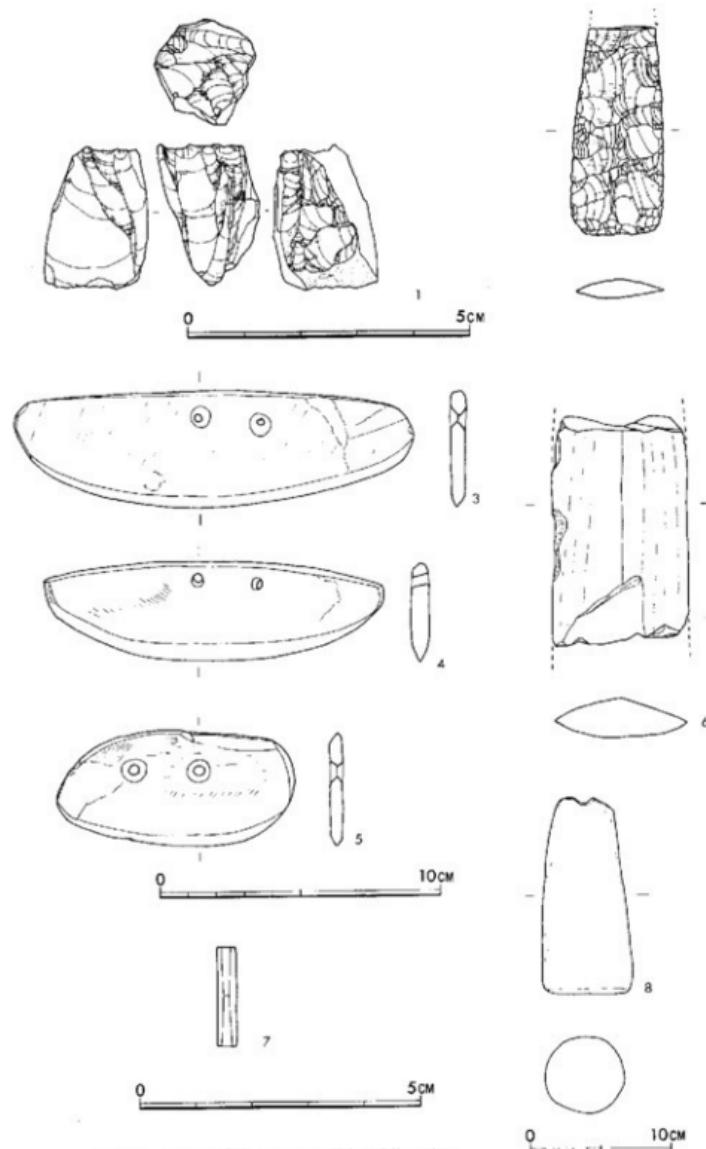
第51図1は外反する口縁部が肥厚し外側に段がつけられる壺の口縁である。板付1式。第51図2は断面三角形の突帯状の口縁をもち、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。中期初頭のものであろう。第52図8は土製品である。高さ14cm、最大径6.4cm、上部径4cmで上面には凹みがつく。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。時期不明。用途としては支脚の可能性があるが、1個のみの出土であるため何とも言えない。

### 2. 第1号土塙埋土中の土器（第51図3）

第1号土塙は古墳時代の土塙であるが、埋土中より弥生式土器が出土している。第51図3は器壁の厚い器台の裾部で外面は指の指圧調整が激しい。内面には一部刷毛目調整がみられる。後期のものであろう。



第51図 A.4区各遺構出土遺物実測図



第52図 A.4区各造構および表土層出土遺物実測図

### 3 第2号土塙埋土中の土器

第2号土塙も古墳時代の土塙であるが埋土中より多量の弥生式土器が検出された。第51図4は鉢状口縁をもつ壺で口縁上面が凹む。器面があれでいるため調整は不明。第51図5・6は逆「L」字状口縁をもつ甕で口縁部横なで調整。5は外面縦刷毛目調整。6は口縁下に一条の三角突帯が巡る。これらの土器は中期中葉のものであろう。

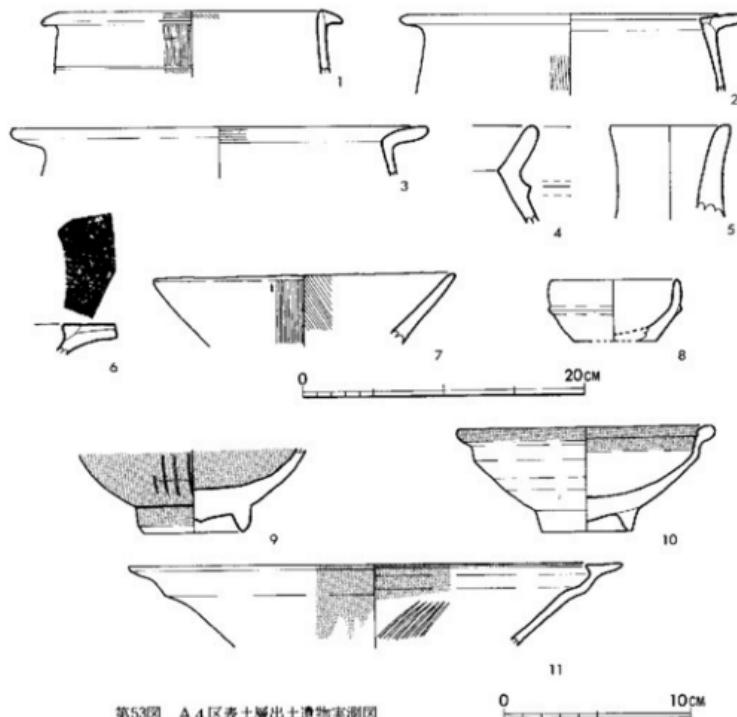
### 4 第107号小竪穴出土の石器（第52図2）

先端を欠くが柳葉形の石鏃で、表裏面ともに入念な調整を行い、断面は菱形を呈する。姫島産黒曜石製。重量2.9g +α-。

### 5 第103号小竪穴出土の遺物（第51図7～10）

調査区西側に位置する。第1号住居址を切っており、中から完形の小型鉢や石器が出土した。

7は突帯をもつ小型鉢である。突帯部以下外面は縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。口径8.8cm、底径4.4cm、器高5.2cm、8は蓋の口縁部で単純に朝顔状に外反する。横なで調整。9は蓋の破片であろう。外面丹塗り。破片中に穿孔はみられない。横なで調整。10は片刃石斧の破片であろう。黒色石英質細粒砂岩製。



第51図 A4区表土層出土遺物実測図

7のような小型の鉢は中期前葉から出土するといわれている（杉原1964）が、板付遺跡でJ・K-25トレーナー・J-26トレーナー（後藤・沢1976）、G-5a地点（山口1976）などの例から中期後葉のものと考えられ、この小ビットもその時期のものであろう。

## 6 A4区表土層の遺物（第52図1・3～5・第53図）

### 石器（第52図1・3～5）

1は円錐形細石核である。良質の黒磁石角礫を原材とする。側面は約2～3cmの細石刃が12本削出され、最終削出は正面で行われている。打面には打面調整がみられる。調査区西端の第1号住居址の西側擾乱層出土。3～5は完形の石庵丁で、いずれも表土層の出土である。3は外弯刃半月形を呈し、研磨はいきとぞいているが、一部に研磨痕・敲打痕が残る。穿孔は両面から。今まで立岩製石庵丁あるいは輝緑凝灰岩と呼ばれていた石で、赤紫色凝灰質中粒砂岩製。重量51g。4も外弯刃半月形石庵丁で、良く研磨されているが、一部研磨痕が残る。穿孔は金属状のものでなされたらしく、穴の幅は同一である。褐色安山岩質凝灰岩製。重量48.5g。5は小型のものであるが本来は外弯刃半月形の石庵丁であったろう。折損したものを再利用したものであろう。良く研磨されているが、一部に研磨痕・敲打痕が残る。石質は同じ。重量26g。

### 石製品（第52図7）

管玉1個の出土である。調査区東南方表土層より出土した。長さ17.3mm、幅3.6mm。穿孔は両側から行う。孔の径は1.5mm。重さ0.3g。

### 土器（第53図）

#### 弥生式土器（第53図1～8）

1は甕で断面三角形の貼り付け口縁をもち、口縁下に一条の沈線が巡る。口縁上面は横、内面は斜め、胴部は横刷毛目調整。中期初頭。2は逆「L」字状口縁をもつ甕で口縁内端が若干下がる。口縁部横なで調整。外面胴部は縱刷毛目調整。中期中葉。3は口縁部が「く」の字状に折れる口縁をもつ、口縁内部は横刷毛目調整。中期後葉。4は「く」の字状に折れる口縁下には一条の三角突帯が巡る。後期初頭。5は器壁の厚い器台で中期後葉～後期のものであろう。6は鉢状口縁の甕で口縁上面に範状工具で7本の細い沈線を描く。中期後葉。7は単純にひらく鉢であろう。8は胴部に一条の三角突帯をもつ小型の鉢である。中期後葉のものか。

### 青磁器（第53図9）

高台付の碗である。表裏面とも釉がかかるが、高台の下部と底面にはかかるない。蓮弁文を有するが、削り出しによるものである。龍泉窯と思われる。

### 磁器（第53図10・11）

10は高台をもつ碗で、口縁部がわずかに外反する。釉は鉄分を含み、黒褐色を呈する。内面には炭化物の付着がみられる。11は内面に甕で8本以上の沈線を斜めに施す。摺鉢であろう。内・外面上部にかけられた釉は鉄分を含む。いずれも中世以降のものであろう。

## VIまとめ

1. A4区の遺物は旧石器時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代のものがあるが、旧石器時代のものは搅乱層よりの出土であり、その包含層も消失していると考えられる。

2. 住居址は完掘できず、また西半は削平されていたが、円形を呈する弥生時代中期初頭のものである。環溝外のすぐ近くに住居址を営んでいることは、環溝内に住居址があったといわれる前期とは異なり、この時代に環溝はその大部分が埋没していたのであろう（森・岡崎1961）ということの傍証となろう。

3. 弥生時代の井戸址は板付遺跡ではかって9個の発見があり（森・岡崎1961、下條1970、山口1976）、今回を加えて10個目である。また福岡平野では井戸址の検出はこの他に有田遺跡（井沢1977）の2個がある。これらは調査されたものは板付遺跡の6個を含めていずれも中期後葉～後期初頭のものである。また、有田遺跡の2個も含めて8個中の7個から丹塗りの袋状口縁壺の出土がみられ、唯一の例外は板付G-5a 地点第10号竪穴とした井戸址のみである（山口1976）。ただしこの井戸址は底部近くに甕棺破片を敷きつめているということが今回の第1号井戸址に類似する。また、この中期後葉の時期には祭器とみられる袋状口縁壺、有蓋無頭壺、大型器台などの丹塗り土器の多量な出現がみられる。板付遺跡J・K-25トレンチの河川内の祭祀遺構と推定されるものも中期後葉の時期であり（後藤・沢1976）、井戸の出現とともに一つの問題点となるであろう。

4. この西側斜面には弥生前期の袋状整穴は存在しない。

(沢)

### 参考文献

- 井沢洋一編 1977 有田周辺遺跡調査概報（1）福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集  
後藤直・沢東臣編 1976 板付市官住宅建設工事による発掘調査報告書 1971～1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集  
下條信行編 1970 福岡市板付遺跡調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集  
杉原莊介 1964 北九州地方 弥生式土器集成本編1解説  
森貞次郎・岡崎敬 1961 福岡縣板付遺跡 日本農耕文化の生成  
山口謹治編 1976 板付周辺遺跡調査報告書（3）福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集  
横山邦雄編 1974 板付周辺遺跡調査報告書（1）福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集

### 第Ⅲ章 県道調査のまとめ

從來環溝遺構に限定して見られがちであった板付集落遺跡は市教育委員会によって行なわれた1971～74年の沖積地調査（後藤・沢1976）や急増する宅地造成・建設に伴う周辺地域の緊急調査（後藤・横山1975・山口1976）等の成果によって段々とその姿が明らかになりつつある。

今回の県道建設に伴う調査の成果もまた同様にこれまで不明であった環溝遺構の南側地点の不足を補うものであった。検出した遺構・遺物は弥生時代のものが殆どであるが、A2区では先土器時代に属すると考えられるナイフ形石器の発見があり、この時期の居住が知られる。

弥生時代では前期初めから中期にかけての袋状堅穴（貯蔵穴）15基が台地の中央から東半にかけて分布していた。また台地の端部にある西側斜面（A4区）では弥生前期の生活址が知られず、寧ろ中期初頭～後半にかけての遺構・遺物が中心に検出された。特に中期初頭の時期の住居址の発見は大きな成果であった。

古墳時代以降～近世の遺構は比較的保存の良かった西側斜面（A4区）や東側のA1区等で若干が調査された。

以上、道路の幅員に限られた調査範囲であったが、今後板付集落遺跡の在り方を解明する上の意義は大きいものがある。

後藤直・沢皇臣（編）（1976） 板付一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書一 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集

後藤直・横山邦雄（編）（1975） 板付周辺遺跡発掘調査報告書第2集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集

山口讓治（編）（1976） 板付周辺遺跡調査報告書第3集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集

## 付編 板付遺跡出土の異形土製品（第54・第55図）

ここに紹介する土器は、1974年12月、板付台地西側を南北に走る道路から工事中に出土したもので、この中異形土製品は、すでに紹介している。

土製品はたまねぎ形をして、器壁には2つの穿孔を焼成前に穿っている。器壁は厚く、底部には一次焼成時の黒斑を認める。

1~7は壺である。1は朝顔状口縁で、口縁端が少し凹む。内外面は丹塗り。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。淡赤褐色を帯びる。2~6は袋状口縁である。2は口縁直下に低い断面「M」字形の突帯を一条巡らしている。器面は横なで調整、外面は丹塗りである。6は器面が荒れている。器壁は2より厚い。石英砂粒を含み、焼成は良好である。黄褐色を帯びる。3・5は鐵先状口縁壺と思われる。3は高环の可能性があり、口縁部内側には、断面三角形に張り出しをもち、口縁上面は少し凹んでいる。器面は横なで調整。石英砂粒を含み、焼成は良好。淡赤褐色を帯びる。5は平坦口縁であり、器面は荒れている。石英砂を含み、焼成良好である。黄褐色を帯びる。4は無頸壺である。器壁は厚く、口縁頂部から下るところに焼成前の小孔を穿っている。器面は横なで調整。砂粒を含み、焼成は良好。淡暗褐色を帯びる。7は胸部片である。断面三角形の突帯を一条巡らし、突帯付近を横なで調整。石英砂粒を含み、焼成良好。暗褐色を帯びる。1~7は中期、3・5は中期中葉、2・4・6は中期後葉であろう。

8~16は甕である。8・10は平坦口縁をもち、8は器面が荒れている。10は器面を横なで調整、8・10とも石英砂粒を含み、焼成良好。赤褐色を帯びる。9・11・12・13は逆「L」字状口縁部の上面が内傾するものである、9・11は器面が荒れている。12・13は器面を横なで調整。12の外面には縱方向の粗い刷毛目調整。これらは石英砂粒を含み、焼成良好。黄褐色～赤褐色を帯びる。14~16は「く」の字口縁をもつもので、14は内側に弱い稜をもち、外面を縱刷毛目調整。内面には横刷毛目調整を施している。口縁部は横なで調整。15は内側に弱い張り出しをもち、明確な棱を認める。口縁上面は少し凹み、上部は少しあはね上がり気味である。口縁直下には、断面三角形の突帯を一条巡らしている。器面は横なで調整。16は器面が荒れている。くびれ部には断面三角形の突帯を巡らしている。14~16とも石英砂粒を含み、焼成良好。暗褐色～赤褐色を帯びる。8・11は中期中葉。9・11~13は中期後葉。14~16は後葉初頭であろう。17は鉢である。外面を縱刷毛目調整。口縁部は横なで調整。石英砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。18は器台である。外面は縱刷毛目調整。石英砂粒を含み、焼成良好。灰白色を帯びる。17・18とも中期であろう。

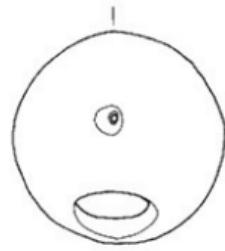
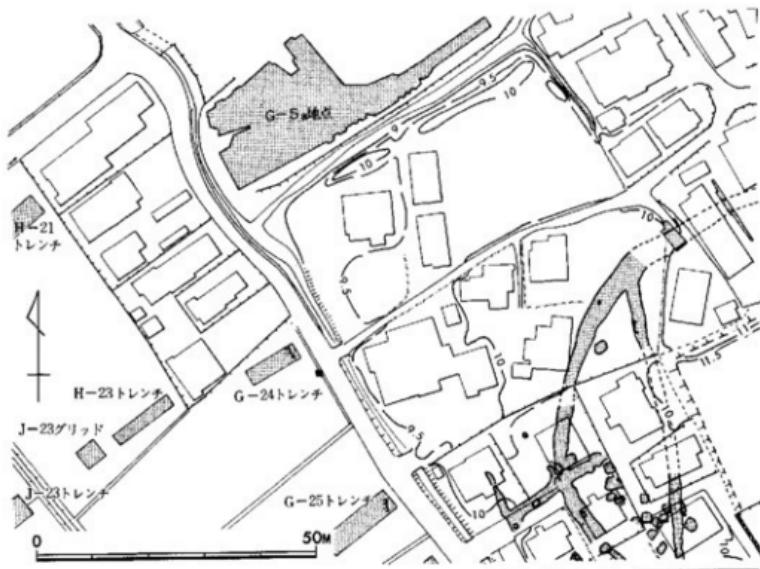
19~21は甕。22・23は壺であろう。19は外面を縱刷毛目調整。20は外面に黒斑を認める。23は底部に黒斑を認める。19~23とも石英砂粒を含み、焼成良好。暗褐色～赤褐色を帯びる。中期であろう。

以上に述べた土器は、中期後葉～後期初頭にはほとんど含まれるものである。出土地点は、C-24トレンチ〔後藤・沢1976〕のすぐ近くであり、両地点は時期を同じくするものであろう。

参考文献 後藤宣・沢皇臣 1976 板付市営住宅建設にともなう発掘調査報告書

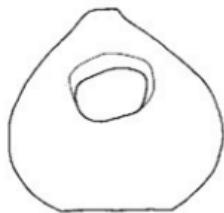
(原 俊一)

1971~1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 原俊一 1976 板付遺跡出土の異形土製品  
九州考古学51

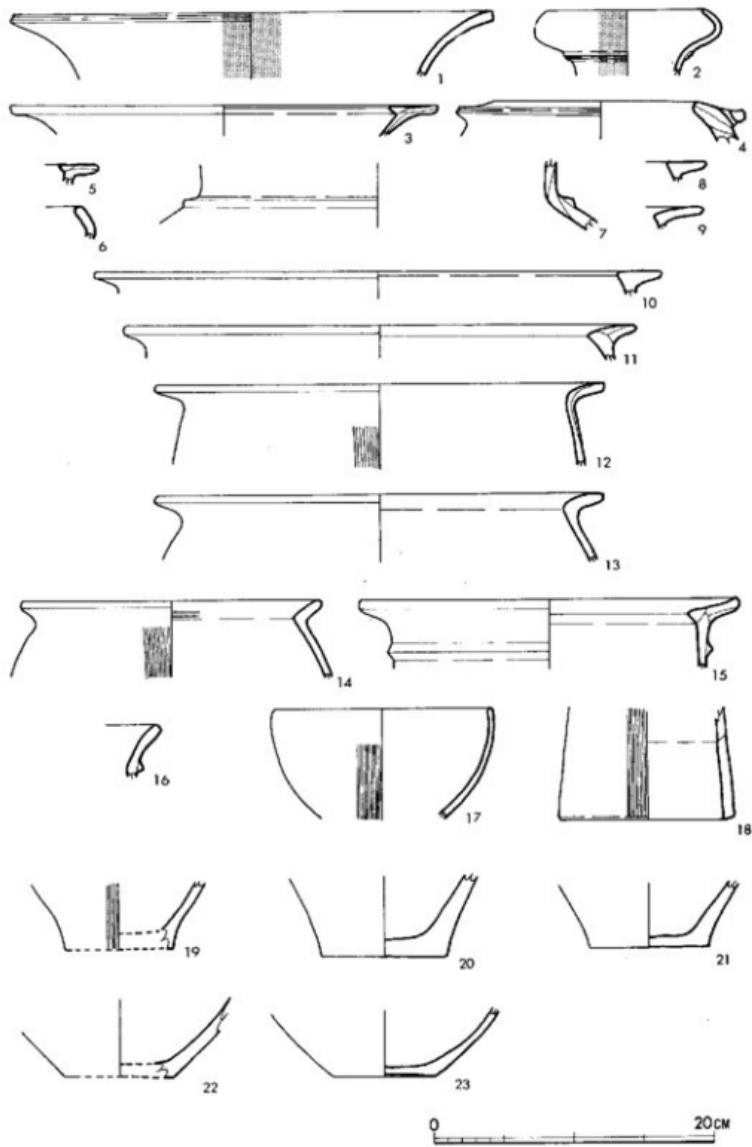


■ 出土地点  
■ 発掘調査地区および遺構

0 5CM



第54図 出土地点および黄土製品実測図



第55图 出土上器实测图

## 調査主体

### 福岡市教育委員会

戸田成一、矢野正喜、青木崇、志鶴幸弘、三島格、後藤直、清水義彦、橋崎幸利、草場九男、安田正義、沢賀臣、横山邦維、山口謙治

編集 福岡市教育委員会文化課板付道路調査事務所  
福岡市博多区板付2丁目11-1  
発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
印刷 福博綜合印刷株式会社



板付遺跡全景（航空写真・南から）



板付遺跡全景（航空写真・東から）



A-2区発掘作業風景（東から）



A-2発掘作業風景（東から）



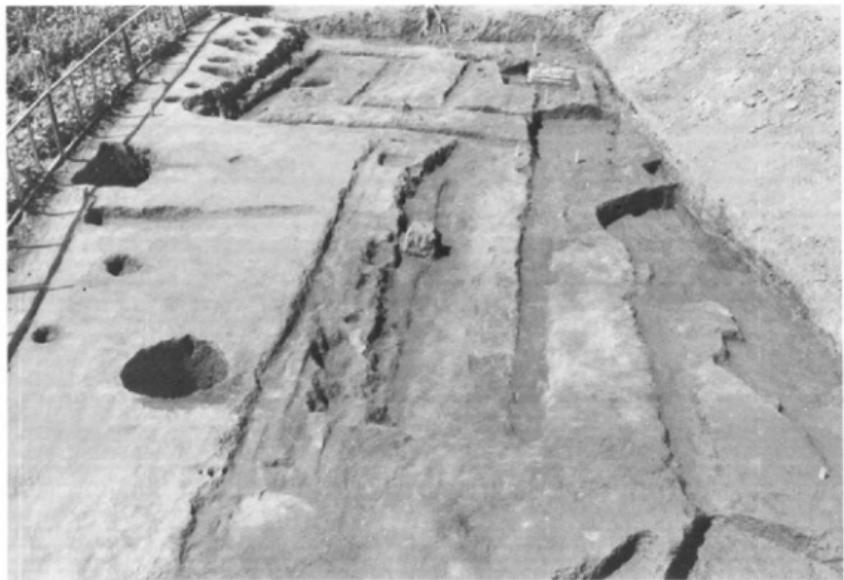
A・1区遺構出土状態（北から）



A-1区遺構出土状態（東から）



A-1区遺構出土状態（東から）



A-1区遺構出土状態（北東から）



A-2区遺構出土状態（西から）



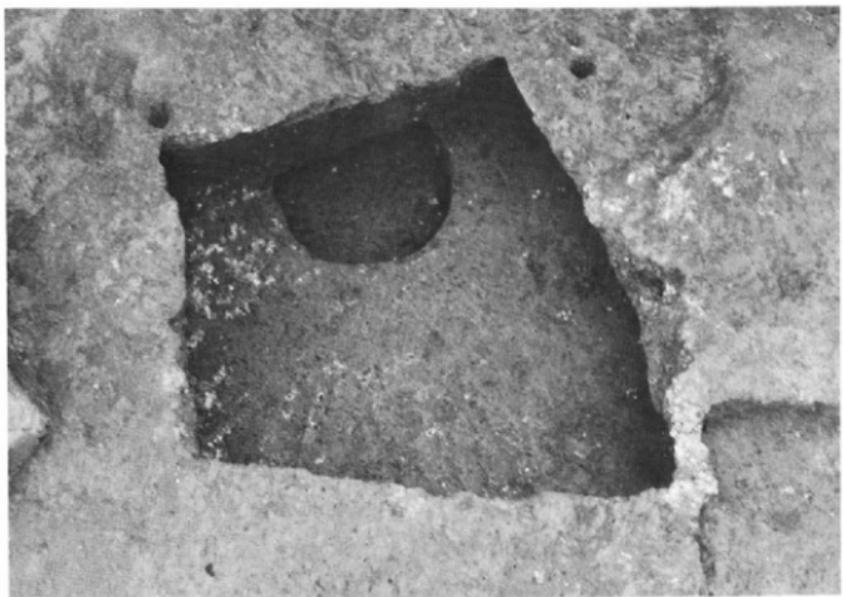
A-3区 調査風景（西から）



B-1区 調査風景（西から）



B-2：田端遺跡推定地（1977年度調査予定）



A-1区第1号袋状竖穴



A-1区第2号袋状竖穴



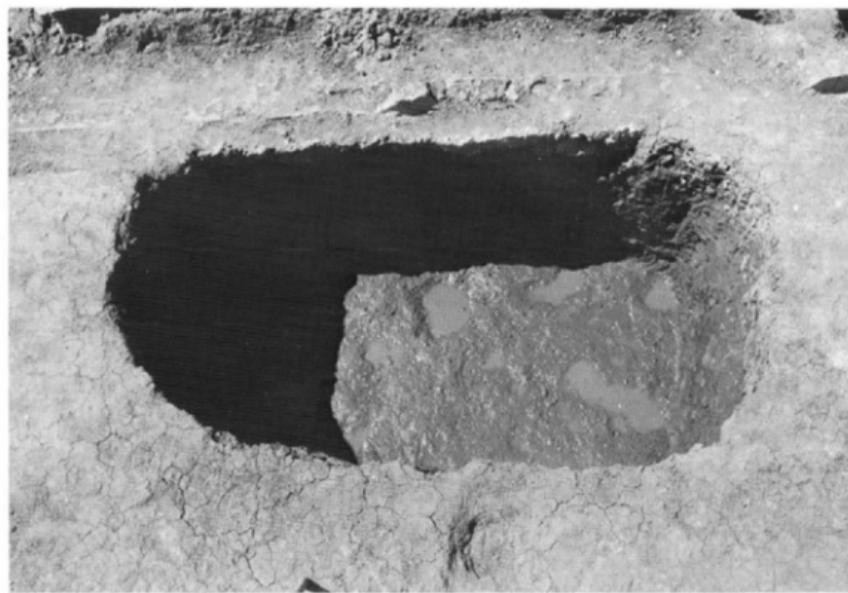
A-1区第3号袋状竖穴



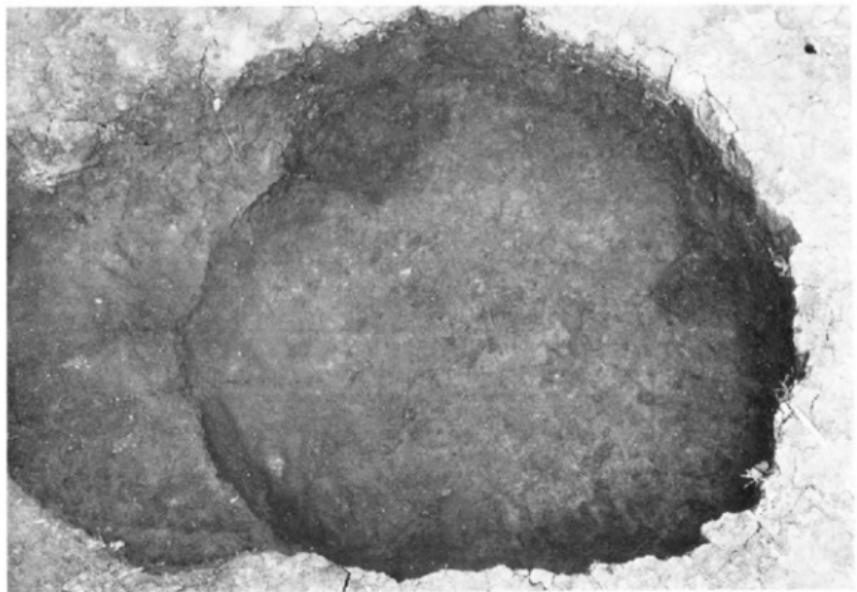
A-1区第4号袋状竖穴



A-1区第3号袋状竖穴出土石器、第4号袋状竖穴出土罐



A-2区第5号袋状竖穴



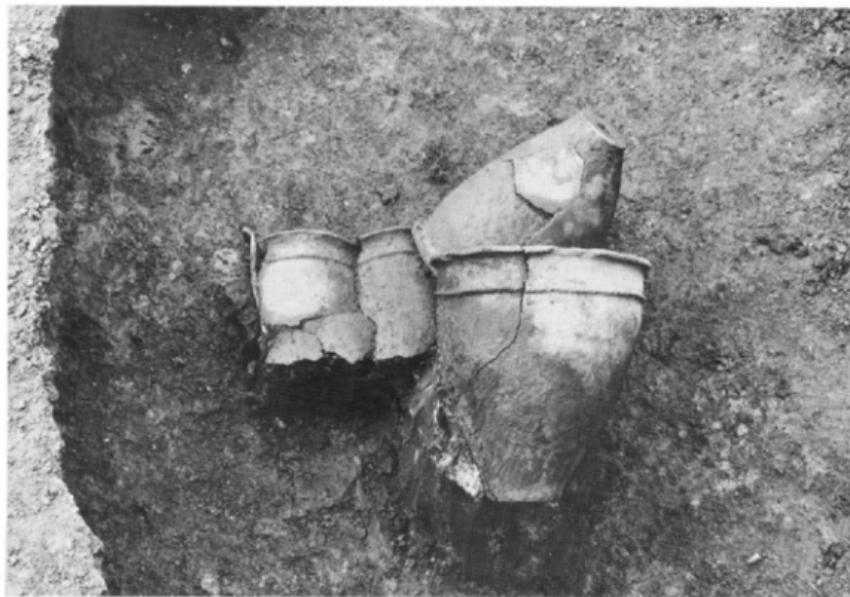
A-2区第6号袋状窓穴（東から）



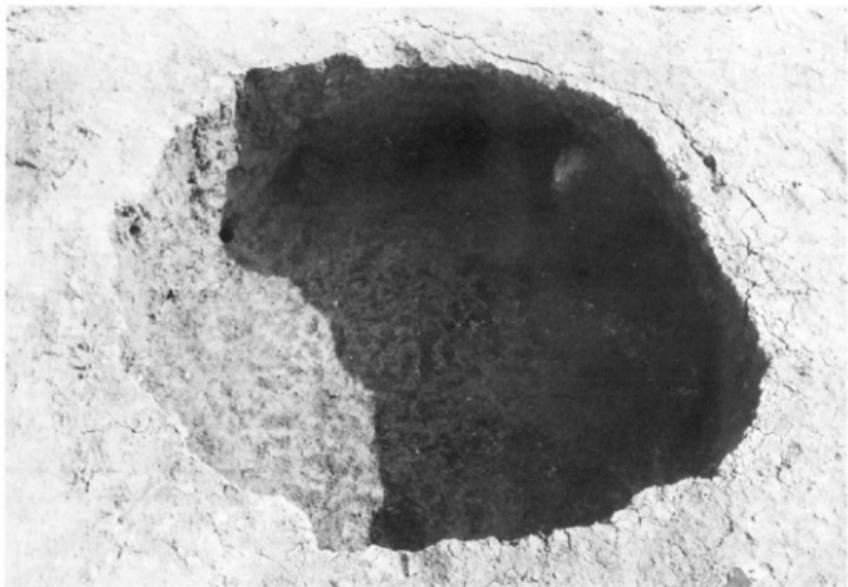
A-2区第8・10号袋状窓穴



A—2区第8号袋状竖穴土器出土狀態



A—2区第8号袋状竖穴土器出土狀態



A-2区第8号袋状竖穴（北から）



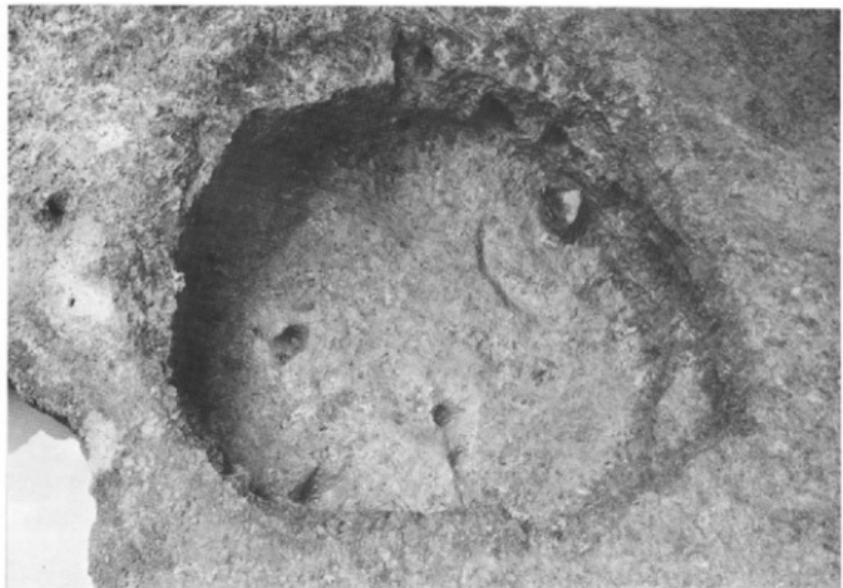
A-2区第8号袋状竖穴出土甕



A—2区第8号袋状竖穴出土甌



A—2区第8号袋状竖穴出土遗物



A-2区第9号袋状竖穴



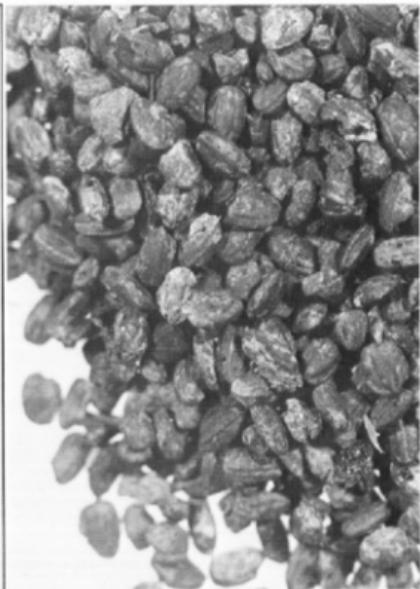
A-2区第10号袋状竖穴



A—3区第11号袋状竖穴



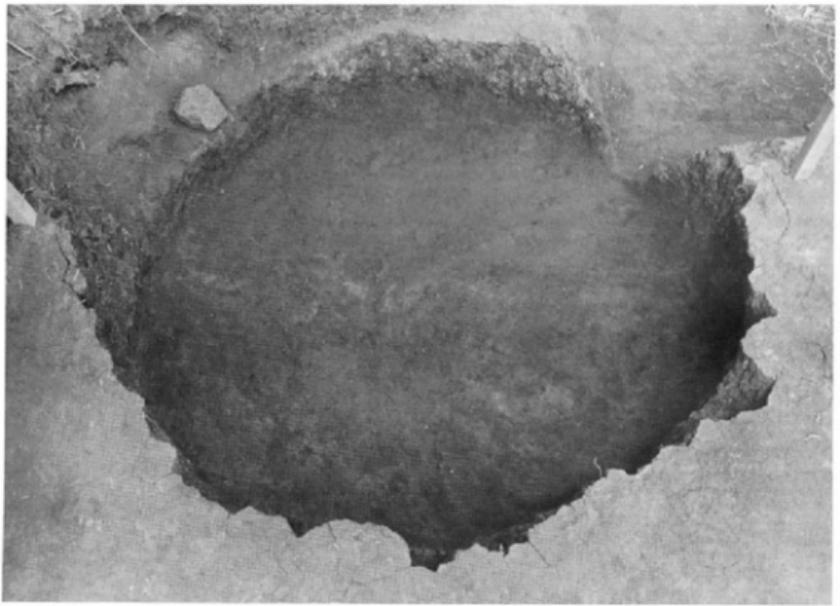
A—3区第11号袋状竖穴出土石器



A—3区第11号袋状竖穴出土炭化米



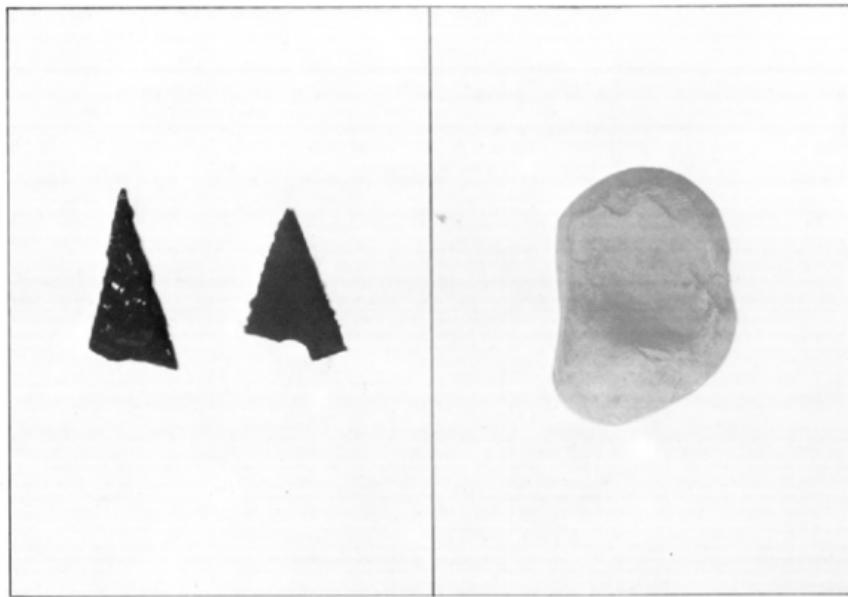
A-3区第12号袋状竖穴・第1・2号土塁（西から）



A-2区第13号袋状竖穴



A—2区第13号袋状竖穴



A—2区第13号袋状竖穴出土石器



A-2区第14号袋状竖穴・第6号竖穴（南から）



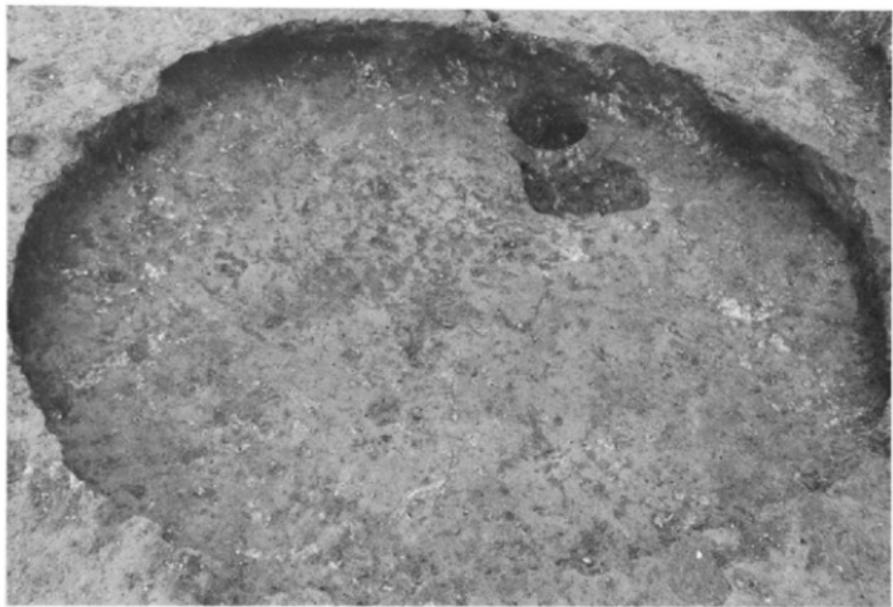
A-2区第14号袋状竖穴・第6号竖穴（西から）



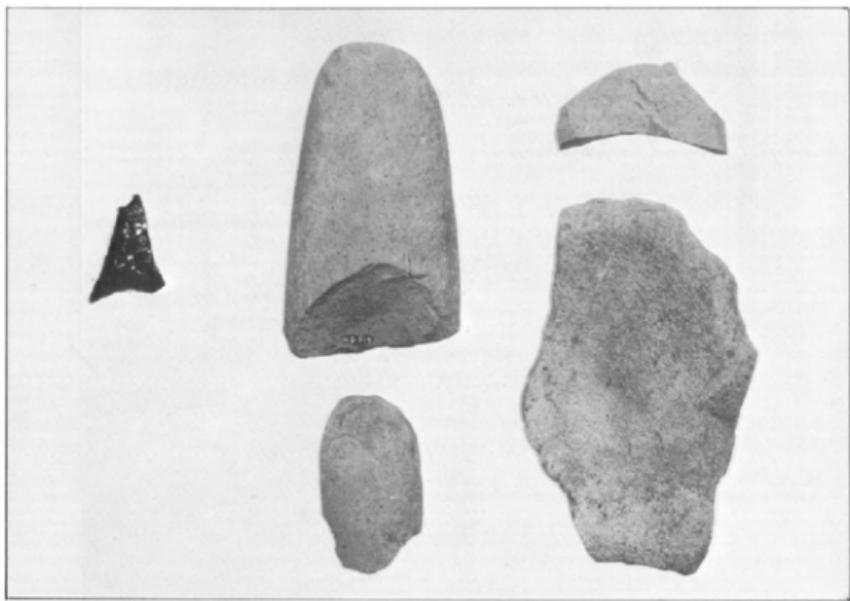
B-1区第15号袋状竖穴



B-1区第15号袋状竖穴（西から）



B—1区第15号袋状竖穴



A—2第14号袋状竖穴出土石器·B—1区第15号袋状竖穴出土石器



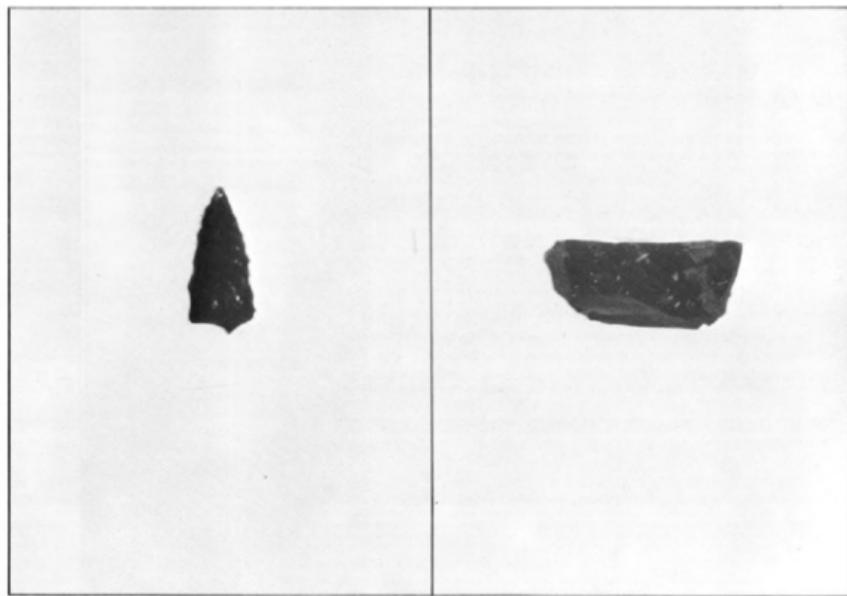
B-1区第16号袋状竖穴·第9号竖穴



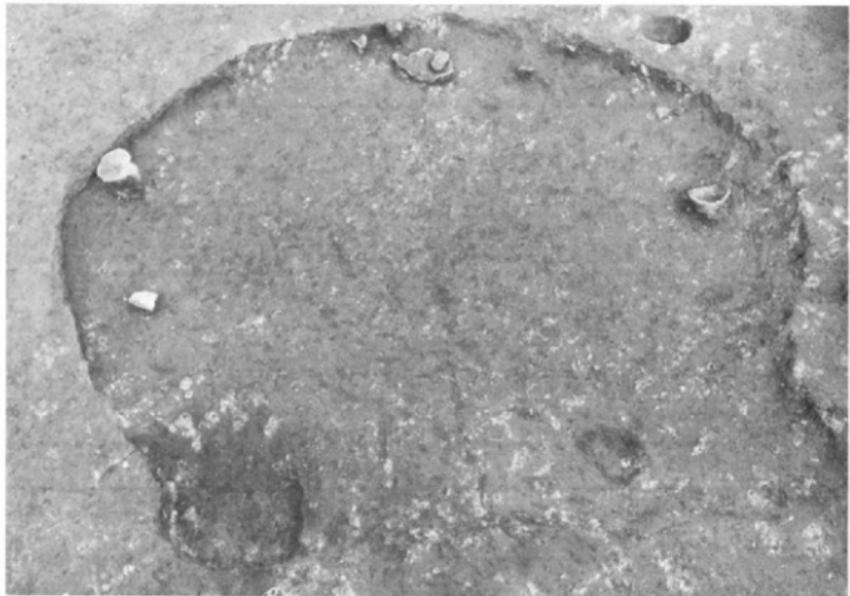
B-1区第16号袋状竖穴东侧断面



B-1区第16号袋状竖穴東側段状部分



B-1区第16号袋状竖穴出土石器



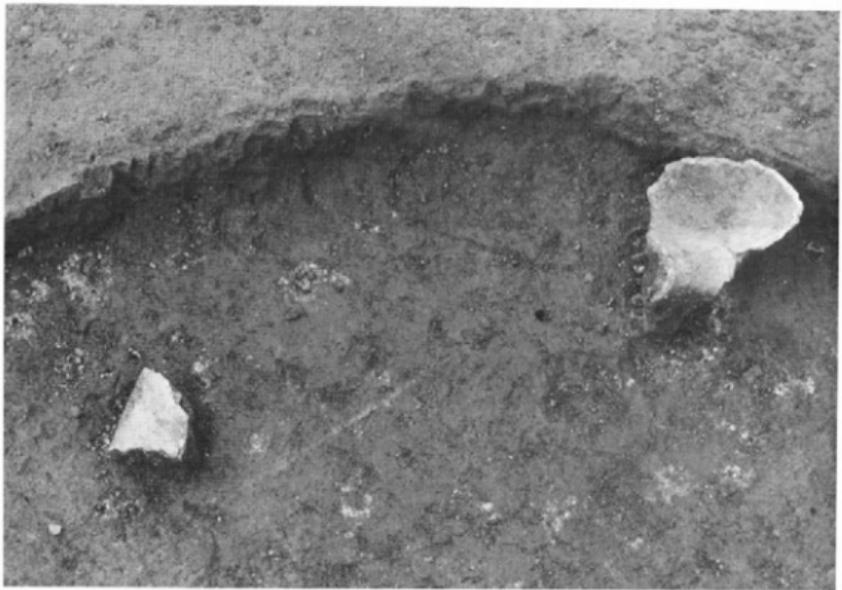
B—1区第17号袋状竖穴土器出土状态



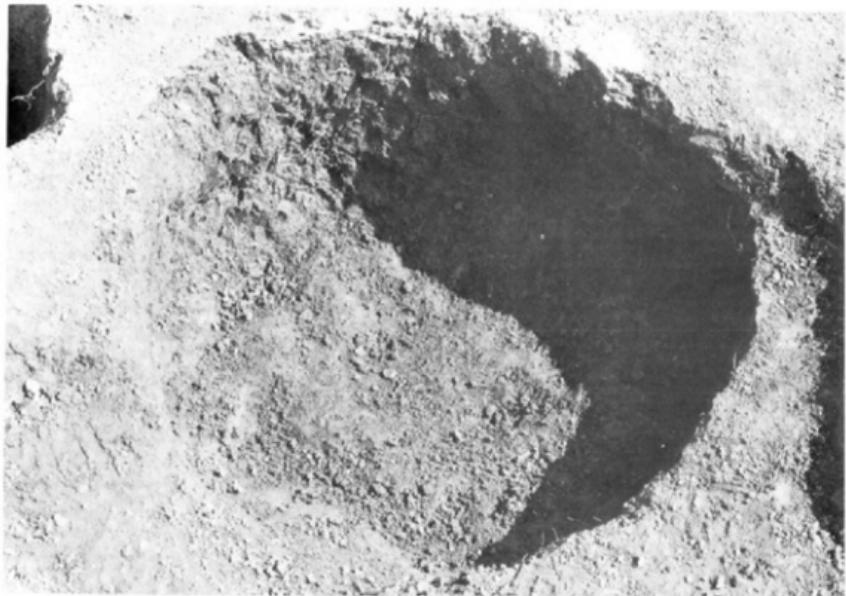
B—1区第17号袋状竖穴土器出土状态



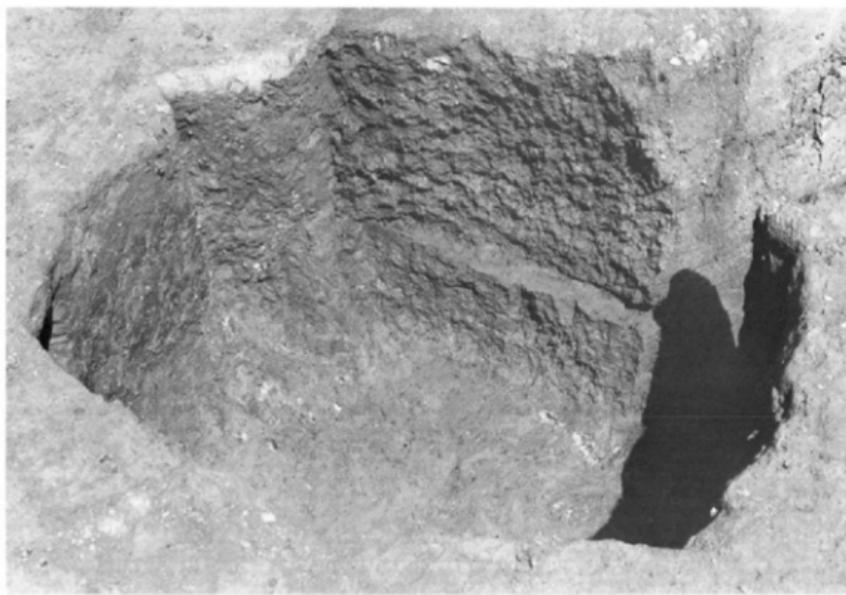
B-1区第17号袋状穴（東から）



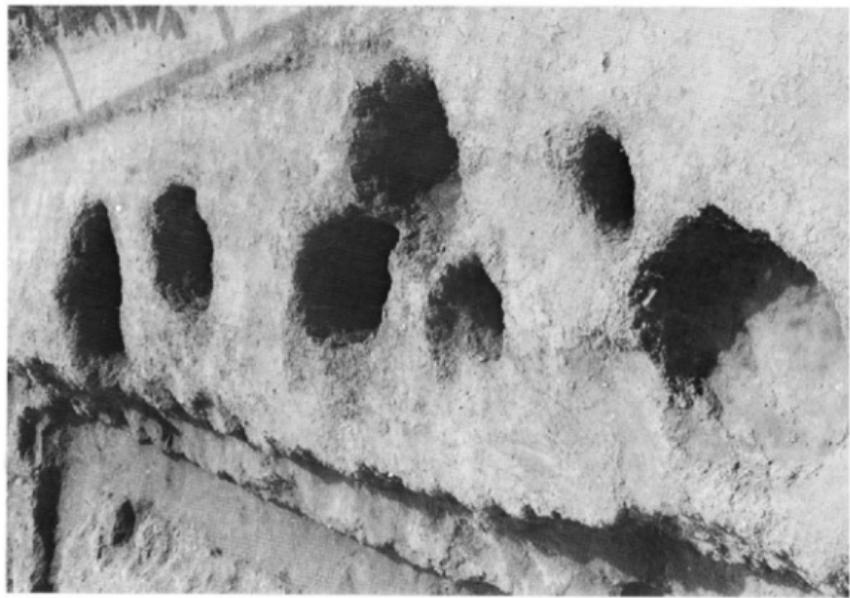
B-1区第17号袋状穴遺物出土状態



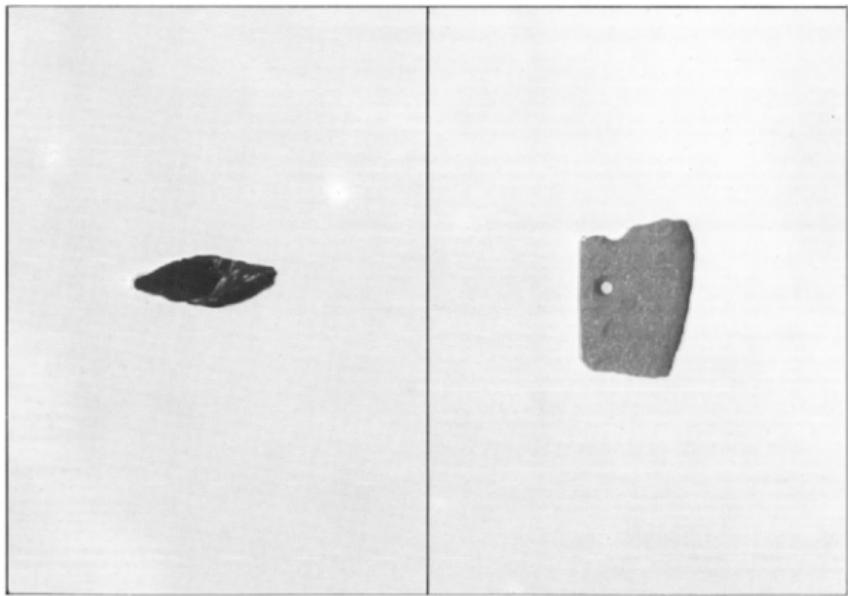
A-1区第2号竖穴



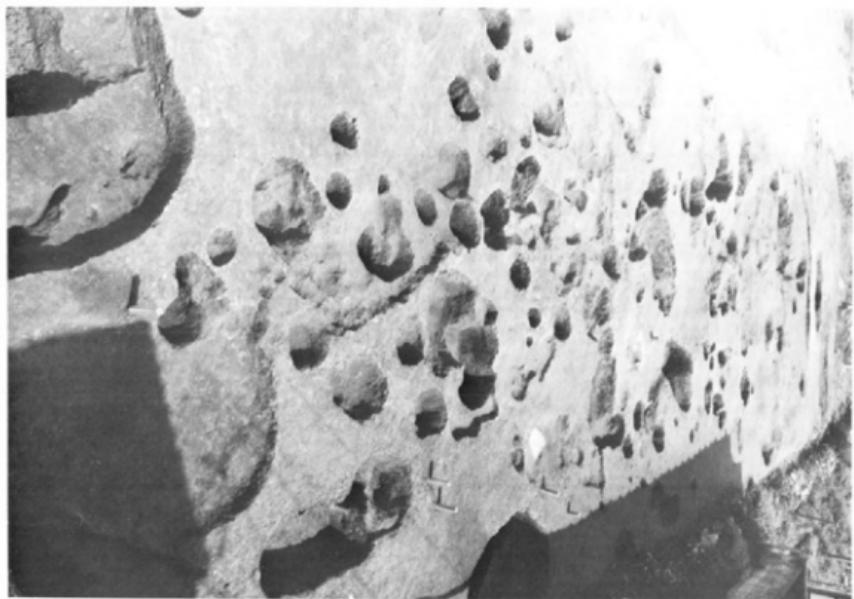
A-1区第6号竖穴



A-1区小砾穴群



A-2区出土石器



A-4区遺構出土状態（西から）



A-4区遺構発掘作業風景（西から）



A-4区第1号住居址



A-4区第103号小砾穴



A-4区第103号小竖穴鉢出土状態



A-4区第103号小竖穴石器出土状態



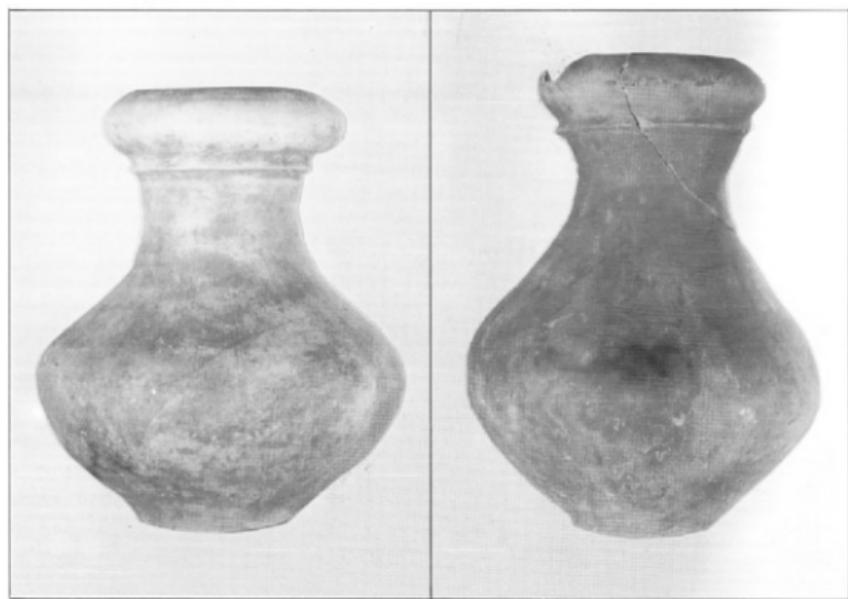
A-4区第7号竖穴



A-4区第8号竖穴



A-4区第1号井戸址



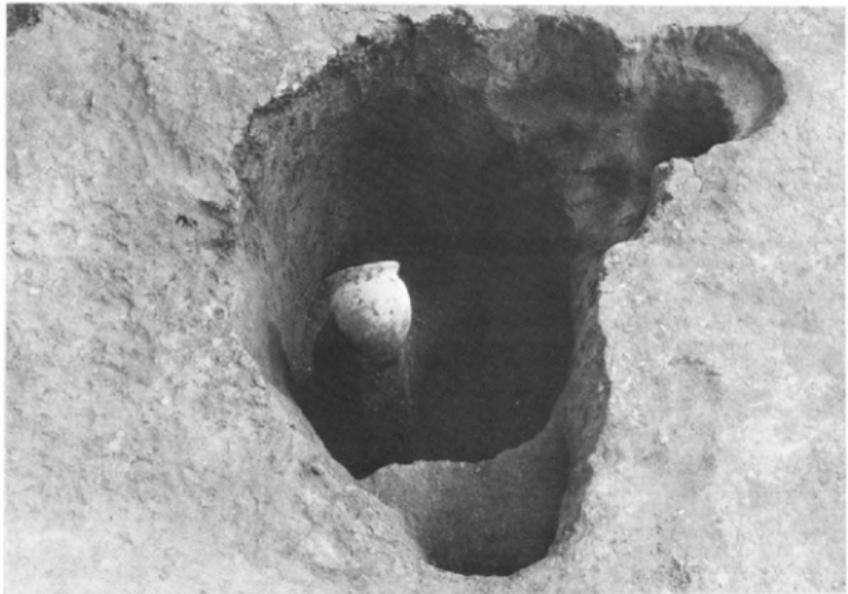
第1号井戸址出土壺



A-41(第1号井戸址出土壺)



A-4区第1号井戸址出土甕・猪の歯



A-4区第1号土塙（北から）



A-4区第1号土塙（西から）



A-4区第1号小堅穴遺物出土状態



A-4区石庖丁出土状態



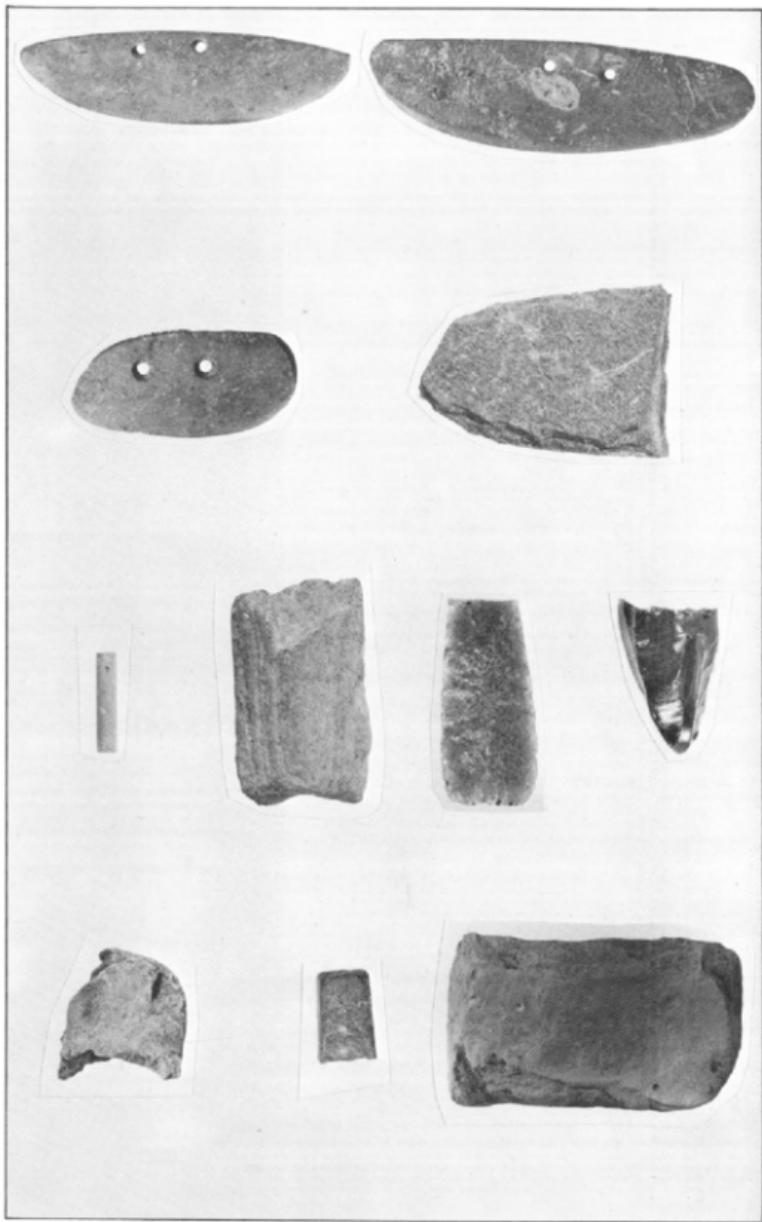
A-4区第107号小堅穴石雑出土状態



A-4区第2号井戸址遺構土製品出土状態



A-4区出土土器・土製品



A-4区出土石器・石製品



板付

県道五〇五号線新設改良に伴う発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第三十九集

一九七七